
南の館の物語

いさき奈那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南の館の物語

【Nコード】

N0156H

【作者名】

いさき奈那

【あらすじ】

南の館に生まれ育ったガートは、自らの存在理由を疎ましく思い館を出る。下界へと下り、色々な経験をすることから成長し、大切なものを守ることを知る。特殊な能力により『都市』と戦う。大切な人、そして己のために。世間知らずの王子様が成長していきます。

とある少年の記憶

プロローグ

『この子はきつと私と同じ病に掛かるわ』

西暦2002年、俺は南の館の第二王位継承権者として生を受けた。

生まれてきた俺を見て、母様は絶望的に言っただけ。

本来、一組の夫婦の間には一人しか子を設ける事がない館で、

母様は二人目を生んだのだ。それがどう意味をもたらすのかは知らない。

ただ、俺の人生は生まれた時から決まっていたのかも知れない。

家族は父、母、兄、そして俺の四人家族だ。

館はとても広くて、とても沢山の人が生活をしている。

両親は館を治める長として毎日忙しそうだった。

そんな中、俺を構ってくれたのは五つ年上の兄だけだった。

両親からも勿論愛情は貰っていたが、俺は兄から受ける愛情が何より好きだった。

だから成長していく上で俺の存在が一部の人間から疎ましく思われているのを

知った。両親が亡くなった時、それはとてもはっきりと姿を見せた。

両親が治めていた時とは違う。幼い我ら兄弟では、良いように利用されるだけ。

俺の存在は兄様を追い詰める存在だと聞いた時、俺は決めた。

『ガート、どうしたのこんな夜更けに』

館の民が寝静まった館内で、兄様の部屋の前で待つ俺に、驚いた顔をして兄様が歩み寄って来る。

ちょっと小声で、まるで内緒話でもするかのように、少し微笑んでいた。

兄様は小柄ながらそれでも俺よりは背が大きい。並ぶと頭一つ分は兄様が大きかった。

『今晚、ここを出ます』

『え?』

廊下を照らす小さなライトの元、兄様の顔に陰りが見えた。笑みが無くなる。

きつとあの噂を小耳に挟んでいた事だろう。

大きな目を更に見開いて、その瞳には絶望が見えた。

『俺はここに居てはなら無い存在です、だから・・・』

『何を言ってるの！？ガートは僕の大切な弟だ！誰が何て言っても良い・・・』

俺の両肩を掴み、必死の形相で兄様は言った。

『兄様、皆が起きてしまいます』

興奮している兄様の口元に手を当てて言葉を遮る。館内に兄様の声が木霊し、壁に吸い込まれていった。

『俺の存在が兄様を脅かす事になるのが、怖いのです』

『そんな事あるわけ無い、一部の人間のいう事なんてお前が気にす

る事ではないよ、
ガートは僕の右腕として館の為に、民の為に、一緒に務めて行けば
良いじゃない』

『有難う御座います兄様、ですが、もう決めたのです』

『ガート・・・』

『今まで、有難う御座いました、どうかお元気で』

『ガート、行かないでくれ、父様も母様も亡き今、お前まで失った
ら僕は・・・』

縋るような兄様の声が俺の背中に聞こえた。消えてしまいそうな程
小さな声。

振り返りたい。でも駄目だ。俺が居たら兄様の足を引っ張る事にな
る。

俺の存在が兄様を脅かすなんて嫌だ。

『ガート・・・』

兄様の最後の囁きが聞こえた。もう、何もかも諦めた様な声だった。

涙が出そうだった。目から零れるのを抑えるので精一杯だった。

俺は家を出た。五年間暮らした、南の館を。

第一章

とても疲れていた。身体を覆う衣類と、その周りの暑く苦しい風。足元を掬う一面の砂。

自分が歩いてきたその跡すらも残す事の許されない、砂の世界・砂漠。

さらさらとする砂は、見る分には何も問題はない。しかしそこを歩くととなると話は違う。

唯でさえ照りつく太陽。それを反射する砂。頭から、足の裏から、そして体中から熱を

受ける。フードを被っていても、分厚い靴底の靴でも、全く意味を成さないようだ。

最悪な地帯を、もう長い事歩いている。怖ろしく喉が渴く。力を込めて歩こうにも

砂がそれを崩す感じた。幾度か堪えきれずに砂の上に倒れこんだ事があつたが、そこは

熱された鉄板の様だった。当然だ、ここは灼熱地獄。そういう世界。

四方八方、砂だらけ。砂漠に入った時、方向感覚を失った。景色が変わらないのだ。

岩石砂漠ではなく、ここは砂丘。風が吹くと砂は流され、綺麗な模様になっていく。

しかし、そんな物を見て凄い、と思うのはほんの一瞬だけだ。その後は地獄と化す。

夜になると、ここはまた地獄だった。日中の灼熱地獄とは全く異なり、夜はまるで

氷河地帯にでも居るかのように冷え込む。初日はそれだけで死んでしまうのではないかと

思うほどの温度差だ。身も心も休まる時がなかった。

日が昇る方が東、沈むのが西。それを覚えて東に向かってひたすら歩いた。

歩くうちに日は高くなり、俺の頭上を通る。そして沈むと背中越しに光が見える。

コンパスも言う事を聞かなくなるこの地帯では、それしか方法がなかった。

だがそれすら思い浮かばないほど、この世界は厳しかった。暑さ、寒さが一日で極端に

変わるのだ。同じ地帯だというのに、自然の恐ろしさを、痛感した。だが、それだけでは

なかった。暑さで頭がおかしくなるのか、それとも願望か、オアシ

スが見えることがあった。

勿論殆どが蜃気楼。幻に過ぎない。本物もあるにはあったが、幻のほんの何割にしかならない。

それでも、あるだけましだろう。命の水、その意味を最も痛感した。食料は殆どなかった。水のみで生きながらえ、歩き続けた。髪も髭も伸び、砂がまとわり付く。

遠くの方にたまに竜巻でも見えれば、その場に立ち尽くしたりした。もしあれが

間近で起こったら、あれに飲み込まれてもしたら身体は細切れになっ
てしまっただろう。

その方が幸せかもしれないとも思えた。こんな地獄を終わらせるこ
とが出来る。しかも災害だ。

自害ではないのだから。それでも、望むだけ無駄で、死神は俺の元
へと降りてはくれなかった。

『まだ生きる』とでも言うのだろうか？それとも『苦しめ』と言っ
ているのだろうか？

俺の場合は、後者かも知れない。

こうして歩き始め、幾年が過ぎたのだろう。唯一人歩くだけ。自分
の姿を見ることが無く

確認しようとも思わない。ただ、幾つもの町や村が滅び、地球の温暖化は酷くなり、砂漠化は

広がる。廃墟となった建物は全て崩れ、砂に飲み込まれていく。残っ
ていても、木片が砂に

晒されている位なもので、家捜しを出来るような残り方はしていない。人どころか、アリも

いない。いや、砂漠なのだから例えるならばサソリの方があっている
だろうか。それさえも

俺は見えていない。自分以外の生き物がいるとは思えない。これが、
地球なのかと疑問に思う。

『水の惑星』と謳われた青い地球は、どこへ行ってしまったのだろ
う。食事も出来ず、水すら

口を濡らす程度しか得る事の出来ない今の俺にとって、考え事すら
面倒な作業だ。次倒れたら

もう起き上がることは出来ないのではないかと思うほど、弱って
いた。

#2

「あれは、一体何だ？」

太陽の光で視界が霞む。嫌な揺らぎが見える。目の前で火を燃やしているようにも見える。

その奥、陽炎のように、何かが俺の目に入ってきた。黒い影。何かがある。しかし、旅に出て

極まれにそうして目に入るのは幻が大半だった。だから今回もそれだろう。

そう思い砂を掬い上げるようにして前へと進む。しかし、それは消えることが無かった。

うつすらとしかし確実に俺の目の前にそれは存在した。テントだ。所々破け、熱と風の所為だろうが古く見える。

触れてみると意外に新しいようだ。しかし誰が何のためにこんな砂漠の中にテントを張ったのだろう。

何年も経っていないのが分かった以上、この地に俺以外の誰かが存在している。

それがはっきりとした。少なくとも人だ。どんなに世界が変わろうとも、獣にはテントは張れない。

暫しその場で考え込む。落ち着く、と言った方がいいかも知れない。残り僅かな水を口へと運ぶ。

ほんの一口分の水。それだけでも死に掛けている脳みそを起こすには十分だった。気を集中し、耳を澄ませる。声は聞こえない。気配すらない。ゆっくりと歩を進め、入り口へと回り、

音を立てないようその中を覗き込む。外は明るいが、テントの中は薄暗い。それ自体が黒、いや濃い群青色とでもいうのか、余計に影が濃く見える。そして何と言っても蒸し暑い。久しぶりの感覚だ。

不思議なおいもする。テントの匂いと中にある何かの匂いだろう。その中で食べ物の匂いもした。

誰かがまだ利用している可能性が大だ。人影は無い。今はどこかへ出ているのだろうか、それとも定期的にここに来て、何かをしているのだろうか。分からない。だが取り合えず留守中だと分かった以上は食料と水の確保がまず第一だった。テント内は狭く、大きさの異なる箱が無造作に置かれていた。

足元を見ると、砂だった。覆うだけのテントなのか、それとも強風で中に砂が攻めてきて床の布が隠れてしまったのか、それは不明だが砂だ。直射日光でない分、外よりはましだった。

真ん中に台があり、それを囲むように一片を抜かして箱が転がっていた。そこは通り道やここを使う者が座るためのスペースのようだ。台の上も物が散乱している。よく見えないが、俺にはあまり関係ない物の様だ。

口に出来ないものは今は用が無い。そこだけでなく、隣にも小さく

スペースが設けられていた。

そこも箱だらけだったが、食料があった。乾パンの様な物。干飯。乾物が主だった。

それでも無いよりましだ。箱も開き、中を覗く。俺から見ればガラクタに過ぎない物が沢山あった。

元の場所に戻り、台の周りの箱を漁る。その影に砂埃を被った見慣れたものがあつた。中のものは揺れ、光る。

水だった。全体を探して見つかったのは乾物が3袋。水は2リットルボトルが二本。それと飲みかけがあつた。

勿体無かったが、それで水の容器の汚れを流し、自分の喉を潤した。二口、三口と飲むのはとても

久しぶりで、生き返った感じがした。固まり始めていた身体も、頭も再起動を始める。まるでオイルの切れたロボットのようだ。空になったボトルを地面に落とした。その時、後方で風が吹いた。

『貴様、何者だ!』

#3

くぐもった声。嫌な空気。どうやらこのテントの主が戻ってきたらしい。殺気が漲る。銃を持っているのか

安全装置を外す音がした。少しずつ俺に近づいて来る。

『おい、こちらを向け!』

そう言った時その者は俺の間合いに入っていた。一瞬で背の剣に手を伸ばし、振り向き様に切りつけた。

鈍っていたが、その者の首と上腕部の間を剣が切り裂いた。小さく叫び声を上げ、夥しい量の血を

噴出し、その場に倒れこんだ。身体は痙攣を起こし、暫くすると動かなくなった。

人を切るのは好きではない。命を奪うのは、どちらかといえば嫌いだ。しかし荒んだこの世では、自分の身を守る

ために、已む無く殺す事もある。

「変な格好をしている、この暑いのに」

上下共に黒い衣装を纏っている。見たことの無いその衣装。そして頭には帽子の様なメットの様な、

少し頑丈なもので出来ている物を被っていて、更に鼻から口元にかけてマスクをしていた。

何とも怪しい。そして出ている皮膚は、とてもではないが生きている人間の物とは思えぬ位、青かった。

蒼白、という感じだ。銃はその場に転がり、衣服から何かがはみ出していた。スプレー缶の様な物。

それを見て、その者が何故そんな異形な格好をしているかがわかった。それは毒なのだろう。

俺が振り向いたら噴射をするつもりだったのだ。そしてずっと背を向けていれば、銃殺。どちらにしても

怖ろしい話だ。それでも、どちらでもこの程度の者では、俺を殺す事は不可能だ。しかし、一人でも

こうしてテントに来た。ということは、続いて仲間が来る可能性も、無くも無かった。荷物を整理し、

腰の鞆にしまい込み、床で朽ち果てたその者には落ちていた布を被せて置いた。テントを出る時も

辺りを見回し、気を集中し、誰も居ない事を確認した。幸い今のところ察知する物はなかった。

なるべく早くにここを離れた方がいい。そう直感してまた東に向かい歩き始めた。数分振りに纏わり付く

熱気と砂。それでも水分補給と休憩をしたので少しは楽になった。

『あーあ、酷えの、血の海じゃん』

血の気が引いた。テントから二、三メートルは離れていた。しかしその声は俺の耳に届いた。確かに

誰も居なかったのだ。中にも、無論外にも。先ほどとは違う。ちゃんと集中していた。それでも

気を捉えることが出来なかった。となると、今テント内に居るのは、相当な能力者であることが

判明する。足が固まる。早くこの場を離れなければいけない。分かっているのに、硬直している。

何かがテントの中を移動している。姿はまだ見えない。ゆっくりとその者は姿を現した。小柄な体。

そして、離れているのに何とも印象的な、燃えるような両の眼と髪。肌の色は黄色人種と同じ。

恐らく、俺がつい先ほど殺した者の仲間だろう。

纏っている空気も、内に隠している能力も、半端ではないらしい。ちから

身動きが取れない。

『お前があいつを殺したのか？』

その者は俺に普通に問いかけてきた。殺気は感じ取れない。しかし、裏がないともいえない。

唯小さく頷いた。それしか出来なかった。

『へえ、巧い殺し方だな、慣れてるのか？小さいのになあ』

笑って言うが、俺から見て相手も十分小さい。年も、変わらないくらいだろう。決して笑いながら

問いかけるような事ではない。奴は少しずつ歩み寄ってくる。

「そんなに、場数を踏んではないない」

そう、正当防衛というもの。赤い髪を揺らし、こちらに歩むその者の足は、本当に砂を掬っているのかと

疑いたくなるくらい、軽やかに動いている。しかしテントの周辺には居なかったのなら、相当遠くから

ここまで歩いてきたという事になる。いくらテントの中で少々休んだとはいえ、そこまで早く歩けるとは

思えない。それくらい歩が早いのだ。

『へえ、久しぶりに巧い見たからさ、嬉しくなって、そっか、慣れていないのか』

拍手をしながら笑って言う。そうこうする内に俺の正面まで来ている。ここまで来ると確認できる。

確かに気配がある。それなのに先ほどは全く感じ取れなかった。疲れていたただけなのだろうか？睡眠も

まともに取れていない。栄養も水分も全く足りていない。その所為なのだろうか。

「お前は一体何者だ？」

『んーオレ？オレはお前とは敵、になるかな、一応さ、テントの中で死んでる奴の仲間なんだよ、つつつても

あんなに弱くないぜ？オレはな』

そついつてまた笑う男の足元は血が付いている。俺が出て行った後、

あえて死体は見えていないが、かなりの

血液が地を覆っていた事だろう。それでも床にも砂がある。っていう事は大抵の血は砂が吸ってしまう事に

なる。それなのに足元に血が付いている。ということとは、あえてこの男は死んでいるその者を弄ってきた事になる。

悪趣味だ。それとも、踏みつけてきたのだろうか？傷を見るために蹴り飛ばして転がした、とか？

どちらにせよ、想像したくない。この暑さでテントの中はきつと凄じ事になってる筈だ。

腐臭が充満しているだろう。思い出すのも嫌だ。

4

『おい、お前どこから来た？見たところ余所者だよな、名前は？』

固まってる俺の目前まで来て問いかける。心なしか楽しそうに見えるのは気のせいだろうか？口元は笑って

いる。しかし、目は笑っていないかも知れない。その奥は、鋭い物が光を発しているような気がする。

「南の館、こことは異なる空間から来た、名はガート・ジルヴァントだ」

『へえ、本格的な余所者なんだな、面白い、オレは焰^{ほのう}、紅蒼の焰、お前能力が強いみたいだから

分かってるみたいだが、とりあえず能力^{ちから}は持つてる』

確かに、分かっていた。その目も髪も、全てで焰の凄さを、能力の強さを表している様だった。

『そんでな、テントン中で腐ってる奴、仲間つつつても肩書きだけなんだよ』

「?どついう意味だ?」

能力の違いや、動き、纏っている空気。どれを取っても焰との共通点なんて見当たらな。でも、さっきは

仲間と言った。でも、違う。肩書きとはどついう事だ?

『オレ、お前と同じなんだ、余所者なんだよ、一匹狼な性分でな、住みかだけ借りてるようなものだ、役割としては

殺し屋・・・と言ったほうが響きがいいかな』

笑いながらさらりと言い放つ焰。その目は先ほどとは違う、強い光を持つ。野生の、獣の目だ。少しでも

動いたら、俺は焰と一戦交えなければなら。そんな気がした。嫌な汗が出てくる。

『そんなに身構えるなよ、確かにここに来ている余所者を掃除してくるように言われたけどさ』

その言葉に、少し考えた。何時ここに来たのがばれたのだろう。まさか、テントの中の奴に何か発信機でも付いていたのだろうか?それが何か衝撃を受けたら、本部に連絡が行くような何かが。

『ガート、一応言っておくが、オレは奴が死んで、それから飛んできたんだ、お前も同じだろう？飛べるな？

あいつら脳内にチップが埋め込まれてるんだ、だから脈が止まったその時点で連中は気が付く、まあ、オレが

殺した、と取る場合もあるかも知れないけどな』

どうやら、焰はその仮の仲間と相性が悪いらしい。だがあの程度の相手では、焰の準備運動にすら

ならないだろう。死に損だ。それでは。

「俺も、殺すんだろう？」

『は？何でさ、殺さないぞ？』

間抜けな一言だったのだろう。目を丸くして返してきた。その返事には俺も不思議だった。

『だってガートは強い、これからもつと強くなる、今こんなところで潰してもつまらない、勿論、今もし

戦ったとして、オレだって無傷では済まないだろうし、無駄な事に体力を使うのはオレのポリシーに

反する』

腕を組み、鼻息を荒くして答える焰。やはり少し変わり者のように思える。

「だが、上からの命令なんだろう？逆らっていいのか？」

『知ったことか、あいつらオレには勝てない、そうだな、頂点に居る奴なら、オレでも負けるか、だが

やばくなったら逃げる、逃げるが勝ちって言うだろう？』

そう言って笑う。その表情は幼く見える。これが殺し屋の顔だろうか？本当に自ら選んだ道だろうか？

5

「なあ、お前を雇ってるっていうのは、一体どういった連中なんだ？」

息を呑んだ。まともに返してくれるか分からない。仮にも俺は敵なのだ。焰は腕を組んだまま、

少し考えるような表情をした。

『ま、いいか、オレあんまり関係ないし『都市』（とし）だよ』

「『都市』？それって大きい町の名称っていうか、それが組織の名前なのか？」

『違いねえ、確かにおかしい名前だがこれがぴったりなんだ』『都市』はとある村の中心核の中へと入り込み、そこに居た連中全てを洗脳し、村全てを乗っ取ったんだ』

だから『都市』か。そのものずばりな名前な訳だ。気違いの集まり、って訳だ。

「という事は俺がさつき殺したあいつは」

『ああ、『都市』の者だったか村人だったか、ってことか？どつちでも変わらないさ、本人の意志なんて微塵も残っちゃ居ない、単なる操り人形だ』

でも、俺は人を殺したんだ。それだけは、変わらない。

もしかしたら苦しみぬいて、心の底では意志が残り、必死で打ち勝とうとしていた者かも知れないというのに。

『ガート、お前人の心配している場合じゃないぞ？』

考え込んでいた俺に焰が深刻そうな顔をして言った。

『オレがここに来たのは、確かに余所者が居て、仲間が殺されたからそいつの代わりに余所者の始末、それだったが、お前間違いないかもう『都市』の頂点、主に存在がバレてる』

その一言で、我に返った。主。懐かしい呼び名。『都市』の主。かなりな能力者だということ位しか分からない。

『お前能力が強すぎる、存在感が大きいんだ、間違いなく主はもう

お前の気を拾っている、とはいえオレ以上に能力が長けているものは主以外にはいない、それに主自ら動く事は殆ど無い、だから安心は出来る』

運がない。早く言ってしまえば、ただそれだけの事。

だが焔に会えたのは運がいいと言えよう。俺だけでは知ることが出来なかった情報が入ってきたし、気持ちを落ち着ける事も出来た。

問題はこの先どうするかだ。

無意識に腕組をして考え込む。それを見て焔は笑った。

『ガート、まあ落ち着け、いい事を教えてやる』

そついうと俺の肩を軽く二・三回叩くと、遙か彼方を指差す。見渡す限りのその砂漠を。

『この指の先、ずっと真っ直ぐ進むと村がある、やっと生きているような小さな村だ』

「村？人が居るのか？」

『襲われていなければな、つつつても片手に余る位かも知れないけ

どな』

その指は、焰が言うには南らしい。今まで進んできた道とは違う方角になる。だが無心で進め、と言われた。

『村はな、少し前に『都市』の被害を受けたところだ、だからあまり期待をしないほうがいい、だが小さく気配を感じ取る事は出来る、まあ少なくとも一人や二人は居る事だろう、そこで落ち着けばいい』

笑ってアドバイスをする殺し屋。本当に焰は人を殺した事があるのだろうか？無論身体から染み出てくる能力の強さを見れば、かなり強い。

異能力者は今の世では珍しくはないだろう。だが、それでもかなり上だ。

純粹に殺しが好きな者だったら、出会い頭で殺されていただろう。出会ったのが焰の様な性格で救われた。

『じゃあな、生きてたらまた会おう、ガート』

笑って俺の出発を見送る焰。その笑顔の裏には、計り知れない冷酷な顔を持ち合わせているとは、とても思えない。

そして、敵である俺を逃がす事で、焰が本当にお咎めがないのかど

うかが心配だった。だが、そう問いかけたところで笑って流すに決まっている。

一度聞いた以上、二度も同じことは聞けない。今はただ焰に言われたとおり、南に進む、それだけを考えるしかない。

『それにしても、ガートは暑くないのかね？オレは自分の能力だし、慣れてるけどさ、こんなに暑い地はそうそうない、でもまあ、あれだけ強ければまた会える確率が高いな』

既に南を目指し歩を進めていた俺は、その後の焰の行動を見ていない。

見たところで、きっと何も変わらないだろうし、気持ちは南に向いていた。焼け付く砂漠を、また歩き始めた。

それでもずっと歩いていた頃よりは、幾分気持ちが楽だった。休んだからか、水分を摂ったからか。

また、焰という人間に会ったからか。全てがそこに結びつく事だろう。

村があり、そこにはもしかしたら生き残りが居るかもしれない。

そついった希望が、俺の中に沸き立ち、抑え切れない衝動になっていたのかも知れない。足取りは軽い。

この先には、光がある。ずっと独りだった。それでも構わない。

そういう思いから旅を続けていたのは確かだ。しかし、それは思った以上の孤独との戦いだった。

昼間の焼け死にそんな暑さ。夜の冷え込み。誰かが居れば、例え苦しみでも分かち合える誰かが居れば、苦しみだけではなかっただろうに。

お互いを支えにして、生きる事も、出来たのだろう。それでも、故郷を捨て、旅を選んだのは自分の意思なのだ。

今更引き返せない。焔は共に進むことは出来ない。だが、この先会つかも知れない人間は、共に過ごす事が出来るかも知れない。

この先の人生、共存できる相手かも知れない。

そう考えたら、足は勝手に早くなる。見えもしない村が、もうそこまで来ているような、そんな気がした。

焔に会ってどれだけが過ぎただろう。水はボトル一本の半分を切り、食料も後僅かだった。その間、崩れ落ちた村は幾度か見てきた。

建物の影が見えるたび、あれだろうか、ここだろうかと期待をしたり、嬉しくなったりした。だが全て、廃墟だった。

食料はおろか、建物すらまともに存在していない。希望も、消えかけた。それでも焔の言葉を捨てきれない自分があった。

甘え、弱さ、そういったものだろう。一度とはいえ人と接してしまった。その上でまた、他にも居る。

そう思つたら、諦めきれない。食料も水もある。

きつとまだ先なんだと自分に言い聞かせた。幸い、焔にちょっとしたアドバイスを貰い、今までよりは砂漠での旅が楽になった。とにかく暑い。

だから無駄に水を飲まないようにしたり、なるべく衣類で影を作り進む。

冷え込む夜は、ありつたけの衣類を身にまとつて、体温を温存した。

そうする事で次の日の日中は、幾分楽に動けた。そんな事を繰り返していた数日後、俺の目には不思議な物が見えた。枯れていたが、

それは木だった。砂漠に木は生えない。いや、全くないとは言えないのだろうが、俺は見たことが無かった。

そしてその元を見てみると、そこは砂ではない。土だった。そう、砂漠の終わりだった。

崩れるように足から落ちる砂。それとは全く違い、足を踏み込む事の出来る、土。地面。

どれだけぶりの感触だろうか、少し痛みも感じる程の硬さに、少し驚く。

木へと近付き、触ると、それは既に水分が欠片も残っていない。乾いた木だった。それから辺りを見渡した。

岩があつたり、枯れ落ちた木々がある。それくらいで、建物の残骸

は無かった。だが、それでも南を目指す。

違う地へと来ただけでも、進展をした、と言う事になるのだ。食料が尽きた。残るのは数センチ入っている水だけだ。

木が生きていれば、その根っこだって食べられないわけではない。

焔を信じる気持ちと、弱さで参ってきている気持ちとが複雑に絡まりあっていた。

不意に、風が吹いた。砂漠とは違う、涼しい風。

それに乗って何か懐かしいような、鼻を擽る様な匂いがしてきた。

これは、緑の匂いだ。田畑の匂い。それに釣られて、更に進む。

既に日が落ち、目は殆ど利かない。見えたところでそれが本当に植物なのか、それすら分からないような状態だ。

6

「何だあ」

遠くのほうから、重い音がする。機械のぶつかり合う音。独特のオイルの匂い。

そして小さな光。手前には建物の影らしき物が見える。そうは言っても、また廃墟かも知れない。形は残っていても誰も居ないかも知れない。でも、気持ち騒ぐ。

この匂いも音も、偽者ではない。誰かが居るんだと、本能的に俺は悟った。

そして、目の前に、こじんまりとした家が一軒建っていた。崩された跡がある。

だが綺麗に直してある。誰かが居る。そんな気がした。ゆつくりと扉を開いた。

辺りは真っ暗闇で、家の中も暗い。集中力のない中で、それでも気を張り巡らせて影に誰か居ないかを探った。結果、誰も居ない事が判明した。

安心していいのか、残念と思うべきか、それは紙一重な感情だった。だがとにかく、何かを食べたかった。

水も飲みたい。頭の中の欲求は、それで埋め尽くされていた。

足元も見えない家の中を、手探りで進む。嗅覚はかなり良く利く様になっていたから、食料や水がどの辺りにあるかは分かった。そこまで行き、匂いと手探りで探した。

素早く一つ一つ取っては匂いを嗅ぎ、区別をする。その繰り返しをした。

缶詰もあつた。でもそれは直ぐには口へ運べない。

そういう物は一度脇に寄せて違うものを手にした。神経を手先と嗅覚に集中していた。

普段なら、蚊の羽音すら聞こえる俺だが、弱っていた所為か注意力が欠けていた。

またそれを思い知らされた。

「誰か、そこに居るのかい？」

転がっていた芋を口へと運ぼうとした時だった。

後方からまたしても声を掛けられ、電気を付けられた。

振り返った時、俺の目には一番に電球の光が入り、久しぶりすぎる作り物のその明るさに目が眩んだ。

まともに目を開く事が出来ず、またそこに佇んでいる者がどうい

者なのか、それすら分からなかった。

逆光に似たその眩みの中、ただその者が歩み寄って来るのだけがあった。

「こっちに来るなーっ！フォース！」

反射的に右手でこぶしを作り、相手に向ける。言葉と同時に俺の右手の指輪から光が発される。それは単なる目晦ましではない。

気の塊のようなもので、手加減をしなければ家を吹き飛ばす事も可能な能力だ。

「なに？」

相手が、そう呟いたのが聞こえた。その後は、この家の玄関が吹っ飛ぶその音しか耳に残らなかった。フォースの反動で俺は尻餅を付き、ついでに背中も打った。

砂埃が起こり、玄関、そしてその辺りの屋根や壁の崩れる音が暫くしていた。

電気がついていいるお陰で、と言うのも変だが、どの位壊れたのかが分かった。とりあえず、玄関付近はめちゃくちゃだ。

瓦礫が山となっている。ぽっかりと家が口を開けている感じた。

「また、殺した・・・」

自分自身の手を見て、震えが止まらなかった。やっと会えた人間を、殺してしまったのだ。それに会う為に来たのというのに。

また独りだ。もし他に居たとしても、俺は一人殺している。きっと他の人間も、俺を受け入れてはくれないだろう。途方に暮れた。

「い・・・痛い」

涙がこみ上げてきた時、俺の耳に呻き声が聞こえた。

『い・・・痛い？』

ふと、玄関のあったその瓦礫を見る。内側から掛かる力で瓦礫が少しずつ崩れていく。

「・・・っあーっ痛い！っつか酷い！何だこれ！？」

真っ白になって出てきたそいつは、体中をはたきつつ、その崩れた家を見て呆然としていた。

久しぶりの術。無論突然すぎて手加減なんて一切していない。

しいて言うならば、空腹だったり、喉の渇きだったりで本調子ではなかった。それくらいだ。

なのに、そこには光をまとい、一人の人間が立っていた。

「あのねえ君、人の家壊さないでくれる？これでもやつと直して大切に使ってる家なんだから」

振り返ると俺の元へ真っ直ぐに進んできて、手を腰に当てて言った。

光は、まるで後光のように見えた。観音様が背負っているあの光。

そう、俺にはこいつがそんな風に見えた。顔や手足には、それなりに怪我をしているようだ。見えないが匂いで分かる。

「ちょっと君、聞ってるのかい？」

反応のない俺の目の前で手を左右して問いかけてきた。

いろんな意味での驚きで、意識が遠退いてしまっていた。

焰に続いて二人目の人間。ただ、焰とは違い、とても穏やかな顔をしている。

一見若そうに見える。俺の所為で今は白くなってしまっているから、髪の色は良く分らないけど、目は真っ黒だ。

そしてそいつは怒っていたかと思うと、優しそうに微笑んだ。

「食べ物を探していたんだね、お腹が空いてるんだ？」

俺の頭の砂を払いながら問いかける。手に持っていた芋や、脇にある缶詰を見てそう判断したと見える。

その言葉に、俺は空腹を思い出し、腹が鳴った。静かな空間で、俺の腹の音はやたらと目だって聞こえた。

「はは、正直なお腹だね、ちょっと遅いけど、何か食べられるものを作ってあげよう」

笑ってそういうと、脇にあった缶詰や乾麺等を拾い上げ、俺の頭を撫でて奥へと向かった。

暫くすると、水を使う音。包丁で何かを切る音が聞こえてきた。そして火を使う。

その仄かな暖かさが、少し離れている俺のところまで来た。何だか落ち着く。

変に嬉しいような、ここに居てもいいのか、そんな違和感があった。

「お前、俺の事殺さないの？」

とても変な事を言った。そう思ったのは男が手を止め、不思議そうな目をして俺を見ていたからだ。男は首を傾げた。

「何故君を殺すの？君と僕は、同じなんだ、だから殺したりなんてしないよ」

優しく、そして悲しそうな笑みだった。男はその後、何も無かったかのようにまた料理を始めた。俺にはその言葉の意味も良く分かっていなかった。

頭が、殆ど停止状態だったから、仕方が無いと思う。

「はい、出来上がり」

目の前には湯気を立てた器が置かれた。その前には箸も置かれた。

そしてまた奥へと入ると、水の入ったコップを持って戻って来た。

男は、水だけは二人分持っていたが、食事は俺の分しかなかった。

男は、俺の正面に腰を下ろした。

「どうした、食べて良いんだぞ？冷めるぞ？」

「お前の分は？」

「僕？僕はいいの、仕事の最中に食べたりしてるし、普段はこんな時間には食べないから」

笑って手を振る。そして水を口に含んだ。俺は、とても久しぶりに見る湯気の立っている食べ物に、興味があつた。

何を作っていたかは分からない。だがこれが元は乾麺だった、という事くらいに分かる。

箸を掴み、まだ熱いそれを口へと運ぶ。あまりの熱さに火傷をしてみたりしたが、その間も男は笑っていた。何がそんなに楽しいのだろう。とても不思議だった。

汁を啜り、素朴ながらもとても美味しいそれに、気持ち集中していた。気が付けば、器は空になっていた。

「良い食べっぷりだ、作った甲斐があるよ」

一滴の汁も残さず飲み干し、水を口へと運んでいた俺に対して、喝采を挙げると男は片づけを始めた。

まだ熱を帯びている器を持ってまた俺の後方へと消えていく。

なんだろう、穏やかな、ゆったりとした空気だ。つついその場に寝転がり、辺りを見回す。

これと言って何もない。寂れている家だ。

それなのに、ただ一人自分以外の人が居るだけなのに、何故こんなに嬉しく思い、心が高鳴るのだろうか。

「君、後片付けを手伝って……ってもう寝てるの？」

足音が頭の上まで響いていた。でも目を開く事は無かった。

俺は既に睡魔に襲われていたのだ。こんなにも落ち着いて眠りについていたのは、どれ位ぶりだろうか。その中、俺は優しい腕に抱かれている錯覚を感じた。

暖かく、柔らかい。まるでそう、兄様の腕の中のようなだ。優しくかった兄様。

今貴方は、貴方の居る故郷は、どうなってるのだろうか。

心配すら俺にはする権利は皆無なのだろう。両親が亡くなり、忙しくなった最中、それを捨てて逃げてきてしまったのだから。

それでもこの腕はこんなにも暖かく懐かしい。空気も、歩調も、兄様その物だ。

「兄様……」

夢の中、俺は兄様を呼び止める。こちらを向いて、穏やかに笑う。

俺には制限なく愛情を与えてくれた兄様。手を伸ばしても届かない。空を切る。

俺は遠くなっていく兄様について行こうと必死で走った。そして、落ちた。ベッドから。

「・・・はれ？何で？どこだこ」

見慣れない天井。ベッド。風に揺れているカーテンすら、考えてしまふ。そしてやっと自分の置かれている状況を思い出した。

「ああ、村だ」

ゆっくりと身を起こし、ベッドによじ登る。

半分壊れているようなスプリングが何ともいえない。

例えボロくても、穴が開いてようと、敷いてあるのがせんべい布団だろうと、こうして柔らかい布、綿の上で眠れる事が幸せとも思えた。

暫く、転がり、その柔らかさに身を委ねていた。そしてごろりとまた天井を見た。ふと、手を伸ばすと違和感を感じた。

袖がない。はつとして起き上がる。全身を見ると着ていた衣類が全く違う。

というか着ていたものを着ていない。と言っべきだろう。寝ている間に身包み剥がれたのだ。あれは俺の一張羅だ。

あれしかない。盗まれたのだとしたら、たまったものではない。あれには他にも大切な物が隠されているのだ。

どこにいる。あの男は一体どこにいるんだろう。慌ててその部屋を飛び出した。そこには廊下と階段がある。

どうやらここは二階らしい。他には二扉が二つ。開くと、一つは天井が無く、崩れているところを見ると使っていない。

また直す時間や余裕がないのか、そのままだ。

もう一つの部屋は、ベッドがある。そして小さい棚。それくらいで窓辺にカーテンがある。寂しい部屋。

どうやらここがあの男の過ごしている部屋らしい。これといって怪しいものはない。

だが身元が分かるようなものもない。その部屋を後にすると、突き当たり左にある階段を降りる。

確実に、且つ急ぎ足で。そこは薄汚れているが、最後で右へと曲がっていた。そこは、俺が壊した玄関の手前だった。

昨晚は暗かった所為か、他に気持ちが行っていた所為か、全く気が

つかなかった。

玄関の崩れ方を見て、少し胸が痛んだ。ふと、外から風が入る。

それと同時に、鼻歌が聞こえてくる。広くなった玄関から外を見る。

そこには洗濯物を干している男の姿があった。しかも干しているのは俺の着ていた物だ。

「やあ、起きたね、おはよう」

俺の存在に気が付いた男は、そう言って笑うと、残っている分を干し始めた。外は見事なまでの快晴で風もある。

洗濯日和、という物だろうか。まるで異世界にでも来たかのようにだった。

「それ、俺の」

「うん、そうだよ、失礼かと思ったんだけど、なんていうのかね」

洗濯籠を持って家の中へと入ってきた男は、言いにくそうに俺の頭からつま先までを一瞥した。そして鼻の頭を掻いている。

「何だ、言いたい事があるなら言ったら良いだろう」

「それじゃあ言うけど、お世辞にも君は綺麗な格好をしていなかったし、頭から体から砂埃が凄くて、服もマント、かな？これも凄くてさ、元は黒だったんだね、半分白になってたから分からなかったけど、僕、そのままベッドに入れるのは嫌だったからさ、起きてる内に脱いでもらおうとしたらもう寝てたし、どうかと思ったけど、勝手に脱がせたよ」

それだけの台詞をかむ事も無く、ほぼ一息で凄い勢いで言い切った。

あまりの早口に、俺は啞然とした。つまりはあれか？俺があまりにも汚いから、ひん剥いた、と？我慢の限界だったから洗濯したぞ、と、そういう事か？

「君自身も汚れているね、流して頭洗うかい？それとも・・・」

「失礼な奴だ！だったら起こせばよかっただろうが！人をばい菌みたいに！」

「でも、本当の事でしょう？その服は僕のなんだ、少し大きいけど、小さいよりましだよな」

男はけろりとそう言い返して笑った。どうせ俺は小さい。栄養不足

なんだから仕方ないだろうが！と言ってやりたかった。

パンツすら俺のものではない。同じ男だから遠慮なしか？

上はランニングだろうか、恐らくヘソが隠れるくらいまでの丈なのだろうが、俺が着ると太ももが半分は隠れる。

男として、プライドを著しく傷付けられた。そんな気がした。

「まあそう怒るな、これからが成長期なんだし、個人差はあるし、とりあえず昼飯に近い朝ごはんでも作って食べるかね、ああ、今日はちゃんと手伝う事、僕の家に戻る限りは、それだけは守ってもらうよ」

膨れている俺の頭を軽く叩くと台所へ向かいつつ言った。

8

「手伝う？何を？」

「色々さ、料理、洗濯物を干すのでも畳むのでもいい、掃除、畑仕事、する事は沢山ある、生活していく上での仕事っていうのは案外多いし、大変なんだぞ」

「でもそれは、俺の仕事ではない、それは館の民の仕事だ」

「民？館って？」

俺の言葉に男は歩を止め、不思議そうな顔をして問い返してきた。

「館は俺の住んでいたところだ、民は俺たち以外の住民だ、お前が今言った事は、普通そういう奴らの役割だ」

「君、頭でも打ったの？」

そういうと俺の後頭部を擦った。俺はその手を払いのけ、睨み付けた。易々と触る物ではない。俺を誰だと思ってる。

「俺は南の館の第二王位継承権者だ、馴れ馴れしくするな！」

「それって、王子様ってこと？」

またしても男は俺の言葉に目を丸くした。そして、徐々に頭の角度が下がっていく。

何かあるのかと思うと、身体が小刻みに震えている。俺は少し後づさる。何かするのもかも知れない。そう思った時だった。

「ひやははつつ！！王子様？君が？そんな馬鹿な！？」

男は腹を抱えて笑い出した。どうやら、さっきの震えは我慢をしていたらしい。それを見て俺は頭に血が昇る。

「何がおかしい！俺は本当のことを言っただけだ！」

「はは、でもさ王子様、だったら一人でこんな所で何をしてるの？従者も従えないでさ、それに君が王子である証拠も、何も持っていないでしょう？」

目に涙を一杯ためてその男は問いかけてきた。俺は男に、右腕を突

き出して見せた。

右手には指輪を嵌めている。それは特殊な石で、誰でも持っているわけではない。

石に認められない限り、その石の本当の力を引き出すことも出来ない。

「秘石だ、我が館に古くから存在している特殊な能力を秘めた物だ」

男はまじまじとそれを眺める。中央には真つ青な石。周りはシルバ―かプラチナか分らないが、それは館の紋章を模っている。

勿論この世界の者は分らない、それすらも偽者だと言われてしまえばそれまでだが、そこまでの頭は俺には無かった。

「悪かったよ、そこまでむきになるとは思わなかったからさ、ごめん、独り暮らしが長いとこうして構いたくなるんだ」

申し訳なさそうに苦笑して俺の手を押し返す。喧嘩の腰を折られたようで、俺も何だかばつが悪い感じた。

男はそれから何事も無かったかのように、また流しに向かった。

今日は米を炊いているらしい。いいにおいがしてきた。俺は腰を下ろし、料理をしているその背中を眺めていた。

これと言って何をしていいのかわからない。それが第一だった。

テーブルに並ぶ料理は昨日より沢山あった。それは勿論、俺の分、あと男の分も入っていたからだろう。見かけない料理も多々ある。

地上と館と、できる物が違うのだと、思い知った。

そういえば昨日食べた麺も、館のとは違った。

ただ漠然とそんな事を考えていると男がやっとそろえ終え、俺の正面に座った。

「はいでは手を合わせて、頂きます」

箸を持ち、そう言って一礼すると、食事を始めた。何かの儀式かと思った。

ポケットとしている俺に男は「食べれば？」と声を掛けてきた。

俺は見よう見まねでさっき男がやったとおり、手を合わせて食事を始めた。

9

「そういえば、君、名前は？王子様でもいいけどさ、名前の方が親しみがわくよ」

「俺はガート・ジルヴァント」

「ふーんガートか、変わってるけどいい名だね、僕は加悦膳^{かやぜん}、この世界が滅びると言われた年のその月に生まれたんだ」

「なんだそれ、地球って滅びるところだったのか？」

「ガートはそれすら知らないのか？そうとう世間を見ていないねえ、昔ね、ノストラダムスの大予言っていうのがあって、その中で1999年七の月、地球は滅びるってあったんだ」

「ってことは、今膳て幾つだ？」

「今は2017年なんだから、18歳だよ、ガートは？」

「もう17年なのか？！じゃあ・・・15、になるのかな」

「なんだよそれ、自分の年くらい覚えておきなよ、僕より三つ下か、弟だね」

そういうととても嬉しそうに笑った。だが俺にはそれがわからなかった。他人なのに弟？何故だろう。

血の繋がりがあから兄弟になるのに、他人では兄弟ではないのに。

「俺、兄様居るぞ、本当の兄様が」

「みたいだね」

膳のその返しに、俺ははつと膳の顔を見る。何も話していないのに、何で分かったんだ？

きつと俺の目はそう物語り、顔にもそんな風に浮かんでいた事だろう。膳は、また笑った。

良く笑う男だと、思った。

「昨日、ガートそこで寝てしまったでしょう？二階まで運ぶのはとても大変だったよ、でもね、階段を上がってる時かな、君、寝言で『兄様、兄様』って呼んでた、もしかしていつも抱っこしてもらってた？」

それを聞いて何故兄様の夢を見たのか分かった。膳と兄様を間違えたのだ。

館では親ですら大きくなると抱いてくれる事は無かったが、兄様は違った。

軽々しく、とまでは行かないけど、俺を良く抱き上げてくれた。

久しぶりに人とこうして接する事で、思い出してしまったのだろう。ちよつと・・・いやかなり恥ずかしい。

「良いね兄弟が居て、僕は一人っ子だから羨ましいよ」

「膳は親は？ここに一人って言ってたけど」

冷め始めた食事に手を伸ばしつつ、問いかける。この家は静かだ。

さっき見て回っただけでも、随分と長い事膳が一人で過ごしていたのが分かった。

俺の寝ていた部屋も、掃除はしたようだったが、それでも埃っぽさが残っていたから。

「僕は、六年ここで一人で生活をしてるんだ」

膳の表情が、少し曇って見えた。その時、俺は昨晚の事を思い出した。

「お前が俺と同じって、どういう事なんだ？一人ってというのが同じって事か？」

どついう意味なのかとても不思議だった。でも分からなかった。

きつと頭の回転が鈍っていたからだと思う。でも今聞いてもきつと分からないと思う。

俺が膳でない限り。膳から聞かない限り、分からない。

「ガートと僕の共通点は、余所者、って事、僕はこの村の者ではなかった、六年前、ここに来たんだ」

箸を置き、コップを持つ。そして水を一口含む。それから暫く水を見つめていた。

遠い目をしていた。俺はその間も手を休める事無く食事を続けていた。

「あれは、家族旅行をしていた時だった、当時は今より栄えている町が多く存在していた、その町からの帰りだった、大きな飛行船、何百人乗っていたのだろう、僕もその内の一人だった、窓から外を見ると、地面がとても下にあって、雲も見えて、とても綺麗だったのを覚えてるよ」

遠い目をしたまま、膳の口元は少し笑っているように見えた。

その光景を思い出しているのだろう。それでも、悲しそうな表情。そして空気は変わらなかった。

「小さな村を通り越したその時、大きく機体が揺れた、上空を飛んでいたから、風に煽られただけかと思っていた、でもそうじゃなかった、機体は方向感覚を失いそのまま墜落した、本当に一瞬の出来事だったよ」

小さくため息をつき、目を閉じる。その時の事が生々と蘇っているのだろうか。辛そうにも見える。

「耳の奥にとっても大きな音が響いて、それは消えなかった、意識が遠のいて、気が付いた時は真っ暗闇だった、誰の声も音もしない、無の空間だった、身体も直ぐには動かせなかった、それは両親の間に座っていた僕が、両親と機体との間に見事に嵌ってしまったていた

からだった、動けない、でも声も出ない、痛みは感じないもののど
うしようもない状況だ、そして暫くすると機体がまた動いた、そし
て崩れる、元々墜落した時、全体的に地に付いていなかったらしく、
その一点では支えきれなくなって崩れた、という感じだった、その
お陰で僕は外へと放り出された、お陰でまた気を失ったけどね」

その時の衝撃で頭を打ち、少し窪んでしまったと、後頭部を擦りな
がら膳は言った。

笑っても居たが、決して心からの笑顔ではなく苦笑だった。笑える
はずがない。

それだけの事故を体験したのだから。

「意識を取り戻し、顔を上げると飛行船からは無数の手や足、顔が
見えていた、そして機体にもその下の地面にも、夥しい血液が流れ
落ちていた、これだけの人数だ、見えないところにも沢山の血溜ま
りがあることだろう、そして誰一人、生きていなかった、僕はたっ
た一人の生き残りだった、あまりのショックで何も分からなくなっ
た、目の前のそれが現実とは、思えなかった、立ち上がろうとし
たら、腰が抜けてしまい、立てない、そう思った時、飛行船は爆発し
た、燃料が漏れていたからだと思う、でも真相は分からない」

「膳の両親も、死んだ？」

俺の問いかけに、膳は唯一度、頷いた。

「跡形も無く、焼けたと思う、僕はそれを見届ける事は出来なかった、気が高まってしまっていて、ただただそれが夢にしか思えず、でも涙が止まらなかった、そこだけは身体も反応したのかもしれないね」

「んで、どうやってここまで来たんだ？身体、動かなかったんだろっ？」

「お迎えが来たんだ、放心状態の僕の元へ」

「お迎え？」

その言葉に、俺は首を傾げた。よく言うそれって、死ぬ時に来るお迎え？でも膳は死んでないし、じゃあ一体誰が来たんだろっ。

ここには誰も居ない。ってことは、やっぱり。と、足りない頭で考えた。

「彼らはここの村民だったんだ、飛行船が墜落するのを見て、現場に駆けつけてきてくれたんだ」

「ここに居ないのか？」

「生活はそれぞれ別、最初の頃はお世話になったけど、この家も仲間になった証として、貰ったんだ」

そついうと家を見回して笑う。先ほどよりは自然な笑顔になっている。

「明日、彼らにガートを紹介しよう、工場で仕事をしてるんだ、とはいえ、自分達の生活に必要な物を作ってるくらいだけど」

落ち着いたのか、カップを置いて箸を持つ。少しずつだが口へと運んでいく。嫌な思いをさせたしまったのだろうか。分からない。

ただ、一瞬でも膳の気が揺らいだのは確かだ。

「さて、食べ終わったら片づけをしてもらおうかな、ここでの約束だからな」

ゆっくりと食事を済ませ、空になったお皿が並んでいた。

「不便だな、それくらいしてくれる奴が居てもいいのに」

皿を流しへ運び、文句を言う。すると膳は、にっこりと笑って、

「働かざる者、食うべからず」と言った。

俺には何のことかわからず、頭を悩ませた。そして洗い終わってから、聞き返してみた。

「僕を助けてくれた人たちの口癖、っていうのかな、怠けて働かない者には食べる資格は無いって事、分かった？」

労働なんてした事のない俺にとっては、はっきり言って分からなかった。でも手伝いをしろ、そう言われてるのは分かった。

「今日は風呂に入るよ、ガートも凄く汚れてるし、きっちり綺麗にしようね」

そう言つて俺の手を掴んで風呂場まで連れて行つた。そこは狭く、湯気で湿気が凄かった。

小さい浴槽。そこには並々とお湯が張られて居た。

膳に言われるまま衣類を脱ぎ、ぼつんとそこに立っていた。

「何じつとしてるんだ？風呂くらい知つてるだろう？」

「それくらいは知つてる、こんなに小さくなかつたけど」

「なら、早く頭洗つたり身体洗つたりすれば？お湯冷めるよ」

膳にそう急かされても、俺はただじつとお湯を見ていた。

「ガート、もしかしてお風呂も御付の者が居たとか？」

まさか、という感じの声で問いかけて来た。凶星だった。生まれてこの方、一度だって一人で入った事がなかった。

だがそれが当たり前の立場に居たし、皆そうだと思つていたから、

俺に非はない。

「普通だと思ってた、でも膳は一人で入ってたんだろ？」

「そりゃあもう18だし、子どもじゃないからね、助けてもらって、怪我をしていた時は、体を拭いてもらったけどね、風呂には入れなかったから」

そう言いながら暫くの間考え込む。「仕方ない」そういうと膳も服を脱ぎ始めた。

「この年で人と入るのはどうかと思うけど、ガートを一人で風呂に入れたら溺死しそうだし、風呂まで壊されては困るから一緒に入ってあげよう、その代わり次からは一人で入るんだよ」

そっいいながら手桶で湯をすくい、頭と身体に掛けてくれる。ザラザラと髪に絡まっていた砂が落ちる。

「石鹸を使う前に一度軽く手だけで洗っておこうかね、はい下向いて」

頭を抑えて下を向かせると、右手で湯を掛け、左手で髪の毛を濯ぐ。その度に砂は静かに流されていった。

「ん？」

髪の毛を濯いでいる手が止まった。何かあったのだろうか？

「どうした？」

「いや、ガートの耳はどうなってるんだ？なんか長いぞ？」

「そうか？確かに膳とは形が違うけど、生まれ付きだし、館の民も同じ耳をしているぞ」

「ふーん、じゃあ民族としての違いかあ」

長い俺の耳を気にしつつも、耳の裏も軽く擦る。砂が溜まっていたらしい。

「この位で良いかな？」

顔を上げ、首を左右に振り水を飛ばす。館の民と違い扱いが乱暴だ。膳は石鹸に手を伸ばす。それを取り、良くあわ立てる。

固形の石鹸で、とても古くから使っている感じの、珍しいタイプだ
と思った。

「ガートのところじゃ、きっと液体の良い物を使ってたんだろうね、
ここにはこういうのしかないから、でも自分でも作れたりするし身
体にも自然にも優しいんだよ」

良くあわ立ったその手を、俺の頭に付ける。手際よく、髪を洗い始
めた。

沢山あつた泡は見る見る少なくなる。俺の髪がそれだけ汚れて居た、
といういい証拠だ。

一度その状態でお湯を掛けて流し、また同じ事を繰り返した。二度
目は少しは俺の髪自身も泡立った。

人にしてもらうのが当たり前だったのに、この数年無かった為か少
しくすぐったい感じがする。

12

「次は身体を洗うぞ、っとその前に、伸び始めの髭でも剃るか？」

身体を洗う布に石鹸を付け擦る。泡を少し取り、俺の顔につけた。

「動くなよー、下手に動くと切れるからな」

そついう膳の手には剃刀があつた。俺も自分でする時はナイフで剃つていたから、大差はないが、人にしてもらうのと、自分でするのはこれはかなり違い、怖かった。

真剣な膳の目が、余計に恐怖心を煽った。硬直していたから、何とか無事に終わった。

「ちゃんと温まれよ、週に何回もお風呂は沸かせないんだからな」

俺の身体を洗い、綺麗になって満足したのか、膳は自分の事を始めた。

暖かい久しぶりのお湯にちょっとのぼせつつ、風呂場も見回していた。

どこもかしこもボロボロで、良くまあ水を張り、沸かせるものだな

あと感心したくなるくらいな風呂場だった。

元は窓も無かったらしい。が、壊れた事によって少し隙間風が入る。換気扇の代わりになっていい感じだ。

一応布が当てられている。雨や雪の際でも、心配ない小さな穴だった。

「ちょっとよけて」

ぼけっとしてると、洗い終わった膳が湯船に入ってきた。肩まで浸かり、伸びをして、ため息をつく。まるでオヤジのようだ。

「ふーん、やっぱり短くても髭を剃ると少し若くなるな、髭も最初は汚れかと思っただけど、そうだよなあ、もう髭が生える年だな」

暫し俺の顔を眺めたかと思うと、そうい言って頷いた。

幾つも違わないのに、膳はそんなに髭は見えない。剃ったばかりなのか、それとも元々目立たないのか、それは分からないが、年を言わなければ随分若く見られそうだな。

ふと、傷に目が行く。膳の身体は傷だらけだった。

黙ってそれを眺めていると、膳が気づいた。

「沢山あるでしょう、殆ど墜落の時にできた物なんだよ、強く打ち付けていたから怪我を沢山しているのに気が付かなくてね、でも蓋を開けてみたら、こんなにも沢山の傷があっただ、当然と言えば、当然だけどね、でも目立つ物でもないし、腕や背中、足は服で隠れてしまうし、まあ、隠す事もないんだけどね」

腕にある細かい傷を眺めながら、膳が語る。

ふとした時にそれを見ては、その時の事を思い出しているのだろう。

俺にはわからない辛さを、背負って生きているんだと、思った。

風呂から上がると、洗濯してもらい乾いた俺の服があった。

借りてた服は風呂に入る時に脱いでそのままほったらかしだ。

きっと明日にでもまた膳が洗っていることだろう。

綺麗になった俺の服は、何となく少し縮んでいるような気がしたが、大して気にならなかったのもそのまま着た。

太陽の匂いと洗剤のいい匂いがした。んな物に包まれるのは、どれくらいぶりなんだろうかと、考えてしまった。

自分自身が綺麗になるのも、館を出て初めてだ。水を浴びたりした事はあったが、石鹸を使い頭や身体を洗うなんてずっと無かった。

一皮向けたような感じた。

「ちゃんと髪を拭かないと風邪を引くよ」

長い髪から滴り落ちる滴を見て、膳がタオルで俺の頭を拭く。と言うより扱く、と言う感じ。

荒っぽく、そして痛い。

三半規管がおかしくなる感じがした。頭を左右に揺すられた。目が回った。膳は俺の髪を束ね、上で留めた。

女のような髪型になっている。膳が気にした耳も、ピンと目立つ。

「こんなの嫌だ、取れ」

「そうしていた方が水が垂れないし、折角洗って綺麗にした服に、早速水の染みが出来なくて良いの」

そう言う俺の肩にタオルを掛けた。それも滴よけらしい。うなじから垂れてくる水を食い止めるため、のようだ。

13

何だかんだ騒ぎつつ風呂の時間が終わった。そして寝る時間だ。階段を膳に付いて登る。

登りきつて直ぐ左にある部屋が膳の部屋だ。

「ガートは昨日の部屋ね、お休み」

「なんで別々で寝るんだ？広い部屋なのに、ベッドも広いのに」

「何だ？一人は怖い？寂しいのか？ガート」

膳は悪戯っぽく笑い、頭を撫でた。その行為に、ちよつと腹が立った。まるで子ども扱いだ。

「寂しいものか、いつも一人だったんだ」

「はいはい、分かったよ、お休みガート」

勇み足で奥の部屋へと向かう俺に、膳が声を掛けた。

俺は、振り返らずに「お休み」と返した。後ろで、扉のしまる音がした。

降り返ると、そこは闇。壊れている天井や、窓から月明かりが入ってくるだけの、闇だ。

俺は自分に与えられた部屋に入る。そこも、ゆれるカーテンの元、月の明かりが照らす。

大きく明るい月。それはとても不思議な何かを、秘めている様な光だ。と思った。

昔から月はあまり見てはいけないと言われていた事を思い出す。気が狂う事もあるらしい。

それだけ何かを秘めているのだ。

「今日、膳が言っただのは、本当なのかな、だったらなお更、一人は嫌なはずなのに」

ごろりと寝返りを打つと、いい匂いがする。それは旅に出てから初めて綺麗になった自分の身体からする石鹸の匂いだった。

衣類も肌触りが随分といい。突っかかる感じもないし、さらさらとしている。

膳と離れて顔が見えなくなると、声が聞こえなくなると、一気にまた独りになったような気になる。

目を覚ましたら、砂漠で、死にそうになってるのではないかと、その晩は中々寝付けなかった。

全て夢でした、では寂しすぎる。そう思いつつも、気が付かないうちに眠りについていた。

風呂に入ったり、人と接したりで疲れたのが原因だろう。外の風は心地よく、館の夢を続けて見そうになる。

今度は悲しい夢ではない。兄様と笑いあっている、幸せな夢だった。母様も父様も生きている。どれだけ昔の夢なのだろうか。笑顔が溢れるその平和な時代。

壊れる事を疑いもしなかった。

「おはよー」

欠伸をしながら階段を下り、下に居る膳に挨拶をする。幸い、この生活が夢ではない事を喜ばしく思った。

膳は笑いながら挨拶を返し簡単に用意した朝ご飯を並べていた。目を擦り、すっかり定着したその場所に腰を下ろす。

「昨日の今日だから忘れてないと思うけど、今日は工場に行くからね、他の仲間にもちゃんと挨拶をするんだぞ」

飯を掻つ込んでいる俺に、少し呆れ口調で言う膳。そういえば、そんな事を言っていたな、と思い出す。

重要な事以外は、忘れる頭を持つている俺としては、当日にまた言われない限り、きっとまた忘れるだろう。

「勢いがある人たちだから、ちょっと怖いかもしれないけど、根はいい人たちだから」

少し苦笑いに見える。きっと膳も最初に恐怖を感じたのだろう。

見た限り、膳にはそんなに勢いはないし、覇気もない。ただ優しさがにじみ出て、それだけは俺にもわかった。その膳が言うのだから、従うしかない。

ご飯を食べ終わると、早速出かけると言った。

工場は、村の中心の辺りに存在した。大きくはないが、他の家に比べたら、何軒分かはあるだろう。

中に入ると、すっきりしていて余計に広さを感じた。そしてオイルの臭い。金属の臭いがする。

14

遠くの方からこちらに近付いてくる複数の足音と気を感じ取った。

咄嗟に膳の後方に回る。

「どうした？ガート」

振り返り、じっとしている俺に膳が問いかけた。その時、工場奥の扉が開いた。

「あ、おはよう」膳が挨拶をした。

「よう」と続けて相手が返事をした。そこから三人の男がこちらに向かい歩いてくる。

「何だ？膳後ろに居るチマイのは？」

「ああ、この子はガート、迷い人だよ、ほらガート、挨拶は？」

膳はその三人と会話をしつつ、俺に優しく声を掛ける。

そして少し身体をずらして俺の頭を撫でる。

人にそうされるのは正直好きではないが、膳の手は嫌いではない。息を呑み、膳の隣に並ぶ。目の前には、背の大きなガタイのいい男が、こちらを興味津々な目で見て居る。今にも手を伸ばされそうな嫌な予感だ。

「・・・おはよう、初めまして」

膳にしがみ付いたまま、それだけ言えた。男三人は、顔を見合わせる。そして瞬間、笑った。

「チマイなあ、可愛いじゃねえか、何時^{いつ}来^きたんだ？」

「一昨日の晩だよ、僕の家で食料を漁^{さぐ}ってた」

「はは、この世界だからなあ、仕方ない、他に生きてる村があるかも疑問だしなあ」

「とりあえず、自己紹介をしようか、私は灼^{しゃく}庵^{あん}慄^{りつ}、よろしくな」

笑って俺の頭を叩く。他の二人も、続けて名乗る。

「俺は・・・腔撓くうとさう・・・よろしく」

「はいはい！俺はね、壊臥肘かいが ちゅうつつんだ、よろしく！」

代わる代わるで俺の頭やら肩やらを叩く。その勢いは膳が言った通りだった。

俺の予想を軽く超えていた。一気に疲れてしまった。

15

「んで、ガートは幾つだ？」

「15歳だつて」

「おお、15！良かったなあ膳^{ぜん}、やっと弟が出来たか」

「これでガートが年上だったら面白かったのになあ」

「何をくだらない事を言ってるんだ、とりあえず、ガートの世話は膳の役割になるな、できるか？」

唯一落ち着いている、ええと・・・慄^{りっ}が膳に問いかけた。膳は一度ちらりと俺を見た。そして大きく頷いた。

「丸一日過ごしたけど、問題は無さそうだよ、根本的には、これからどう変わるか分からないけどね」

「ま、何はともあれ、仲間が増えたのはいい事だな」

「おう、これはもう仕事どころじゃないな」

今にも踊りだしそうな肘。^{ちゅう}昼間っから酔っ払ってるのではないかと思いたいくらい、ハイテンションだ。付いていけない。

「何を馬鹿を言ってる、今日の仕事は今日する、決まりだろう、早く村の修理をするのだからな」

慄の一声で、「はい」と一度返事をして作業に移った。俺は膳について回った。

何をするのか分からないし、何を作って居るのかすら知らない。見ても分からない。

館には無かった物ばかりが並んでいるのだ。いや、もしかしたらあつても俺には見せなかったのかも知れない。

危険。または大切。いじらせてはいけなかったとか、そんなところだろう。おもちゃではない。

そういう感じだ。特に、ここに居る人間にとっては、村や民の命の次に大切。きっと全てを守る何かが出来るのだろう。

と、思っていたら、出来上がるのは色んな形の鍋。細かい鉄をかき集め、それを熔かし、鉄板を作る。それで工場を修理したりするようだ。何故なら、やはりここもかなり隙間風が入っているからだ。

「膳、これは仕事か？」

「そうだよ、自分達の生活に必要な物を自分達で作るんだ」

「それって、自給自足ってやつか？」

思い返すと、庭には野菜が実っていたっけ。確かに、この地を見る限りは、そんなには土は肥えていないし、大した物は作れない。

木も生えているとは言えない様な、ただ棒が突っ立っているだけの枯れ木だ。

ここは陸地だし、まあここまで滅んでいる世界でこうして生きている事自体が、凄い事なのかもしれない。

「ガート、良く見ておいで、明日はガートも機を動かすのだからね」

大きなクレーン車で、鉄板を移動させながら膳が言う。

「へ？俺何にも乗った事ないぞ？免許ってのが必要なんだろう？」

「そんなの、この村の人は誰一人として持ってないって、ようは動かせればいいんだ」

笑って何て事無く返す膳。しかし、それはかなり難しい事を言われているような気がする。

ただ見ているだけでも、ややっこしい乗り物なのに。そう言われたら、余計に混乱して見える。

「大丈夫だよ、いきなり一人で運転しろ、なんて言わないから、僕と一緒に乗って教えてあげるよ」

混乱している俺が滑稽だったのか、膳は笑って言う。それを聞いて安心した。

そして他の連中にも何となく目を移す。それぞれ違う事をやっているらしく、一箇所には屯って居ない。

鉄板をサイズに合わせて切っていたり、外から鉄の残骸を集めてきているのもいるし、何やら書き起こしているのも居る。

ちよつとはまともなところがあるものだ、なんて思った。

唯一まともな慄は置いておくとして、他の二人、肘・撓^{とつ}までもがまともに働いていると、初対面とはいえとても不思議な感じだ。

芝居でもしているのではないかと思うほど、別人のようにまじめな

顔をしているから、少し失礼な言葉も態度も、許してやってもいいかなあと思う。

「それでは、今日の労働はここまで、各自しっかりと休んで明日のための力を蓄えるように」

外が少し暗くなり始めた頃、慄のその言葉で各自作業を止める。終業らしい。俺は膳が機を片付けに行くのを一緒にについていく。

その姿を「金魚の糞みたいだ」と肘が指を指して笑う。

撓は、笑ってはいるが肘に何か言っていた。膳が言うには、あの二人は年が同じらしく、暴走しがちな肘を、撓が抑える。

そついう役割があるらしい。でもたまに二人揃って暴走する事もあるとか。

「どうだった？労働、ってまだ何もしてないけどさ」

膳の家に帰り、寛いでいると膳が問いかけてきた。正直、今までと違いすぎて、驚いている、というのが率直な感想だった。

「あの鉄、どこから拾ってくるんだ？」

この辺には何も無い。いきなりぽつんと鉄が落ちているって事はないだろうし、ちょっと不思議だったのだ。

「ああ、元々この辺りは鉱山だったんだって、だから場所によってはまだ埋まつてるんだよ、それを掘り起こして、使ってる

んだ、後、もう壊れてしまった家々から拾ってくるんだ、潰れて跡形もなくなつたようなところは掘り起こしてるんだよ」

その返事は、意外な物だった。こんなに寂しいところが鉄鋼で栄えていたなんて。

今では見る影も無いな。後半の答えは少し寂しい物だったのか、膳はまた苦笑いをした。

こんな世界だから、何かを犠牲にしなければ生きていけない。

ましてもう誰も居ない、死んでいる家だ。そのまま朽ち果てるより、生きている人のために役立つほうが、それらも幸せだろう。

16

「膳の家は直さないのか？」

所々に開いている穴。一箇所や二箇所じゃきかない。俺が開けてしまった大穴も、ほぼそのままで口を開けている。

「家は、コンクリートだったみたいだし、鉄ではねえ、かと言って木も、そんなにいい物が生えているわけではないし、当分はこのままかな、まあそんなに寒くないし困らないからね、盗人も来ないし」

確かに、来たとしても盗む物はない。でも、何となく申し訳ない気分になった。俺が開けてしまったのだから。

「ああ、気にしなくてもいいんだよ、大したことはないんだし、形あるものはいつかは壊れるんだから」

俯いている俺の頭を軽く叩くと、そう言って笑う膳。

全てを見抜かれているのだと、少し恥ずかしく思う。だが、何があっても笑って居られる膳の強さが、俺には凄いと思えた。

館は、今どうだか分からないが、こんな風に建物が崩れるなんて、無かった。天災すらそうそう興らない。

平和そのものの環境だったから、こんな世界があつたなんて下界に下りるまで知らなかった。

俺は、とても恵まれていたのだと、思い知らされた。

何も出来ない、無力な人間だと、知らされた。

翌日から、本当に俺は機を運転する事になった。

隣に膳を乗せて、指示を仰いで一心不乱な操縦だった。

工場に穴を一つ増やすのではないかという程凄い運転だったと思う。

「疲れた」

「初日には上出来だよ、明日からは一人で出来そうだね」

その一日は、目が回るほど忙しかった。たった一つの大きな機。

それを動かす事を覚えるのがこんなにも大変だとは思わなかった。

変に力が入った所為か、腕も足も筋肉痛で、肩も痛い。ただ唸って転がった。

家の中の仕事なんて、さっぱり手伝う事も出来ない。

そりゃあ、いつもしてるわけではないけど、手伝わなければ、という思念もある。

最初に言われた言葉が残っているからだと思う。

だけど今はただ体中が痛かったのと、やたらと眠かった。

だからだろう、いい匂いがしているのに、俺はすっかりと眠りについてしまっていたのだ。

そしてその晩、また俺は兄様を思い出すことになる。

「俺ってさ、そんなに小さくないよな？」

翌日、眠い目を擦り膳に問いかける。膳は俺の隣に立ち、手を俺の頭の上に翳し、そのまま平行に自分の身体へと動かす動作を二、三回行っていた。

その手は、膳の鼻先辺りになる。ふむ、と膳は暫し考えるポーズになる。

俺は答えが出るのを今か今かと待つ。

「少なくとも僕やあの三人よりは小さいね」

笑ってきっぱりとそう答えた。あまりにもはつきりしたその答えに、

俺はショックを受けた。

自分の身長を知らない。人と関わって生きていない。

だから、そういうことを言われるのは初めてだし、こういう風にプライドを傷つけられる事も今まで無かった。

良い事なのか、また逆なのか。分からない。でも、そんな事があつたから、こうして人と背比べなんて出来たんだと思う。

「まあまあガート、そんなに気にする話題ではないよ、成長には個人差があるんだし、いつしかこうして僕が君の頭を撫でる事も、叩く事も、出来なくなる日が来るんだし、ね？」

そう言っていていつも通り俺の頭を撫でる。膳は頭を撫でるのが好きみたいだ。何でだろう。

そう思って理由を聞いた事もある。

『安心するから、頭から、髪の毛とかの感触も好きだし、そこから来る熱も好き、一人ではない、そう思えるからかな』

その時は珍しく頭を両手で掴んで髪の毛をくしゃくしゃにされた。

それも、一種愛情表現というものなんだろう。兄様は、いつも頭を撫でてくれていた。

寝付くまで。また起きている時でも事ある毎に撫でた。叩かれた記憶は、一つもない。

常に、愛情を与えてくれていた。俺はそれが当たり前の物のようにも思っていたのかも知れない。

兄が居て、その隣に俺が居て、暖かい空間が何時までも続くと、そう思っていた。

そう信じていた。でも、不変な物なんてないと、唐突に気付かされた。

「とにかく、大きくなりたいなら沢山食べて、寝て、動きなさい、じゃあ手始めに、昨日食べなかったご飯を食べると良い」

少し首を傾げ、俺の目線に合わせて膳は笑う。そして自分が睡魔に負けてご飯を食べなかった事を知った。

その所為か、朝ご飯がやたらと美味しく感じられた。膳は、俺より身体が大きいのにあまり食べなかった。

俺に食べるように促す事も多かったが、きっと俺に気を使ってるだろうと思った。

『客人』扱い。と言うか。そんな感じだった。

「俺、今日は手伝いするぞ」

綺麗にご飯を食べ終えてお皿を膳の居る流しに運んで告げる。膳は笑いながら俺の口の端をぬれた手で拭い、皿洗いをまた始めた。

そして少しして、タオルで手を拭きながら、

「じゃあ庭の野菜を少し取ってきて、二人で食べきれ的分だけでいいよ」

そういつて俺に籠を手渡した。俺はそれを受け取ると、日が照っている庭へと飛び出し、庭で光り揺れているそれを摘み取った。

「ありがとう、では次は虫を取って、食べ物には虫が良く付くからそれを取って、ああ持ってこなくていいからね、芋虫とかその場で殺していいよ、生かしておくともた登って食べてしまうからね」

そう説明をされ、また庭に出る。葉の裏を一枚一枚丹念に裏返しては、その場に居る虫を殺した。

とても沢山居て、ここは虫にとっても良い環境なのだと思います。野菜は虫にとってもご飯なのだ。虫が葉を食む。それによって実が上出来だろうと不出来だろうと、この虫の知ったことではないということだろう。

なんていい暮らしだろうか。でも、こうしてたまに居る人間によってその良い環境から引っぺがされて、叩き落され、殺される。

そう思うと、自分が虫でなくてよかった。何てことも思えた。

「なあ膳、工場って毎日行くのか？」

「ううん、休みもあるよ、君が来た次の日は、僕家に居たじゃない」

そう言われて、そういえば、と思い出す。

「大したことは出来ないんだけどね、でも、みんなじつとはしてられないんだろね、この村を、また昔のように戻したい、ただその一心で頑張ってるんだと思う」

玄関に腰を下ろして、俺が虫退治に専念しているのを眺めていた膳は、のんびりと、そして遠くを見るように答えてくれた。

『以前『都市』に襲われた』焔に言われた言葉を思い出す。

もしかしたら膳はそれを知っているのだろうか？だとしたら、結構長い事ここに居るって事なのだろうか？確か12の時から居るって言っていた。六年前。果たして、どうなんだろう。

でも、それを直接聞くのはどうだろう。無神経ではないだろうか。でも、気になる。

でも聞けない。きっと俺はとても変な表情になっているだろう。

膳が下から俺の額を突付いてきた。はっとして、その拍子に後ろに倒れそうになる。

が、なんとか足を下げてそれを防げた。

「ガート、考え事をしている暇はないよ、さ、仕事だよ」

その言葉に、昨日の筋肉痛を思い出した。今日もまだ少し痛い。神経を使う事には慣れない。

変に疲れるし、頭も痛む。何で俺がこんな事をしなくてはならないのだろう。

なんて理不尽なんだ、等と思うことも未だにある。だが、それでも続けていたのは、膳が居たからだろう。

今までと違う。誰かがそこに居て、笑ってくれる。苦勞も嬉しさも、分かち合う事が出来る。

それが何より嬉しいと思ってしまった。この数年忘れていた感情だった。喜怒哀楽。

それがここに来てやっと戻ってきた。そう思った。

18

「よう、おはよう」

「さばらず来たな、偉いぞガート」

少々強めに俺の頭を叩きながら言う。この二人はなるべく近付きたくない。

慄はまた机に向かって書き物をしていた。工場での仕事は毎日同じように思えて、それでも少しずつ変わっていく何かを感じ取っていた。

物を作るときだって良い。鉄板を鍋に変える時だって面白い。

ガラスを溶かす事もきつと中々出来ない経験だと思う。幻想的に広がる色が、光を放つ。

それには、とても心が惹かれた。

触ろうとした時、周りの三人に一斉に身体を押さえ込まれた。

何でか分からなかったが、出来たばかりのガラスは、まだ高熱を帯びているので、手を触れたりなんてしたら、怖ろしいくらいの大火傷をするらしい。

「いやー、好奇心が旺盛なのは良いが、こんな所で手を失うなよ」

「怖ろしい・・・確かに綺麗だが・・・冷たくなったら触ってくれ」

額の汗をタオルで拭きながら言う肘と搦。膳もため息を付いた。

確かに、手を翳したら、とても熱が伝わって来た。相当熱いのだ。

「自然の暑さとはまた違う熱だからね、気をつけてガート」

じつとガラスを見つめている俺に膳は言った。膳と村人三人には、とてもよくして貰った。

表現は人それぞれでも、きつとあの三人もそれなりに愛情を俺に与えてくれていたと思う。

目を見れば分かる。やましい者は目を見ないし、目が泳ぐ。

でもここにいる人間は真っ直ぐに俺の目を見ることが出来る。そして笑う。

俺はそんなに立派な心眼は持っていないが、持たなくても心が綺麗なのは良く分かった。

きっと大変な事が沢山あって、仲間で助け合うって事を知ってるから、こんなにも深い繋がりがあるのだろうと思った。

「ガートが付けてるそれ、綺麗だなあ」

ふと、肘が俺の秘石を見て言った。普段の色は深い青だ。それが気象で変わるのか、俺の体調で変わるのか、たまに色が少し変化する。

「ガラスなのか？」

「いや、石だ」

「石？それで石なのか？どんな石だよ、あり得ないって」

膳をどかして肘と撓が俺の右腕を取り、じつと秘石を眺めている。俺は膳を見た。

膳は首を左右に降る。『諦める』と言っている様に見えた。どうやら二人の好奇心を上げてしまったらしい。

「綺麗な石だ、日に透かすと向こう側が見えるもんなあ」

俺の手を掴んでその手を空へと向け、角度を変えて石を眺める。まるで俺は操り人形のようなようだ。

「ああ、珍しい、もう今の世界ではこんな鉱物はある得ない、単なる石ころばかりが転がってる」

まともな宝石なんて見たことがないのに、と呟く膳。そして二人は酔いしれた顔をして俺の手を釈放した。満足したらしい。

「ガートの国は一度くらい行ってみたい物だ、その塊なんて見たら、俺はきっと凄い興奮するぜ」

「この小さいのを見ただけで・・・これだもんなあ・・・使ってみたいな・・・」

「二人とも、本当にそういうところは技術者だよな」

「良い物は使ってみたい、鉄やガラスだって、本当ならばもっと綺麗に仕上げたい物だ」

腕を組んで、頷く二人。栄えている町ならば、きっと色々な物が、人々の心を豊かにしている事だろう。

だがここにはそのほんの欠片に過ぎない程度の物しかない。

それは、一人も分かっているからこそ、余計に辛く、悔しいのかも
しれない。

「怖かったろうガート、ごめんね二人は綺麗な物に目が無くて、溶かたり加工したりして色々試したくて仕方ないって感じになってるんだ、でも流石に人を取り上げてまでそれをする事はないだろうから、安心して」

秘石をじつと見つめている俺に、声をかけてくる膳。

どうやら俺がこの石を取られる心配をしている、と思っただけだ。

無論、そんな心配は一つもしていない。ただ、これがそんなに綺麗なのかと、考えていただけだった。

俺から言えば、単なる石なのに。ただ、一つ違いを述べるなら、特殊な能力を秘めているという事。

そして持つ人間に石が合わせて能力を引き出す事ができるという事。

それだけはこの石の特徴だと思う。だから俺にもこれが必要だ。

能力を出すのも、抑えるのも、これにしか出来ないからだ。

暴走しそうなほどの強い能力は時と場合には、身体の中に秘石を埋め込む事もある。

また身体から秘石が出てくるって事も、極まれにあるのだ。

そうなるのは、極まれの種族のみに出るというが、俺はまだ見たことはない。

内から抑え込むのか、それとも内の能力を石が吸い尽くすのだろうか。

詳しい事は分からないが、そうなった時、死ぬまで石は取れないのだろうか。

「こんな物で、人の心は安らぐのだな」

「そうだね、こんな世の中だからね、共に誰かがいるだけでも、十分な救いになるくらいだから、でも人は我が儘だからそれに慣れてしまつと、もっとより良い物をと、望んでしまふのかも知れないね」

それは、こうして出会い、ずっと共に過ごしたいと思うそれも、膳の言つ我が儘に入るのだろうか？

人は欲深い。煩悩は三桁になる程にあるのだから、それは凄いものだろう。

今はまだこうして共に居たいと思うだけでも、その内ここではつまらないと、また旅に出る日が来るかもしれないし、またここが襲われるかも知れない。

先のことは分からない。あの平和そのものの故郷を俺が捨てた様に人の心もいつ変わるか分からない。

この幸せもそんなに続かないかもしれない。それでも、ここに居たいと思うのは、弱っている証拠なんだろうな。

誰かの笑顔がそこにあるって言う、温もりがそこにあるという、安堵感。

一度手放し、再度手にした違う暖かさは何時離れてしまうのだろうか。

「明日は休みだぞ、ゆっくり休んで疲れを取る事」

仕事が終わると、慄の一声でみんな帰る。

「じゃーな」とそれぞれ挨拶をして帰路に着く。俺も膳について帰る。

すっかりと居つき、一週間が過ぎようとしていた。

周りに馴染んできたものの、膳以外の三人の素性は知れず、また知る必要も無いと思ったのかも知れない。

どこかで一線を引いている自分が居た。ここの者ではない。いつかは出て行くかも知れない。

そういう思いが、それを保っていたのかも知れない。

「なあ、風呂って毎日入らないのな、どうしてだ？」

「水が勿体無い、資源は限られているからね、ガスもどれ位残ってるかとか分からないし、贅沢は出来ないな」

そう言っても、水は水道から出る。蛇口を捻れば出てくる。ガスもスイッチ一つで付く。

何て便利だろうと思うが、それでも水もガスも資源。いつかは終わりが来るって事だ。

だが、沸かすことくらいなら簡単だろうに。でも、そういえば聞いていないこともある。

「膳は異能力は持ってないのか？」

「？ああ、君が使った変な力ね、持ってないよ、あの三人も持っていないんだ」

膳の『変な力』発言に少しむっとする。変とは失礼だ。

だが、日々それらしき物を発動していないなあと思ったなら、そうか。持っていないのか。

このご時世に珍しい。あれ、そういえば、膳の部屋には変な物があつた気がする。なんだろう？

「今はみんな持つてるね、その能力つていうの、ガートみたいに生まれつきな人もいるんだろうけど、自分で努力して身に着けたり、ガートの指輪みたいに道具を使つてつていう人もいるみたいだしね、まあ、随分昔の知識だけど」

今の世界で、それを出来る人間がどれだけ生きているかも分からない。

能力があれば生きながらえるわけではない。運もツキも係わり色々な物が動いて絡んで、決まる。

それによつて死ぬか、生きるか。その選択肢も、絶対的に自分にあるわけではないし、生きたからといって、生き延びたからといって、ラッキーではない。

膳のように、ただ一人生き残つた、なんて場合は、目の前の『死』に対して共鳴を起こしかねない。

仲間や親と共に、連れて行つてほしいと、願う事だろう。

それに対して、良かったとは言えない。

でも、俺は少なくともその時膳が生きていてくれてよかったと思つている。膳がいなければ、俺はここで死んでいたかもしれないの

だから。

「俺は、それなりに能力を使えるから、大丈夫だ」

この村や、あの三人、膳を守ることくらいはできる。そう言いたかった。

でも、何となく言えなかったのは、弱い者扱いをしたくなかったからだろうか。

きつと面と向かって言っても、膳は笑うだけだろうから。それに、少しは恥ずかしい気がする。

「ありがとうガート、頼りになるね、じゃあとりあえず、ご飯用に野菜を庭で採ってきてね、早く作って、ゆっくり食べて、明日はのんびり過ごそうね」

まるで子どもを褒めるかのような物腰だ。嫌味ではない。それは分かる。とりあえず、手伝いをする。というのは決まりごとだ。

庭でたわわになっている野菜たちを眺め、良く育ったものを採る。

少しずつ日が傾き暗くなる。風が吹くと心地いい。昼とはまた違う、少し冷たい空気だ。

ご飯は常に膳が作る。俺は洗い物をするくらいだ。

以前作ろうとしたら全てを焦がした、という失態を犯した。

あの時の膳は、本当に渋い顔をしたが、それでもため息一つで許してくれた。

今は傍らでそれを眺めるか、テーブルで腰を下ろして待つ。

傍にいても手伝えないし、たまに邪魔になるときもある。なので、じっと待つ。

こういうところだから、肉はない。野菜だけでもあるのが救いか。

砂漠と違い、何かを育てる事が出来る。それは、人々にとっての救いになる。

#20

「ガート、今日は雲が凄いね、明日は雨かなあ」

「こっちは雨が降るのか？」

「そりゃあ、雨くらいは、砂漠とは違うし、でも砂漠も全く降らないわけではないみたいだよ、少しはあるんじゃないのかな？」

「ほんとに？」

何年も砂漠を彷徨ったが、雨は降らなかった。

年に、ではなく、数年に数回、なのだろうか？難しいところだ。

だが確かに雨が降ってくれないとオアシスも枯れてしまうだろう。大地はまだまだ謎が多すぎる。俺には、知りえない事が、山盛りなのだ。

「でも雨は助かるね、これで少しは水田も潤うし、野菜たちも喜ぶよ、本当なら毎日でも水を与えてあげたいからね、今は少ししかあげられないから、二三日続くといいけど」

「そんなに降ったら、この家の中びっしょりになるぞ？」

1階部だけでなく、二階部も崩れているところが多いのだから、きつと下まで濡れると思う。

「それなりに詰め物でもすれば、大丈夫だよ、内側から布で抑えて外にはビニールでもかければ中までは来ないよ」

慣れているような口調で説明してくれた。でも、この1階部（俺の壊した玄関）は、何をしても無駄な気がした。

「これ、俺の所為だから、俺が雨の間だけ塞いでおく」

「え？でもガートは何も持っていないじゃないか」

「結界を張る、この家に」

「それって、何か唱えたりするの？」

「いや、そんなに大したことはないけど」

不思議そうな膳を後に、俺は外に出て家の周りに線を引いた。そこ

で印を示す。

魔よけのまじないの様な物だから、本当に柔な屋根がもう一つ出来た、という感じだ。

「これで終わったの？何ともなっていないように見えるけど」

玄関口まで来て、辺りを見回して問いかける膳。目には見えない。それは当然だ。

だが分かる者には分かる。ほのうとか、『都市』とやらのお偉いさんなら分かるかもしれない。

「この家を、半休体の膜が覆ってるって考えると簡単だと思う、弱いけどそう簡単には解けない」

「へえ凄いなえ、攻撃だけじゃないんだ、ガートって」

「回復、癒し系の能力は持ち合わせていないが」

褒められて少し嬉しい。膳に喜んでもらえるのは嬉しい。

兄様とは違うが、でも少し空気が似てる。見てくれなんて、髪の色くらいしか似ていないというのに。

「癒し系は、難しそうだね、なんか自分の命を削って、って感じがする、神秘的なものだね」

「そういうこともある、そういう種族もいる、元々希少だからまだ存在しているかは分からないが、もし居たらその能力がどんなものなのか聞けるな」

「へえ、希少か、残念だね」

神秘的。そういう者も居るだろうが、実際にはそんなにいいものじゃない。

当人達にとっては、本当に死活問題なんだ。だからこそ、希少。

生き残っているのか、さっぱり分からない。そして居たとすると、他にも種族が生きているという事になる。

もしまだ存在しているのなら、俺の方こそ、会いたいと思ってしまう。

「君の場合は、両親もそんな能力を持つてるの？」

家の中に入り、定位置に腰を下ろして膳が問いかける。俺もまるで

我が家のように寛ぐ。

「母様は主、こっちでいう国を治める者だ、命の創造主として崇め奉られていた、父様はその付き人だった」

「へえ、身分違いだったんだね、そうすると、ガートの能力の強さはお母さん譲りかな？」

「どうかな、母様はどちらかというとさっき膳が言ってた癒し系のほうが強かったかもしれない、命を創るひとだから、どちらかといえば父様に近いと思う、母様の護衛をしていたわけだから、武術は長けていた」

「そうすると、お兄さんがお母さん似だった訳か、大抵どちらかに似るからね、まあそうでない事もあるけど」

そういわれて思い出す。両親共に確かに素晴らしい人たちだったと思う。

勿論、第三者から見ても、息子として見ても、だが。兄様はやはり母様似だったのかも知れない。

あんなに厳しくなかったし、俺に対して溢れんばかりの愛情を与えてくれた。

体格は随分と差が出てしまったから、それだけで見れば十分に母様似だ。

小柄な上弱そうな身体をつくりだったが、問題なかっただろう。

今のところは何も感じ取る事がないから、きっと平和に過ごしていると思いたい。

2 1

「膳はどうなんだ？」

「僕はさっぱりだよ、強いて言えば、武術、剣術かな？これは教えてもらったから」

「誰に？親？」

「いいや、ここに来てから、あの三人にだよ」

そついわれてすっかりと頭から飛んでいた三人を思い出す。見る限り強そうには見えない。

選ぶとすると、やはり慄が強いかな？

冷静さ。正確さ、色々観察をしても、きつと慄だろうと俺は思う。

確かに風呂で見たとき何もしていないとは思えないほど筋肉が綺麗についていた。武術をやっているなら納得だ。

「本当は必要ないんだろうけどね、武器なんて、でもこのご時世では、ただ単に平和に過ごしたい、そう思うことすら許されない

事なのかも知れないね」

「でも、誰でもそれを願ってる、望んでるよ」

皆がみんな、戦争を好んでやってるわけではない。お国の為にと死に急ぐわけでもない。

ましてや今、他に生きてる人が居るのか否かすら分からないというのに、それを見つけては殺す。

そんな考えを持つてる者が居るなんて、それこそおかしいのだ。

まだ見ぬ『都市』という、いかれた集団が、本当に存在するのならば、潰さなければならない。

でもそれは、犯罪なのだろうか？操られていても人は人。命に変わりはない。

でも連中は、それを人形だと思ってるだろう。思い通りに動く、操り人形。

何も知らずに、その人たちは大切なものを壊しているのだろうか。それはとても、寂しい事だろう。

「この村は、膳が来た時あの三人しかいなかったのか？」

ほのうは、確かな人数は言わなかった。一人か二人か、とても曖昧な事を言っていた。

そして俺が居座っている今、出会ったのは膳とあの三人だけだ。他に大人といえる存在がいない。

「膳？」

問いかけて、直ぐに返事が来ないので不思議に思い膳を見る。顔色が悪い。目が泳いでいる。

それが何かを物語っている。俺の知らないなにか。膳が困惑するほどの、何かがあったのだ。

以前思ったそれが、当たったのだ。

「膳、ここが襲われた時、ここに居たのか？」

物言わぬ膳の体が跳ねる。驚く、というよりは怯えている、という感じのほうに近いだろう。

恐らく、その時に他の村人は死んだ。

それを目の当たりにしているのだ。それでも、膳は笑っていた。でも心のどこかで、それを考えていたのだろう。

「悪い、膳、嫌な事思い出させた？」

俺の問いかけに膳はゆっくりと首を左右に振る。「違う」と言っている。

でも、心はそれに捕らわれている。怯えている。

またいつか来るかもしれないそれを、恐ろしいと思うのは仕方がないだろう。

どれくらいの被害を受け、どれくらいの死者が出たのか、俺は知らないし、分からない。

でも、たった一人でも死んでいれば動揺する。こんな世の中だから、きつと更にシヨックだろう。

これが弱肉強食。人間界でも、それはあるのだろうか？弱い者はただ強き者に服従するしかないのだろうか？

「ガート、君は一体何を、知ってるんだい？」

考え込んでいると、膳がやつとで口を開いた。いつもより、ずっとゆっくりした口調だ。

やっと言葉を発している、そんな感じの声だ。

「俺は、ここに来る前に出会ったんだ、この村もそいつが教えてくれたんだ」

「へえ、都市の中に人を見て殺さない奴も居るんだね」

肩を落とし、ため息を付いてうつすらと笑う。何時もの膳の笑顔とは、全く違う。別人のように見える。寂しそうだ。

2 2

「僕がここに来て、初めの頃まだ村には沢山とは言えないけど大人が居た、子どもは、僕を入れて四人、分かんと思うけど、他の三人は、今居るあの三人だよ」

じつとテーブルに目を落としたまま、膳が淡々と語る。俺は、ただそんな膳を眺めるだけだ。拳を作って、じつと聞くだけ。

「村の人たちはみんな優しくかった、でも何かを恐れているのは明らかで、村の周りには柵があつてそれを軸にしてなにかをしていた

僕は余所者だったし、良く分からなかった、でもある日、その意味が分かる日が来た」

目を閉ざす膳。その脳裏に一体何を思い出しているのだろう。その惨劇は、どれだけ酷い傷を心に植えつけたのだろうか。

「その日、いつも通り仕事をしていた大人たちが、騒ぎ始めたんだ、怪我が完治して、村になれてきた頃だった、口々に大人が叫ぶんだ
『子ども達を円陣へ！』と」

『円陣』？結界か、そんなところだろう。そんなことを出来る人間が、ここに居たのか。

だから村は全壊していないのか、と納得が出来た。襲われたなら、普通は家なんて、こんな状態では残らないのだから。

「大人が僕達を『円陣』へと引き込み、印を結ぶ大人がその前に立ち、何かを唱えていた、さっきのガートの様に、きっと強い能力を持っていた人だったんだね、他の大人は、ただ武器を手に、構えていた、遠くにただ黒い雲が見えた、それが徐々に広がり、僕らの村を覆いつくした、僕らから姿は見えなかった、いや、もしかしたらただの威嚇程度の物だったのかも知れない、大人の叫び声が聞こえるだけで、辺りは一面闇だった、そして、僕らを守っていた大人も倒れた」

『円陣』を長時間張りすぎて、能力を使いすぎたのだろう。

結界も、使い方によっては己の生命エネルギー、まあ命だけど、それを削って行つ怖ろしい物でもあるんだ。

膳は、それを知らないようだ。癒しの者だけが、そうだと思っているようだし、特に凄いのが癒しの者なだけで、館の人間だって使う能力によっては、命を削る時もある。

しかし、今は言わなくてもいいだろう。

「闇が晴れ、音も声もなくなった、まるで無の空間だった、四人で身を寄せ合って、震えた、大人が言うには『円陣』の中にいる以上は、連中は見つけることが出来ないのだといていた、大人は命

を捨てて、僕らを守り、死んでしまった、まだあれから何年も経ってないのに」

ふと、考える。膳はここに来た時12歳。今は18歳。

惨劇が起こったのが来てすぐ、って考えると六年前、か。確かに、忘れるには短すぎる年月だ。

俺が旅に出て、歩き回ってる時に、連中はもう組織をつくり、暴れていたのだ。嫌な連中だ。

「慄は、僕らより少し上だから死していった大人たちの代わりに村を支え、作り直すことに真剣だった、我武者羅とも言えた、僕は新入りだったから、驚きはしたものの、三人より悲しみは薄かった、でもそれでも、現実とは思えなかった、思いたくなかった、いつかまた、その日が来るかもしれない、こうして今やっと平和になったというのに、また壊されてしまうのか」

頭を抱えて、まるで祈るように呟く膳。その姿が、とても小さく見える。

その辛さが、悲しみが、俺に移ればいいのに。そして膳が笑ってくれたらいいのに。本気でそう思った。

「大丈夫だ、膳、今は俺が居るんだ、俺が村を守るよ、あの三人も、膳も、勿論俺自身も守って見せるから」

気休めにもならないだろう。でも、沈んでいるのを見るのは、正直辛い。

膳は、少しだけ笑って見せてくれた。こんな時でも、きっと年上だからと、思っているのだろう。

それにしても、姿も見せずに人を殺す。とは、一体どんな術を使うのだろうか。

最も人を洗脳し、死人すら防人として扱う連中だ。相当な能力を持っているのだろう。

本気を出さずとも、こんな小さな村一つ、消すのは簡単だろう。

でも消さない。という事は、楽しみを取っておいている。と考えるべきだろうか。

まるで子どものようだ。だが、性質が悪い。

「ご免ねガート、今は平和なんだから、忘れて居たかった、でも現実に興った事だから、忘れる事は出来ないね」

「過去は過去だから、これからを考えればいい、消す事は出来ない、でも無理に忘れることはない、それだって人生の一部だ、それより、今日はもう寝たほうが良いんじゃないのか？嫌な事思い出して疲れたろう？仕事の後だって言うのに」

ふと、外の雨の音が耳に入ってくる。きっと少し前から降っていたのだろう。

でも気付かなかった。それだけ膳の話に集中していたのだろう。

曇っている膳の顔から目が離せなかった。今にも崩れそうなそんな表情だった。

「ご免ね、折角野菜を採ってきてくれたのに」

「一晩じゃ腐りはしない、明日食べればいい」

今の膳に料理を頼んだら、とんでもないものになりそうだし、俺はできないし。

食べられないのは寂しいけど、仕方ない。

俺が振ってしまった話題の所為で沈ませてしまったのだし。

「お休みガート」

二階にやっとで上がり、膳が床に着くのを膳の部屋の入り口で確かめて、俺も隣の部屋へと移った。今日の話題はやばかった。

だがどれだけの力量なのかを知っておきたいのはある。いつかは対立するだろう。

その『都市』とやらの力を。

「いい振りだ、明日も雨か？」

ベッドから窓の外を眺める。そこは見えない壁がある。俺が被せた結界がある。

だから雨は入ってこない。ただ良く見えるだけだ。

「六年前、『円陣』を張れた人間はどれだけ張り続けていたのだろう、きつと村の周りにも、結界を張っていたのだろう、そうでなければもつと早くに見つかり、襲われていたはずだ、奴らは生身ではないのもいる、砂漠だろうと海だろうと、渡れるだろう、そう思うと、とんでもないのが敵だ、本当に、守りきれぬのか？俺の能力で」

ふと、右手の秘石を見る。何の能力も持たない膳でも、これを持っていれば多少は力が使えるようになるだろう。

己の身を守る事くらいは出来るだろう。ほんの少しの結界だ。

それに秘石ならそんなに命をとられる事もないだろう。使い方にもよるが。

「一つ、持たせておこうかな、気休めには、なるだろうから」

秘石は衣類の中にも仕込んである。それは徐々に強くなる能力を抑えるため。

また強く発動させるために使う。一つ一つは決して大きくないのだ。どんなに大きくても、片手に余る。綺麗にそれを模り、武器に装着してもよし、衣類に飾りでつけてもよし、なのだ。

小さい秘石の一つに穴を開け、紐を通す。簡単なペンダント仕様だ。これなら、少しは安心できる。後は俺が出来る限りで村に結界を張って守るだけだ。

「これでよし、明日膳にあげよう」

紐を摘み、石を揺らしてその光を見る。深い青。こんな物で救われるなら、安いものだろう。

ふと、窓の外をまた見る。雨雲は、まだ見える限りの空を埋め尽くしている。

あまりいい景色とは言えないし、過去の話を書いてしまった所為だろうか、嫌な感じはする。

それでも、慣れてきたとはいえ労働は疲れる。石を枕元に置き、俺は寝に入る。何かが蠢く。

しかし俺は、ここに来てとても平和な世界に馴染んでしまっていた。だから、それに気付く事が出来なかった。長年の勘も、旅中に身に着けた精神力も、確実に薄れていた。

遠いところで、大きい音がしたような気がした。だが俺は夢の中だったために、現実の世界での音とは気付かなかった。

また、確認する事も出来なかった。なにしろ凄まじく寝入っていたからだ。

機械音が、地震か、そんな感じの音だったような気がする。

暫くして、夜中に目が覚めた。

23

ただ、寝ぼけていた。ここに来てから、夜中に目が覚めることなんて一度も無かった。

何故なら、初日はとにかく疲れていたし、膳にあえた事で緊張感が切れ、寝てしまったし、二日目も数年ぶりの対人で疲れた。

三日目からは労働が加わり怖ろしく爆眠した。

それまでは、砂漠ではともに睡眠は取れなかった。

砂漠を抜けても、寝たらもう起きる事はないのではないかと思うほど、俺は疲れていた。精神的にも、肉体的にも。

ここで膳と出会って、その安心感で眠ってしまったのだと知った時、俺は自分でかなりのショックを受けていた。

それからはもう安堵しきってしまい、かなりの睡眠をとることが出来た。

それなのに、何故目が覚めてしまったのだろう。

用を足したいわけでもない、雨が煩い訳でもない。じゃあ、何だろう。

目覚めたとはいえ、頭はまだ呆けているし、思考回路は遮断された状態だ。でも何故だろう。

身体も寝ている感じなのに、何となく膳の様子が気になった。

床に着くまでは見送って居るが、その後は分からない。

勿論、起きていても寝ていても、口出しをするような事ではない。それは自由だからだ。

そう思うのに、足は、身体は自然と動き、膳の部屋の前まで行く。

耳を澄ましても、何も聞こえない。気配もない。

寝息もなければ、普通に起きているその息すら聞こえない。自然と、手が部屋の扉を開いた。

そこは、膳の姿は無かった。部屋に入り、ベッドに手を置く。まだ少し、温もりがある。

そんなに時間は経っていないのだ。トイレだろうか、でもだとしたらそんなに長い時間は掛からない。

寝ぼけている頭が、何かを感じ取る。はっきりとしないのに、窓の外がまた気になる。

膳は、外に居る。何故だろう、そう思った。足は外へ向かう。

ふと変な臭いと気配を感じ取る事が出来た。それは、工場から発されていた。

「何だ、これ」

工場を突き破り、怖ろしいほどの巨木が生えていた。あり得ない。

今日、いや昨日か、仕事が終わって今は夜中。そんな急速に成長する木なんて聞いたことがない。

そして、それから発される気は、どこかで感じたことがあった。俺はそれを、知っていた。

近付くにつれ、血の臭いが漂ってくる。かなり大量の血が流れている。足は必然的に急ぐ。

寝ぼけていても、内に秘めがちになっていた戦闘意識が強く出たと思う。

走る、というよりは、飛んでいた気がする。上から見た工場は、見事に破壊されていた。

四方八方に枝が伸び、窓や壁を突き破り、動く。植物、というよりは生物なのだ。

工場の入り口があつた所に降り立ち、中へと足を踏み入れると、血の臭いがとても濃くなった。

薄暗い闇に包まれ、視界は悪かった。だが巨木の枝に三人と膳が絡め取られているのが見えた。

「膳？」

「っガート！？駄目だよ、入ってきてはいけない！お前は逃げるんだ！」

驚き叫ぶ膳は、鼻の頭から大量の血を流していた。恐らく、捕らえられた時、枝が掠ったのだろう。他の三人は、もう殆ど意識がない。動きが全く見えなかった。息はある。膳が一番最後にここに来たのだろう。

あの時間こえた音は、これだったのだと分かった。相当な音がした筈だ。

きつと他の三人は、その音でここに来たのだろう。膳も、恐らくまともに寝ていなかったのだ。

だから直ぐにここに駆けつけ、捕まったのだ。仕事と俺の世話で疲れ果て、熟睡していた。

だが、物音と予感、と言うのかな。それできつと目が覚め、此処に来たのだ。

それだけ遅れたから、膳はまだ大きな傷も負わず、生きているんだ。ゆつくりと、俺の足は前進する。

「ガート、聞こえないのか！？引くんだーっ！！」

限界まできつと声を張り上げてる。掠れている膳の音が耳を過ぎる。

俺は、今までにないほど、怒りが心と頭を占めていた。足元に枝が伸びてくる。

前方からも様子を見るかのように襲い掛かる。それを交わし、横目でそれを観察する。

木だというのに鋭利な刃物のようだ。自在に形を変える事が出来るらしい。厄介だ。

だが、今の俺にはこれをどうこうするより先に、膳達を助けるのが先だ。

右手の秘石に意識を集める。その間も来る枝は、絶えず短剣で切り離してきた。

珍しい物ではあるが、俺にとってはそんなに厄介な敵ではない。

そう、人質さえ、取り外してしまえば、どうって事のない相手だ。

次第に秘石に光が集まり、球体になっていく。

闇にぼんやりと浮かぶそれを、木の中心に向けて翳す。それは木に向かい、ゆらりと飛ぶ。

枝がそれを阻止しようとも、通り抜けるだけで光は消えない。逆に枝が燃えてその場で朽ちる。

『凄い』

色んなところで枝が燃える。そこから切り離して、新しい枝を生やす。

本当に良く出来ている。きりが無いとはこの事だ。

だが、兆しがないわけではない。所詮は、木なのだから。

「さつさと消えろ、目障りだ」

光は、木の中へと吸い込まれていく。木は、光を取り込みそこから少しずつ光を膨張させる。

光は木の繊維を壊し始める。

「木ならしく、燃えてなくなれ」

一気に周りの空気も引き込み、巨木は勢い良く燃える。それにより、膳も他の三人も振り落とされる。

黒い煙が、空へと昇る。それを雨が打ち消す。

さようなら

昨晚よりは弱くなった雨が、俺たちを打つ。木が炭になっていく中、俺は膳へと足を向けた。

「みんな・・・」

燃えている枝を払いのけ、膳はボロボロになりながらも三人に歩み寄る。動かしているその中、三人は殆ど動かない。

もう、今の状態では生きている方が不思議だろう。それでも膳は必死に三人の身体を揺すり、声をかける。

「返事をして・・・何で、何でまたこんな目にあわなければいけない!？」

膳の体が震えている。声が裏返っている。泣いているのだ。俺は膳の後ろに歩み寄り、座った。

「膳、無理だ」

「何がだよ！分からないだろうそんなの!」

凄い形相だった。俺の心無い言葉に、膳は俺に掴みかかってきた。顔中が涙で濡れていた。正直、辛い。膳が悲しんでいる。

「助けてよガート、僕も三人も助けるって約束したじゃないか！」

「・・・膳、無理だ、俺には癒しの力はない、助けられない」

掴んでいる手に力が入る。目にも、威力が増す。怒っている。手は、震える。

いや、全身が震えているのだ。その目が語る。

『嘔吐き・・・!!』

と、声にならない言葉が、俺の中に聞こえてくる。

「膳・・・」

か細い声が聞こえる。たった一人だけ、声を出した。手もほんの僅かだが動いていた。

「慄！良かった慄、生きてるんだね？」

嬉しそうにその手を握り締める。その手はとても弱々しく、工場で鉄鋼を抱えて、肘や橈に対して怒鳴り散らしていた姿が嘘のようだ。

「膳・無事だな、ガートも」

「うん、うん、大丈夫だよ」

「あまり、話、出来ないから、一つだけ」

ぽつりぽつりと落とす様に言う慄。性格かな？こんな時すら、きっちりしている。

膳は、震えながらもしっかりと手を掴んで、慄から目を逸らさない。

「膳、ガート、俺も・・肘も・・橈も、お前の事凄く・・大切に思ってた」

「うん」

「生きていてくれて、良かった・た、それだけで良い」

「慄、これからは、三人で」

「・・・それは無理だ、俺はもう、」

「え？」

「膳、今までありがとな、これからは、ガート、と生きろ、今度はお前が・ガートを・護るんだ」

どこを見ているのか分からない目は、ただ空を見る。そして静かに、目を閉じる。

溜まっていた涙が、最後に流れる。激しい痛みがあっただろう。

苦しみも、悔しさもあっただろう。でも、それは膳が生きていたという事で、きっと全て消えた。

「兄」として、きっと「弟」を守りたかったのだ。きっと三人とも、そう思ったのだ。

ここに膳が入った時、三人は止めたのだろう。膳が俺を止めたように。

でも、目の前で大切な者が傷つけられているのに、引ける者なんて居ない。俺も、膳も、同じだ。

「嫌だ、こんな・・・嘘だろ？僕をからかってるんだろう？目を、開けてよ・・・また僕の名を、呼んで」

返事はない。もう、事切れてしまっている。膳はきつと、とても悲しんでいるのだろう。

俺には、分からない感情だ。

「僕だって、貴方達の弟になれた事、貴方達を兄にもてた事、誇りに思うよ」

手をとったまま、泣き崩れる。叫びのような、嗚咽のような、心から悲しみがあふれ出していた。

体中に傷を負い、体内の血液は半分以上、流れ出てしまった事だろう。

一番傷の浅かった慄は言いたい事を残し、逝った。即死に近かった二人だって、話をしたかったろう。

膳を残して死にたくは無かったのだろう。ここに来て、やっと手にした幸せだったのだろう。

きっと、俺と同じ。ここが彼らにとっても

楽園だったのだ。だから、そこで最愛なる者の元で逝けたのだから、
きっと幸せなんだ。

一人で朽ち果てるより、余程幸せだ。

絶望の始まり

「膳、家に帰ろう」

どれだけそうしていたのだろう。雨も手伝い、三人の身体は一気に冷たくなっていった。

まだ命がある俺も膳も、すっかりと冷えていた。

声をかけても、膳は動かなかった。三人の死を、受け入れたくない。そう背中が語っていた。

その手を離したくないのだと、物語る。

冷酷なのかもしれない。俺は、たったの数週間。でも、されど週数間は共に過ごした者が死んだというのに、涙が出ない。

その分、膳が泣いているのではないかと思うほど、膳は泣いていた。枯れ果ててしまうのではないかと思うくらい、大粒の涙を零していた。

「三人も、こんな雨の中では、可愛そうだろう？膳」

「んで・・・」

後ろから肩を叩いた俺に、膳が何かを呟いた。声は掠れていて、途切れた。

ゆっくりと三人の手を下へと下ろした。そして振り返る。

「何で助けてくれなかったんだ！特殊な能力を持っていたのに！あんなに簡単に倒せたのに、何でもっと早くに気が付かなかったんだ！何で、何で！ガートー！」

肩を掴み、激しく揺さぶりながら言う。いや、叫んだ。辛くなる。

もっと早くにここへと来ていたら、助ける事が出来たかも知れない。少なくとも、もう少し長く、話をさせてあげることが出来たはずだった。

この村での平和に慣れすぎた、俺の責任だった。大切な者にこんなにも辛い、悲しい思いをさせた。

こんな顔をさせているのは、俺自身だ。悔しい。でも、何て言葉をかけてやればいいのか、分からない。

何を言っても、空言になりそうで、聞き入れてはもらえないのではないかと、俺は何も言えない。ただ、膳を守りたい。

そう思うことしか出来ない。肘は、俺に対しても声をかけた。

俺のことも、弟だと思っていた。だから俺は、今死に逝く兄が残した言葉を守りたい。

膳は、俺が守るんだと決めた。今は、ただ頭を撫でてやる事しか出来ない。

足りない弟だけど、でもそばに居てあげる事だけは出来る。

ゆつくりと、傷を癒せてあげることが出来たら、それでいい。身代わりでも、それでもいい。

「膳、このままじゃ三人だって可愛そうだ、屋根の下に入れてやるう?」

なるべく穏やかに、話しかけた。膳は、ずっと俺の肩を掴んでいたが、やっと離れた。

そこには血のシミがついた。三人の血と、膳自信の血液だ。

動きを見ていると、膳はまず一人、抱え込んだ。そして引きずるように外へと出て行く。

「俺も手を貸す」

膳よりも大きい大人を三回も担ぐのは、かなり無理がある。俺も背

は低いが力ならある。

膳とすれ違い、残りの二人に手を伸ばすと「触らないで」と後方から声をかけられた。

「僕がする、これは僕の役割だ」

「だけど、膳の家まで運ぶつもりなんだろう？体力が持たない」

「分かってる、でも外において置いたら死体すらも持って行かれてしまいかも知れない」

それは一理ある。確かにそうだが、しかし、その行動を見ることしか出来ないというのは、以外に辛い。

足元も覚束無い状態でやっとで歩いている膳を見ていると、手を貸してしまいたい。

でも、じつと我慢する。膳は今、かなり必死になっている。むきになっっている。

後ろからずっと付いて歩いて、膳が何時崩れてもいいように構えていた。

結局は一度も諦めずに三人を運びきった。膳の家の、俺たちの憩いの場所に、三人の遺体が並ぶ。

傷だらけになった、決して綺麗とはいえない遺体だ。でも膳は、それをとても大切に扱う。

手も足も泥と血で汚れて、それでも三人を濡れタオルで顔や手を拭き、綺麗にしている。

最後くらいは、と思ってるのかも知れない。

随分と、体力を使ったことだろう。三人とも拭き終えて、やっと膳は気が済んだのか、倒れこんだ。静かに、寝息を立てている。

「やっと寝た、無理をしすぎだ」

部屋の片隅でずっとそれを眺めていた俺は、膳の汚れた衣類を剥ぎ取り、シャツと下着だけの状態で膳のベッドへと運ぶ。

まるでここに来た初日の俺のようだ。膳の顔は、土と自分の血と、涙でボロボロだった。

一度下に行き、三人を拭いたのとは別のタオルを濡らして膳の顔を拭いた。

ふと手を見ると、手もまだ血が付いている。固まっている。

きつと三人の血も、固まっていて取れなかった事だろう。

目元は赤くなり、腫れぼったくなっている。明日目が覚めて、下に

ある三人を見て、きつと膳はまた泣くのだろう。

また自分の所為だと己を責めるのだろうか。ならいっそ『お前の所為だ』と当たられた方が、まだましだ。

これ以上傷ついて欲しくない。

最悪の再会

「守れなかった、何のための能力だというのだ」

頭を撫でても、布団をかけてみても、膳は起きなかった。相当参っている証拠だ。

俺は、心配をしつつも、一度自分の使ってる部屋へと向かった。そしてそこでまだ不思議な感覚を覚えた。工場に化け物が出てた時と同じ感覚。

「まさか、これは」

咄嗟に窓の外を見る。しかし何も見えない。だが、強い気配を感じ、ベッドの脇に置いてあった剣を背負い、窓から外へと飛び出す。

屋根に上がり、辺りを見渡した。

『流石だなあガート、簡単に倒したなあ』

頭の上から声がした。懐かしい声。この感じ。その者は俺の前に降り立つ。焔^{ほのう}だ。

「まさか、お前なのか？あれを作ったのは・・・」

『作ったのは『都市』（とし）オレは種を蒔く様に言われただけに、どんなもんかなあって、思っただけさ』

あつけらかと、笑いながら言う焰は、あの時と変わらない。だが、俺の中には怒りが生まれた。苛立ちが抑え切れなかった。

「お前、それで人が死んだんだぞ！笑い事か？！」

『何を言ってる、オレは『都市』の使いだぜ？ガートに初めて会った時言ったよな？余所者は排除するって』

「だが、殺された奴らは、この村の民だったじゃないか、何故殺した」

『おいおい、勘違いをするな、オレは殺してない、俺は直接手を下していない、分かってるよな、あれは木、『都市』が人だけでは飽き足らず、植物にまで手を伸ばした、かなり出来のいい物だったんだぜ？』

「あの程度の駄作で、何をいう、試作品だか何だか知らないが、人の命をそんな簡単に奪って言い訳がない！そうだろう？」

悔しく思った。あの時出会って、良い奴だと思った。俺を助けてくれたし、だから、気を許した瞬間もあった。

まさか『殺し屋』なんて、冗談だとも思った。それなのに、答えがこれだなんて、あんまりだ。

『仕方ないだろ、お前を取り逃がしてそれがバレちまったんだから、大体ガートがこんなところに結界を張るから悪い、これさえなければ『都市』の長^{おさ}だって、気付かなかったのに』

その言葉に、啞然とした。良かれと思ってやったことが、裏目に出たのだ。

確かに、今の世界に俺ほどの能力を使えるものは居ない。

ましてや、この村にいたのは、殆ど何の能力も持たない者ばかりだった。

それなのに俺が結界を張り、能力を使ったことで、敵にばれるなんて。

『仕方ないな、お前は普通と違う、能力が半端^{ちから}じゃない、連中では足元にも及ばない、何しろ大した抵抗も出来ずに、簡単に捕らわれて、幾度も刺されたり、叩きつけられたりしてたしな』

「お前、ずっと見てたのか？」

『ああ、木の一番上で見ていた、中々見れないし、最近そんなに人数居るところがないから、楽しめた』

「木？俺は上空から来た、でもお前の姿は見えなかった」

『当然だな、オレ、ガートが来たのが分かったから、隠れてたんだ、それで様子を見させてもらった』

それではやはり、あの時感じ取った気は、こいつ、焰の物だったのだ。

『都市』の気配。通りで残るはずだ。あれは殺気ではなかった。楽しんでいたのだ。

なんて悪趣味なんだ。人の戦いを、人の死を見て喜ぶなんて。

『でもガートが来た所為で連中、楽に死ねなかつたら？あと少しで楽にしてやる事が出来たのに、ああ、鼻の頭に傷を負った奴も一緒にな、まさかガートと共存しているとは、それは予想外だったけど』

「一つ言っておく、膳に手を出すな、もし出したら、俺が全力でお

前を止める」

『情が移ったのか？単なる人間、いつしか単なる入れ物になる、単なる玩具だろう？』

「焰！」

背に手を回し、剣を振りかざす。そして焰を睨み、刃先を焰の喉に向ける。その瞬間ですら、焰は笑っていた。

それを待つて居たんだと言わんばかりな顔をしている。

その余裕の顔を見て、余計に頭に血が上る。目の前の相手に、一気に切りかかる。

『オレにはこんなもの、効かないって』

右手から炎を発し、盾を作る。それですんなりと俺の剣を交わす。

二度、三度と切りかかるが、その度に炎がそれを飲み込む。

『言ったじゃないか、オレは火を操る、剣が火に敵う筈がない、分かっていながら何故攻撃を仕掛ける？』

「お前が俺の大切な者の、大切な大きな幸せを消したからだ」

『命を拾われたくらいで、食料や水を恵んでもらったくらいで、お前はこの家の者に忠誠を誓うのか？大したものだ、ならばこの家の者もおれが消してやるよ』

「ふざけるな！俺を前にして良く言えたものだ、膳には手立てはさせない、今度は俺が返す番だ！」

手に力を込める。秘石から剣に力を注ぐ。そこからはゆらりと気が沸き立つ。

「単なる剣は駄目だが、お前が持っていない能力なら、いくらでも使うことが出来る、交わし、俺を殺したら行けばいい！」

『能力、か、確かにガートの能力はおれとは異なるかなり特殊な物だ、しかも今、ガートのもてる限りの力を見ることが出来そうだが、それはとても面白い、だが、お互いに無傷ではすまない、それは前会った時言ったな？生かしておけば、いつか面白いくらい、いい戦いが出来そうだと、今でもそう思う、だが八つ当たりが籠った力でやられるのも癪だ、今回も引く事にするよ』

「八つ当たり？」

『『都市』がオレに命じた事であってオレの意思でしたわけではないからな』

「何を言う、命を受け、それを実行した！実行する・しないは本人の意志だ！お前の意思だ！」

『はは、言ってる、だが、お前もかなり厳しそうだしな、楽しみはまた今度って事で』

そういうと、焰は高く飛び、消える。俺は剣に込めた気を沈め、暫しその空を眺めていた。

まさか焰が出てくるとは思わなかった。

確かに殺しては居ないのだから、またいつか会うときが来るとは思っていた。

しかしこんな形で再会するなんて・・・。

やっと手にした大切な者を俺から奪い取るのが、焰だなんて、嘘であって欲しかった。頭を抱え込み、蹲る。

「最悪の、再会だ」

膳が寝ている時でよかった。もし起きていて、全てを聞いていたら、きっと膳が焰に食いついていたことだろう。

そうしたら、容赦なく焰は膳を殺していたかも知れない。

仲間においていかれたのだから、そこで共に死んだ方が膳は幸せだったかも知れない。

でも俺は膳に生きていて欲しかった。だから、他の連中は駄目だと分かっていたけど、膳だけは助けたいと思った。

命の恩人だ。見捨てるなんて出来ないし、俺だって一人になるのはもうごめんだ。

あの三人も膳には生きていてほしいと思っただろう。それは、死に様からも伺えた。

心底安心した顔をしていた。殆ど、意識も無かっただろうに。情、というものだろうか。

長く共に過ごし、戦ってきた。仲間。

六年前の惨劇を共に乗り越え、それから今まで助け合って生きてきた。

本当の兄弟より、家族より、きっと深い繋がりとなっていたのだろ

う。

俺には、まだわからないが、でも膳が死んでいたら、きっとこの村を消し去るくらい、暴れたと思う。

最後のお別れ

「膳は、大丈夫だろうか、明日になって、自分も死ぬと騒がないだろうか」

窓から部屋に戻り、不安になる。最愛なる者の亡骸を、起きて直ぐに目にする。

それはどれだけ絶望的なことだろう。俺なら、膳が死んでいたら、コールドスリープでもさせて、一生腐らないようにして、俺が死ぬ時に出して、ともに同じ墓に入れるくらいの事はするかも知れない。

今の俺にとって膳はそれだけ大切な存在だ。問題なのは、膳にとっては俺は多分、そんなに大切な者ではない。

三人の亡骸の前に、また壊れていく膳に俺が何を言っても、声は届かないかも知れない。

俺が居るから、生きよう、とは思わないかも知れない。そこまで重要ではないのだ。

俺には、膳の悲しみや苦しみは良く分かっていない。だってそれだけ大切な者を失った事がないからだ。

勿論、両親の死は、看取っている。しかしそれとこれとはまた違う。血の繋がりだけではない。もっと違う、深いもの。

俺が膳を失うのと同じ。また、俺が兄様を失っていたら、膳の想い

が少しは分かったかもしれない。

誰かに当たり、ぶつけて、でも闇は晴れない。あの人達の傍に行こう、と死を望むかも知れない。

膳がもし、そうなった時、俺はどうやって止めるのだろう。

「俺が頼んでも、きっと聞いてくれない、今は何も届かない」

ベッドに寝転んで、枕もとのそれに気が付く。つい数時間前に作って膳にあげようとしていた秘石のペンダントだ。

結局渡す前に最悪の事態が起きてしまった。もう、何の役にも立たないのかも知れない。

でも、明日起きたら膳にあげよう。今の膳には判らないかも知れないけれど、でもお守りに位はなる。

あの三人は、膳に俺を守れといったけど、俺は膳を守りたい。あの三人がしていたように。

膳が俺にしてくれるように、俺だって大切なんだから、守りたい。命を賭してでも譲れない物はある。

「あまり意味はないけど明日村全体に結界を張ろう、強い壁を作っておこう、そうすれば当分ここは襲われない、そう、焰はのうやそれ以上の能力ちからを持っていない限りは、村を発見する事も出来ないくらい

の強力なのを張ろっ」

そっ、もはや無意味なのだが、それでもないよりはマシ。保険、という感じだろうか。

とにかく何かをしないと気が済まない。この村のために。膳のために、死んで行った三人のためにも、できる限りの事をしたかった。

「膳？」

翌日、起きて直ぐに膳の部屋を覗いてみた。そこには、膳の姿は無かった。

何時もの事だが、今回は不安だった。もしかしたら、下に行ったら遺体が一つ増えているのではないかと、心配になっていたからだ。

何時もより急ぎ足で階段を下り、三人の遺体しかないので確認した。良かった、膳は転がっていない。と胸を撫で下ろした。ふと、後方からなにか物音がする。

土を掘り起こす音。振り返り玄関の外に目をやると、膳が穴を掘っていた。しかも随分と広い範囲で掘っている。

「膳、何をしてるんだ？」

「お墓を、作るんだ、三人が入れる、お墓を」

手足を泥だらけにして、額から汗を流して答える膳。

滝のような汗、とはまさにこの事だ、と思うほど、凄い汗だった。

何時から掘って居たのだろう。手には無数の豆が出来、潰れて血が出ていた。皮が捲れる。

それを通り越して、きっと手のひらの皮全てが捲れ始め、血が滴っているのだろう。

とても痛々しくて、目を逸らしたくなる。膳には今、痛みすらないのだ。

ただ三人を早く休ませてあげたい。

その一心で穴を掘り続けているのだろうと思った。手伝うべきか、考えた。

もしかしたらまた『僕の役目』なんていつてももさせてくれないかも知れない。

それでも、こうして起きて、何かをしているのには安心をした。

もしかしたらそのまま廃人にでもなってしまうのではないかと、心配をしていたからだ。

暫くは、膳が一定のペースで穴を掘っているのを黙って見ていた。

目はどこを見ているのか分からない、うつろなもので、ただ手足は動いていた。

まるで、ロボットのようだと、思った。感情を持たない。

人間の命令どおりに動くロボット。結局は何も出来ない自分の無力さを、俺は呪わずには居られなかった。

能力だけはあっても、それを使って大切な人を守ることすらままならない。

それなのに『守りたい』という想いだけは、薄れず、却って強くなっていた。

「俺は、俺も三人の意思を継がないと、弟として見てもらってたわけだし」

その場に横たわっている三体の死体。壮絶な死に様だったのに、死に顔はとても穏やかで、今の世界で、どれだけの人間が三人の様に大切な人に看取られ、死んでいるのだろうかと思う。

そして俺は、最後どうなるのだろうか。ここで膳に看取られるのか？それとも

俺が看取るのか？どちらでも、嫌だ。一人になるのも、一人にするのも、嫌だ。

二人同時に死ぬなんて、無理に決まってる。心中でもしない限りは無理なんだ。

それでも、やはり同時にはならない可能性が高い。今、この状態で俺が消えれば、膳もきつと死ぬ。

でも俺が居る以上膳が生きるなら、俺はずっとここに居たい。

拒絶されるまで、ずっとここで見守っていたい。そう思うのは、エゴなのだろうか。

やっと出会えた大切な人を守りたい。そう思うのは、きつと誰でも同じなのだろう。

俺が一人、考え事をしている内に穴は大きくなり、そこへと一人ずつ膳が運んでいく。

冷たく、重くなったその体を再度触って、膳は何を思っただろう。

そして俺は、何故ここまで来て涙も出ないのだろうか。既にもう、人間ではないのではないかと思う位、俺は何もない。

ただそう、膳に対する思い以外何物も今はない。俺のほうが、ロボットみたいだ。

「今までありがとう、みんな、これでゆっくりと休めるね、約束するよ、僕はちゃんと生きるから、みんなの分まで」

並べた三人に手を合わせてそう呟く。最後の言葉だ。俺はそこへゆっくりと近付く。

膳の目は、変わらず遠くを見ている。三人を見て居るのだろうか、焦点は変わらない。

うつすらと涙が滲んでいる。これが現実だと、信じたくないのだろう。

きっと夕べも目が覚めたら三人が笑顔で、工場で迎えてくれる。そう思っていたはずだ。

それは、叶わぬ願いだが、当たり前願いだろう。

「膳、俺も別れを」

穴へと下り、膳と並んで静かに目を閉じる。思うことは、言う事はたった一つ。

それは言葉にはしなかった。膳に皆を守ると約束をしたのに、俺は結局一人しか救えていない。

しかも精神が、心が壊れてしまっている。これでは救ったことにならない。

身体は、命は救っても、中身も救わなくては意味がない。これから何年経ってでも、俺は膳を元に戻してみせる。あの笑顔を、もう一

度見るために。

作り笑いではない。あの工場での暖かった日々の、あの笑顔を、また見たいから。

まともに顔を見ることも、じゃれあう事も、俺は嫌っていたから、この三人に対してもそうだった。

それを今、後悔もする。そうだ、今俺たちが置かれている世界は、戦場なんだ。

目に見えて、銃撃戦があるわけではない。死体がゴロゴロと転がっているわけでもない。

でも、それでも戦争なんだ。これは。そして戦士は、生きている人間全員。

決して逃れる事の出来ない、争い。国も何も関係ない。全世界規模の、最大級の物。

最悪な物。先に、穴からのぼり、膳に手を貸して引き上げる。

土はゆつくりと三人にかけられる。足元から徐々に上へと、埋まっていく。

途中で膳の手が幾度も止まった。少しずつ見えなくなっていく三人に、近付こうとする。

それは無意識な行為だ。離れたくない。そう思うが、身体を勝手に動かすのだろう。

理屈ではない。これは、愛情だ。その度、俺は手を伸ばし、阻止する。

まるで愛し合ってるもの同士を無理やり引き裂いている、悪者のようだ。

だが、膳は生きている。一緒に埋めてやるわけには行かない。それは、三人の意思に反してしまう。

ふと膳が上着を脱ぎ、三人の顔に掛けようとしていた。

それを見て、顔に土をかけるのが嫌なんだと気が付いた。

だから俺も脱いで半々でかける形になった。俺も膳も、汗だくで土をかけた。

これだけの穴を掘ったのだから、膳はもつと沢山の汗をかいていたことだろう。

思いつきり水を浴びたい気分だった。汗を吸い込んだ衣類が気持ち悪かった。

今までの生活では、そんな事当たり前だったのに、ここに来違う生活をしていたら、すっかりと身体も贅沢を言うようになった。

だが、膳は穴が埋まっても、そこに立ち尽くしていた。もしかしたら穴を掘り起こすのではないかと、心配になった。

でも、それはなかった。ただ、突っ立っていた。

孤独との戦い

「中に入ろう、風呂を沸かそう、土も、血も、洗い流そう」

静かに膳の腕を掴み、揺すり語り掛ける。返事は無かった。ただじつと、下を見つめていた。

その目から、涙が落ちる。全てが終わったと膳の中で理解をしたのかも知れない。

重い足取りで、俺に腕をつかまれたまま、歩く。いや、俺に引かれているだけ、と言った方が合ってるかも知れない。

幾度か膳が沸かしてくれた風呂は、俺がやった事はない。

だが今の膳にそれを任せるのは無理だと思った俺は、何とか記憶を遡ってやっとで風呂を沸かした。

膳と共に入る風呂は、久しぶりだった。慣れてくると一人ではいることもあった。

お湯や時間が勿体無いと一緒に入る事もあったが、どれ位ぶりだろうか。

大して時間は経っていないのかも知れない。三人が亡くなり、まだ一日しか経っていないというのに、もう何日も経っているような錯覚に襲われる。

それは、ここまで弱ってしまった膳を見ているからなのだろうか？
それとも、あまりにも色々な事が興り過ぎて俺の頭がおかしくなっているだけなのだろうか。

難しいところだ。

「飯、どうやって炊いてたっけ？炒め物とか、切り方って？」

放心状態の膳。しかし生きている、という事は俺と同じで腹は減るはずだ。

でも料理も、させるわけには行かない。俺がやるしかない。

だが、言うまでも無く包丁なんて持ったことがない。剣は、あるが、ちよつと違う。

焦げたご飯と味の纏まらない、歪な炒め物。

見るも無残な姿になったそれを見て、俺は正直落ち込んだ。

「俺、何でこんなにも不器用なんだ？これは料理か？」

一口食べると、自分で言うのもなんだが、不味い。だが材料を無駄には出来ない。

自業自得だ。俺は不味い物を食べるとしても、膳は何かないものかと探っていると、膳は無言で俺の料理を食べていた。本当に、無心だった。

「感情だけでなく、味覚もないのか、五感も、働かないのか」

黙々と食べている膳を見て寂しくなった。本当に、人形と共に居る気分だった。

何とか元に戻って欲しくて、できる限りで接し、努力を怠らなかった。

風呂も料理も、洗濯・掃除も出来るようになるまで、何度も失敗をしたし、落ち込んだりもした。

その間の膳の様子は一向に兆しが無かったのだ。あの時、三人に最後の別れを言った時、あれから一言も喋っていない。

焦らないわけではない。どうにかして元に戻らないものかと、考える時間が長かった。

手を触ってみれば暖かい。食事はとるし、排泄もする。それなのに、喋らない。

目が俺を見てくれない。笑ってほしい。ただそう願った。

夜はきちんと睡眠を取っているかチェックをしたし、栄養はどうしたって足りないがなるべく頑張って色々食べさせる様にした。

といつても、作って置いておけば今までどおりのリズムで身体が食べていた。

無意識に生きるための行動を取っているのだ。それだけは、安心できた。

後を追うことも無く、無表情でも、膳は生きて居てくれている。恐らく三人との約束だからだろう。

生きる事、そして俺を守ること。兄として、それが役割だからだ。

だが俺では、膳を取り戻す事は出来ないのかも知れないと、何度もくじけそうになる。

寝顔を見ると、寂しくなり、涙が出ることもあった。寝ているときだけは、以前と変わらな
い姿だからだ。

「膳、これ渡すのが遅くなったけど、お守りだ」

意識のない膳の首に、あの日作ったペンダントを掛ける。それは膳の鎖骨の辺りで深く光った。

その光は、曇っている膳の目に入る。暗い膳の目に入るそれは、まるで膳の目が、自ら光っているように錯覚をさせる。

反応する事は無かったが、それでも俺は良かった。この先何があっても俺が傍に居て守ればいい。石だけに頼らず、できる限りで尽くすしかない。

あの三人が死んで、どれだけの時間が過ぎたのだろうか。

出来ている野菜や、気温の差から季節は二度くらい変わっただろうか。仕事をしても滝のように汗が出ることも無く、薄手の長袖では寒くなった。

どうやら冬が近いらしい。緑がそんなにないここでは、季節が移り変わることすら、こうして肌で感じて取るしかないのだ。

涼しくはあるが、その日はとても日が出ていて暖かった。だから俺のと膳の布団と、干すことにした。

下まで運ぶのは大変で、手抜きを覚えた俺は窓から外に出て、屋根の上に布団を干すことを覚えた。

日は近く、そして何と言っても楽しかった。布団を広げ、その場に自分も少し干される。

時間が穏やかに過ぎているのを感じ取る。膳は、きっと今も座ったまま庭を眺めている事だろう。

「いい具合に膨れたな、じゃ、しまつか」

二つの布団を重ねて約二時間ほどでしまい込む。自分のは隣の部屋

になるので一度宙に下り、窓から放り込む。

少し部屋に埃が舞う。掃除はまだまだ苦手で、難しい。

膳の部屋の窓から入り、きちんと布団を敷く。シーツも延ばし、掛け布団を置いて仕上げる。

「うし、寢床の準備完了」

自己満足を覚えて、部屋を後にしようとした時、俺は背後に何かの気配を感じた。

とても小さい。そして人や動物の物とは違う。でも、何かがそこにはあった。

後ろには扉があった。開くと、それは軋みながら口を開ける。ちょっとした物入れだ。

埃や木片が零れ落ちる。

「これは、最初に見たあの、不思議な入れ物」

そこにはうつすらと埃を被ったケースが二つ並んでいた。気配はそこから感じられた。

一つ一つ開いてみた。中身は、武器だった。

「何故こんな物がここに、これは膳の？」

ふと、そのケースに何かノートのような物が入ってるのに気が付いた。拾い上げ、開く。

それは写真だった。少し若い膳と、あの三人。

笑顔で写っている、幸せだった時の、写真だ。

やっと見てくれた

「あれ、そういえば」

何かが引つかかった。写真、そうだ。俺もこの三人と写真を撮っていたのだ。

でもそれはどこにあるのだろうか？そもそも現像はどうやって行っていたのだろうか。

謎が多い村だ。首を傾げてそれを眺めていると、後方で扉が開ききり、壁に当たる音がした。

「膳」

入り口には膳が立っていた。変わらず表情はない。だが、何かが変わっていた。

「うわああー!!」

突然、叫び声を上げ、俺の手から写真を奪い取り、俺を部屋の外へと突き飛ばす。

普段の膳からは考えられないほどの力だった。そして何より、その

声に驚いてしまった。

俺は、廊下に尻餅を付き、その場で呆然としていた。

「おい膳、お前今声が！」

立ち上がり扉を叩きながら半分叫んでいた。そう、やっと声を聞けたのだ。

「来るな！僕の記憶を汚すな・・・二度と部屋に入るな」

扉を開く事無く、膳は淡々とした口調で俺に言う。半年振りくらいの声だった。

それなのに、それは俺を拒絶する言葉だった。あの時と同じ、俺を突き放す言葉。

俺は脱力感を覚え、その場に跪いた。何故こうなったのか、分からなかった。

ただ膳にとって俺は、不要な存在だという事を、深く痛感した。膳にとって大切なのは、あの三人で、その三人との記憶だ。

俺ではない。そう思い知った。暫くはそこで固まっていたが、俺は自室へと戻った。

言い切れない、ショックだった。だが、仕方がないとも思えた。

壁一枚の隣の部屋の声も音も、俺の耳には簡単に届いた。まるで何もない、同室のように聞こえるのだ。

ただ見えないだけで。だから膳がすすり泣く声も、鼻をかむ音も、全て聞こえていた。

俺は、遣る瀬無い想いだった。どうやっても膳を救えないのだろうか。

声も、もしかしたらこれでまた出なくなるかも知れない。膳は、彼らの思い出も一緒に封印をしていたのかも知れない。

出ているとそれを見て泣くから。でも俺は、心が死んでしまうよりは、思っ泣く方がまだ人らしいと思えた。

消す事の出来ない、壊す事の出来ない想いはあるのだから。

「ここまでなのかな、料理も掃除も頑張ったけど、俺ではやっぱり、無理なのかな」

窓から放り投げた布団は、敷けているとは決まて言えない複雑な形で下り曲がり、伸びている。

その上に俺は身体を預けた。正直、身体も心も、一杯一杯だった。軋んで、涙を流していた。

肉体は、生憎とそれを現すことは無く、余計虚しくさせた。

「膳、ご飯は？食べないと身体が持たない」

声を出したあの日から、毎日こうして扉の前から声を掛けた。勝手に開けようとすると中から凄く速さで物が飛んで来た。

そしてベッドでまるで怯えた獣のような目をした膳が、こちらを見据えていた。

それを見てしまったら、もう開く事は出来ない。膳が出てきてくれるのを待つしかない。

「一人にして、何もいらない」

返事は決まってこれだった。一日目は、それでも引いた。だが二日三日と続くと、流石に気が気ではなくなり、力強く扉を叩いた。

「このままじゃ、膳も死んでしまふ！飯くらいきちんと食べる！」

扉が壊れる。そのくらいの力だった。音も、きつと凄かった事だろう。それだけ真剣だった。心配だった。

「それでもいい、こんな世界、もう何もいらない」

力ないその返事に、泣きなくなった。膳の世界に、俺は居ない。不要な者になってる。

いや、最初から居なかったのかも知れない。俺が気が付いていなかっただけで、もうずっと、そうだったのかも知れない。

どうやったって時間は戻せない。まして出会いを変えることも出来ない。

俺が三人に敵う筈がなかった。勝負になるはずがない。俺は、余所者だ。

膳の顔を、三日も見えていない。きっと大変な事になっているはずだ。

水分すらまともに取っていないのだ。自分でここから出ていない限りは。

最も、部屋から出れば俺の耳に直ぐに音が入り、知る事が出来るが、一度も出た様子は無かった。

「膳が死んだら、俺は悲しい、三人だってそう思ってる、死なせるためにお前を生かした訳じゃないことくらい、分かるだろう？膳」

扉の内側に、何かが当たる音がした。そして膳の叫びも聞こえた。もはや何を言っているのか分からない。

それが悲しかった。血を吐く想い。命を削られていく。それが直に響いている感じがした。

あと一日、いや、半日でもいい。早く膳が出てきてくれることを祈った。

そのまま廊下で寝入ってしまった俺の頭上に、何か暖かいものを感じ取った。

うつすらと目を開くと、そこには足が見える。

「膳!？」

慌てて飛び起きた。そこにはすっかりと囊れ、乱れきった髪をした膳が立っていた。

青白い肌と、真っ赤な目。夢ではないかと、固まってしまった。でも、夢ではなかった。

「ごめんね、ガート・ごめん」

床に座り込み、俺を抱きしめると、そう呟きながら涙を流した。

膳の声が、その涙が、そして温もりが懐かしく、怖ろしく嬉しかった。

震えているのは、膳だけではなく俺の身体も、小刻みに震えた。嬉しくて、震えが止まらなかった。

俺の身体は、やっと涙を流した。

暫く俺と膳はその場で抱き合ったまま、泣いていた。

アルバム

「ごめん、落ち着いた？」

そう言つて俺に水の入ったコップを差し出した。膳が、自室が落ち着くからといって持ってきたのだ。

俺はそれを取り飲み干す。膳の事が心配で、自分も大して食事も水分も取っていなかった事を思い出した。

身体が、水分を凄い勢いで吸収しているような感覚がした。

「随分と、酷い事を言つたね、ごめん、気持ちが付いていけなくて」

膳は、久しぶりに表情のある顔で言った。血色は悪い。

それは仕方がないが、それでも感情が戻っただけでも、こうして喋ってくれるだけでも、俺は嬉しかった。

「これは僕にとって凄く大切な記憶なんだ、分かるよね？」

そういつて手に持っているのは写真の入っているノート。アルバムというものらしい。

大切そうに、抱えている。

「写真は、真実を写し出す物、あの三人とはもう二度と写真は撮れないから、これは凄く大切なんだ、だから血が上って、ガートに当たってしまった、ごめん」

軽く会釈をして、少し笑った。それはとても嬉しかった。胸が高鳴った。

今膳は笑ってくれたのだ。それだけで嬉しいと思う様になって居る自分に驚いた。

「三人の夢を見たの、怒られた、生きている弟をほったらかして、何をしているんだと、死んだ後まで、僕は三人に心配をさせてしまっていたんだね、そしてガート、君にも・・・どうしようもない兄だよ、僕は、ガートを守ることが僕の役割なのに」

「そんな事、別にいい、膳が戻ってくれる方が、嬉しい」

嘘偽りは無かった。膳の言葉や態度に、心が悲鳴を上げた。

それも事実だったが、今こうして笑ってくれることで俺の心は少し癒える。

膳が俺の生きる全てになっているのは間違いなかった。人とは、助け合って生きていくものだ、初めて痛感した。

「これからは、ちゃんと生きるから、ガートと一緒に、約束するよ」

その言葉に、また涙がこみ上げてきた。膳の人生に俺が入った。俺と生きる事を誓ってくれた。

俺の存在を認めてくれた。それが凄く嬉しかった。ただ泣いている俺の頭を、膳が撫でてくれる。

それすらも懐かしい行為で、暖かい行動だった。

「そういえば、膳」

服の袖で涙を拭い、頭に引っかかっていた事を思い出した。

「あれって何？」

先程アルバムを見つけたところを指差す。そこにあったケースの中の武器が気になっていたのだ。

「ああ、あれは僕が僕のために作ってくれた武器なんだ、ここに来

て直ぐに『都市』が攻めてきた、あの後に慄が僕の体力、背丈にあう様に作ってくれたんだ」

そう言うのとゆつくりと立ち上がりそれに歩を向ける。閉じてあった戸を開いて、その箱を開ける。

数時間前に見た時より光が強くなって居るように見えるのは、きつと膳の生気が回復してきているからなのだろう。

それにしても、あれほどの武器を作るのは、かなり大変で体力もいる。

原料だつて、どこから集めたのだろうか。それだけ特殊な物になっているのだ。

膳は分かっているようにだが。

「作ってもらい、手渡された時は正直微妙な感じだった、こんな物が必要な世界なんだと、思い知らされた、だから今度こそ、こんな物・・って言ったら失礼か、武器なんて無用な世になればいいなっと思ってる」

それぞれを擦り、そこに映る自分を見ているのか、目が少し強く見える。

実際は、それを使う間もなく村はまた滅んだ。たった二人になってしまった。

でも、生きているだけで俺は良しだと思う。まして『都市』相手ではあまり武器は効かないだろう。

それにあつた武器にしたいなら、それ相当の能力を流し込み、強い物にしなければ、無理だろう。俺が焔と戦った時のように。

「これからそういう世界を作っていけばいい、俺たちで」

「そうだね、生きている限り、いくらでもやり直しが出来るからね」

膳は俺に対してそう笑った。顔色はまだまだ悪い。それでもこうして口を利いて笑ってくれるのは、何より嬉しい。安心する。

「今日は、一緒の部屋で休むか」

「何で？」

「僕はここに来た時、傷だらけだったって言ったよね、その間ずっと三人と一緒にだったって、だから、今は心の傷をお互いに癒す必要がある、明日からはまた別々になるけど、たまには人と馴れ合うのも、いいことだよ」

武器をまた箱へと仕舞い、棚を閉める。俺は、その時膳が何を言いたかったのか分からなかった。

ただ人寂しいのかと思った。辛いから俺と一緒に居たいといってるのかと思っていた。

膳の深層なんて、分からなかった。だから何て事無く、膳の隣に横たわって、一晩共に居た。

ただそれだけで、話が盛り上がるでもなく、ただ笑っていた。そして普通に眠っていた。

俺は、心底馬鹿で、人の想いが分からない人間だと、暫くしてから気が付いた。でもその時には、遅かった。

「ガートは料理が上手になったね、素晴らしい成長だね」

「そりゃあ誰かさんに叩き込まれたから、スパルタで」

「何を言ってる、これからは自分で何でも出来ないと困る、協力する姿勢は必要だぞ」

一月、二月が過ぎると、膳はあの頃のように笑うことが増えた。傷を消す事は出来ないから、全てを忘れてはいないだろう。

あの晩から本当に一度も共に夜を過ごした事はない。しかし俺はそれを不思議に思うことない。

何時もと変わらない日常が戻ってきたのだと、ただそう思っていた。膳に料理も洗濯も一から教え込まれ、最近では交代で家事を行っている。

それだつて出来るだけ膳の負担にならないよう膳が笑ってくれるようにと心がけてやっている事だ。

この年になってやっと相手を思いやるという事を知った。誰かが共にいるという幸せ。

駆け引きでも、取引でもなく、何の等価交換も生じない、お互いがお互いのために生きていた。

少なくとも俺は、膳が必要だったし、膳に必要とされたいと思っていた。

いや、そう思われていると思っていた。思わなければ生きていけないような世界だったからだ。

野菜の種まきから収穫から手入れから、それも教わり、青々と育っていくその若葉を見ては嬉しくなった。

努力の結晶だ。そしてそれを食べ、また種を蒔く。その繰り返し。

それでも、成長は面白く、代わり映えのない生活に比べたら、かなり面白い世界だった。

膳の教えの元、俺は色んな事を急激に吸収し、成長をした。それを見ていた膳は、いつも笑っていた。

だから安心していただけのかも知れない。もう膳があ頃のようにあの三人の後を追う事はないのだと。

俺が居るからこうして生きていてくれるのだと。過信していた。

思い違いだと気が付いたのは、それから更に、五ヶ月くらい経ってからだった。

俺は十六になり、膳は十九になっていた。

平和な昼下がり

「膳、今、なんて言った？」

頭の思考回路が停止してしまった。いや、故障ともいえるかも知れない。

とにかく、なにも考える事が出来なくなっていた。体中の力が抜けそうになっていた。

後頭部から、魂がゆるゆると抜けている。そんな感じがした。

「ガート、僕をこの秘石に封じて欲しいんだ、そう言ったんだよ」

そういう膳の手の中には、俺があげたペンダントがある。どうしてこんな話になったんだろう。

だって今日もいつも通りで、野菜の育ちを見て、何時も通り定位置に座って、まったりしていたのに、どうしてこんな事になってるんだろう。

「もうずっと、考えていたんだ、僕は君と生きていけない」

「何言ってるんだよ、ずっと一緒にいるって言ったじゃないか！」

膳は、とても穏やかな顔をしている。怒っているわけでもなく、沈んでいるわけでもない。

ただ、いつもどおり。そう、膳のその表情は何時もと変わらないのだ。

でも、言ってる事があまりにも唐突過ぎて、俺は混乱していた。

何でそんなに冷静な顔で、そんな言葉が出てくるんだろう。何で急にそんな事を言うのだろう。

「彼らが死んでしまつて、僕は生きていけないと思つた、でもガートが居た、だから僕は生きることが出来た、これからきつと、君を支えにすれば生きていく事は出来ると思つ」

「なら、それで良いじゃないか！お互いが支えなんだから！」

「いや、僕はガートに甘えすぎて居たのだと思つ、一緒に一晩過ごした日、覚えているかい？」

膳は、ちよつと遠くを見るような目で、目の前の俺を見る。すつかりと懐かしいその目を思い出している感じがした。

あの日の事は、俺だつて忘れることはないだろう。初めて他人と一

緒に寝たのだから。

「あの時、ガートを部屋へと招いたのは、武器やアルバムで彼らを強く思い出してしまい、どうしようもないくらい、罪悪感に苛まれたからだっただ、見殺しにした、それを」

次第に目を伏せ、テーブルを見つめて膳は呟く。俺は、何となく立ち上がりたい衝動に駆られていた。

それはきつと突然の告白に、困惑しているからだと思う。

「床に着くと、夢で彼らが言うんだ、何で俺たちを助けてくれなかったんだ、と、せめて共に朽ちてくれと、言ってるんだ」

「何を言ってる、三人ともお前が無事で良かったって、言ってたじゃないか、膳が生きていた事だけがあの三人にとつての救いだっただぞ！お前を守れてよかったって、本当にそう思って死んで行っただぞ！？お前がそれでどうする？」

三人はボロボロで死んだ。決して綺麗な死に様ではなかったがそれでもとても幸せそうな顔をしていた。

それは、間違いなく、膳と俺がこうして生きているから、それを見て笑ったんだ。自分達の役割をまっとうできたと、笑ったんだ。

「今、お前が石に入ってたからってそれが何になるって言うんだ、無駄だ」

「ガートは三人とあまり過ごしていないから、大切に思っていないかったからそんな風に言えるんだ、大切な者を失っていないから、僕は、庭に寝かせた三人が、たまにこつちを見て、僕を恨んでいるように思うんだ、そんな空気を感じ取る事がある」

「それは勘違いだ、お前が自分の所為だと強く思っているからそんな幻想が見えるだけだ、夢に出てくる三人だって、ただ単にお前に会いたくて出て来てるだけかも知れないだろう？それに、それに・・石に入るという事は・・・」

言葉が詰まる。言いたくない。俺の目も、テーブルの上をただ彷徨った。言い切れない感情に、ただ拳に力を込める。

「分かってるよ、ガートが言いたい事」

その言葉に、はっと膳を見た。膳は顔をあげてはいない。ただ石を見ている。

深く光るその石。取り付かれたかのように、見つめる。

「封印は、普通に考えれば死と同じ、普通の人間なら封印するだけでも命が危ない、仮に能力を持っている者でも、何年生きていられるか分からない上に、また人として戻る、という絶対の保証はない、そしてもし、戻れたとしても、人として生きられる時間は、短い」

淡々とした口調だった。その通りだ。封印はコールドスリープと違う。

眠る。といっても種類が違うのだ。入り込む物にもよるのだろうが封印もそれを解くのも、一人では出来ない。

かなりの能力を持った者が必要となる。何故なら、封じる方もそれなりの生命エネルギーを放出しなければならないからだ。

そうは言っても、封印される方はそれこそ辛い。そして封印、というだけあり、死ぬわけではない。

だが、膳のようにほぼ何の能力も持たない人間がどこまでその中で生き永らえられるか、というのが問題となるのだ。

それに、もし『戻りたい』と思った時俺が居なかったら、膳は戻れずに石の中で死に、石になりきってしまうのだ。

故に何の保証もない、怖ろしい賭けのような行為なのだ。

「そこまで分かっているがどうしてそれを望むんだ！何故生きる事を望まない？！俺たちが生きていく事が、三人に対しての最大の

供養で、最大の恩返しだ、それ以外に何があるって言うんだ」

元気になったと思っていた。口調にしても顔色にしても。ただ、夜は唸り声が聞こえたり、寝言、すすり泣く声、辛いのを堪えているのに俺だって気がついていた。

それでも、笑ってくれたから、それでいいと思った。それなのに、こんな展開は、想像でしなかつた。

優しい脅迫・前

「膳、今、なんて言った？」

頭の思考回路が停止してしまった。いや、故障ともいえるかも知れない。

とにかく、なにも考える事が出来なくなっていた。体中の力が抜けそうになっていた。

後頭部から、魂がゆるゆると抜けている。そんな感じがした。

「ガート、僕をこの秘石に封じて欲しいんだ、そう言ったんだよ」

そういう膳の手の中には、俺があげたペンダントがある。どうしてこんな話になったんだろう。

だって今日もいつも通りで、野菜の育ちを見て、何時も通り定位置に座って、まったりしていたのに、どうしてこんな事になってるんだろう。

「もうずっと、考えていたんだ、僕は君と生きていけない」

「何言ってるんだよ、ずっと一緒にいるって言ったじゃないか！」

膳は、とても穏やかな顔をしている。怒っているわけでもなく、沈んでいるわけでもない。

ただ、いつもどおり。そう、膳のその表情は何時もと変わらないのだ。

でも、言ってる事があまりにも唐突過ぎて、俺は混乱していた。

何でそんなに冷静な顔で、そんな言葉が出てくるんだろう。何で急にそんな事を言うのだろう。

「彼らが死んでしまつて、僕は生きていけないと思つた、でもガートが居た、だから僕は生きることが出来た、これからきつと、君を支えにすれば生きていく事は出来ると思つ」

「なら、それで良いじゃないか！お互いが支えなんだから！」

「いや、僕はガートに甘えすぎて居たのだと思つ、一緒に一晩過ごした日、覚えているかい？」

膳は、ちよつと遠くを見るような目で、目の前の俺を見る。すつかりと懐かしいその目を思い出している感じがした。

あの日の事は、俺だつて忘れることはないだろう。初めて他人と一

緒に寝たのだから。

「あの時、ガートを部屋へと招いたのは、武器やアルバムで彼らを強く思い出してしまい、どうしようもないくらい、罪悪感に苛まれたからだっただ、見殺しにした、それを」

次第に目を伏せ、テーブルを見つめて膳は呟く。俺は、何となく立ち上がりたい衝動に駆られていた。

それはきつと突然の告白に、困惑しているからだと思う。

「床に着くと、夢で彼らが言うんだ、何で俺たちを助けてくれなかったんだ、と、せめて共に朽ちてくれと、言ってるんだ」

「何を言ってる、三人ともお前が無事で良かったって、言ってたじゃないか、膳が生きていた事だけがあの三人にとつての救いだっただぞ！お前を守れてよかったって、本当にそう思って死んで行っただぞ！？お前がそれでどうする？」

三人はボロボロで死んだ。決して綺麗な死に様ではなかったがそれでもとても幸せそうな顔をしていた。

それは、間違いなく、膳と俺がこうして生きているから、それを見て笑ったんだ。

自分達の役割をまっとうできたと、笑ったんだ。

「今、お前が石に入ってたからってそれが何になるって言うんだ、無駄だ」

「ガートは三人とあまり過ごしていないから、大切に思っていないかったからそんな風に言えるんだ、大切な者を失っていないから、僕は、庭に寝かせた三人が、たまにこつちを見て、僕を恨んでいるように思っただ、そんな空気を感じ取る事がある」

「それは勘違いだ、お前が自分の所為だと強く思っているからそんな幻想が見えるだけだ、夢に出てくる三人だって、ただ単にお前に会いたくて出て来てるだけかも知れないだろう？それに、それに・・・石に入るという事は・・・」

言葉が詰まる。言いたくない。俺の目も、テーブルの上をただ彷徨った。

言い切れない感情に、ただ拳に力を込める。

「分かってるよ、ガートが言いたい事」

その言葉に、はっと膳を見た。膳は顔をあげてはいない。ただ石を見ている。

深く光るその石。取り付かれたかのように、見つめる。

「封印は、普通に考えれば死と同じ、普通の人間なら封印するだけでも命が危ない、仮に能力を持つている者でも、何年生きていられるか分からない上に、また人として戻れる、という絶対の保証はない、そしてもし、戻れたとしても、人として生きられる時間は、短い」

淡々とした口調だった。その通りだ。封印はコールドスリープと違う。眠る。といっても種類が違うのだ。

入り込む物にもよるのだろうが封印もそれを解くのも、一人では出来ない。

かなりの能力を持った者が必要となる。何故なら、封じる方もそれなりの生命エネルギーを放出しなければならぬからだ。

そうは言っても、封印される方はそれこそ辛い。そして封印、というだけあり、死ぬわけではない。

だが、膳のようにほぼ何の能力も持たない人間がどこまでその中で生き永らえられるか、というところが問題となるのだ。

それに、もし『戻りたい』と思ったとき、俺が居なかったら、膳は戻れずに石の中で死に、石になりきってしまうのだ。

故に何の保証もない、怖ろしい賭けのような行為なのだ。

「そこまで分かっているならどうしてそれを望むんだ！何故生きる事を望まない？！俺たちが生きていく事が、三人に対しての最大の供養で、最大の恩返しだ、それ以外に何があるって言うんだ」

元気になったと思っていた。口調にしても顔色にしても。

ただ、夜は唸り声が聞こえたり、寝言、すすり泣く声、辛いのを堪えているのに俺だって気がついていた。

それでも、笑ってくれたから、それでいいと思った。それなのに、こんな展開は、想像できなかった。

「無理にとは、言わないよ、ガートがそう言って拒否するのは分かっていたから」

「じゃあ何でこんな話をしたんだ」

「選択肢が、二つあったからだよ」

「二つって……まさかもう一つは……」

じつと俯いた膳を見ていた。ゆっくりと頭が上がる。そして俺を見上げた。

数十分ぶりに目が合う。意思の強い目だ。俺は、膳がまた何を言いたいのか、分かってしまった。

耳を塞いでしまいたかった。膳の口を塞ぐのもいい。それを聞くのが嫌だった。

優しい脅迫・後

「そうだよ、ガートはもう分かってるね？僕は、自害する」

変わらず、淡々とした口調だった。世界が、崩壊する音が聞こえてくるようだった。

見事に当たってしまった。

「何を言ってるのか、分かっているのか？自害をしてしまったら、生まれ変わる事は出来なくなる、あの三人の生まれ変わりと出会う事が出来なくなるんだぞ？地獄行きだぞ？それでも良いのか？」

「これから逃れる事が出来るなら、なんでもいい、さあガート、石に封じる？それとも、僕を死なせる？」

こんなにも残酷な質問があるとは思わなかった。こんなにも綺麗な目をして問いかけられる日が来るなんて、夢にも思わなかった。

「膳、俺が膳の死を望むわけがないって分かって聞いてるんだろう？死ぬって言われたら、俺が嫌でも石に封じる方を選ぶって分かっていたんだろう？だから、こんな事を聞くんだ」

「そうだよ、ガートは優しいから、そして有能者だ、もしガートが能力がなければ、僕は死んでいた」

自分の能力が、嫌になった。こんな選択を迫られる位なら、能力なんていらなかった。

でも、能力がなければ膳は死んでしまっていた。

でも、石に封じる事だっと言わば死だ。だが、それを選ばなければ、膳は、本当に自害するだろう。

いつそこれが夢ならば……。覚めてあの三人もいて、膳も笑っている、単なる夢ならば、良かったのに。苛立ちと焦りが、中に生じてしまった。

「膳、汚いよ、卑怯だ」

「うん、そうだね、わかってる、それでもこの苦しみから逃れたいんだ、それが出来るのはガート、君だけなんだ」

「俺が一人になるのは構わないのか？また一人になるんだぞ？膳だって一人の悲しみも苦しみも知ってるのに、どうして？！またあれを俺に味合わせるのか？」

とても暖かかった故郷を捨てた。それからずっと一人だった。

最初から孤独なら辛いなんて思わない。だが幸せだったところから自ら望んだとしても、あの絶望的な、常に死と背中合わせの空間がとても怖ろしかった。

焔に会い、人の温もりを再発見してしまっても一人を選んだ。なのに人が生きていると聞いたら、会いたいと思ってしまった。

生涯一人で野垂れ死んでもいいと思ったのに。

ここに来て膳やあの三人と出会い、それが余計に薄れてしまった。

馴れ合ってしまった。こんな世界で絶対の幸せなんてない、この滅びきった世界で、それでも俺は幸せだと思っていた。

そう、今の今までは。

「ごめんガート、僕は卑怯だ、君を守るのが兄である僕の役割だった、でも、それでも僕はあの三人に例え夢でも、嫌われるのが、責められるのが絶えられない」

小さくなる声。それでいて強く感じる意思。もう、この思いは変わることがないのだろう。

「勝手だ、膳は勝手だ・・・酷いよ」

涙が溢れた。次から次から止めどなく流れ落ちる。絶望感。それだけが今の俺の中にあつた。

やっと手にした幸せを、その温もりを張本人の手で、断ち切られたのだ。

辛くて、悔しくて仕方がない。それでも、恨む事も、嫌う事も出来なかった。

「ガート、ごめんね、本当にごめん」

テーブルの上で震えている俺の手を取って膳が言う。暖かい。人の温もり。

これを感じることは、もうないのだろうと直感した。

「・・・秘石に、封じるよ」

搾り出すような声になってしまった。涙で鼻がつまり、喉にも影響を及ぼし、とても低い声が出た。

「ありがとう、ガート、ごめんね」

手に更に力が籠る。その時、俺の手に何かが零れ落ちてきた。それ

は、膳の涙だった。

小さく肩を揺らし、泣いていた。それを見て更に泣く羽目になった。

このまま、時が止まってくれば良いのにと、強く願った。でも、それは叶うはずのない、願いだった。

その晩、最後だからとまた膳の部屋で共に過ごす事にした。

膳はまるで又イグルミを抱くかのように、また幼い幼児を抱くかのように俺を包み込んでくれた。

人の温もりと、心音が心地よい。膳にも俺の心音が届いているのだろうかと、とても不思議で、神秘的な感覚に陥った。

たったそれだけの事で、人は安堵感を得る事が出来るのだから。

お互い、中々寝付けなかった。でも、何を言う事も無かった。

寝息も、寝顔も、もう二度と見れない。そう思うから、寝付けなかったのかも知れない。

別れの朝

「じゃあ、よろしく」

翌朝、食事を済ませるとテーブルの上に秘石を置き、膳が言った。

封じる前におなか一杯になってから入りたい。そういう膳の言葉の元、朝食後に封印する事になった。

秘石は、小さい。小さめなのを選んだからだが、封印に使うには小さすぎる気がした。

入らない訳では勿論ない。肉体はないような物だ。ただ、気持ち的に小さいと中が狭いのではないかと、思ってしまったのだ。

「これで良いよ、ガートから貰った時からずっと肌身離さず持ってたから秘石としてもこれが一番僕に合ってる筈だから」

「そうか」

言葉が切れた。沈黙が続いた。昨日、決めたことなのに時間が経ったら、その分想いが募ってしまったら、やはり怖い。

「ガート、始めて」

おっとりとした口調だった。出会った時の様な落ち着いた声だった。顔を上げると、穏やかな顔をした膳と目が合った。すっきりした顔。全てをもう決めて、決心を固めた顔をしていた。俺とは対照的だった。目を瞑り、呼吸を整えた。

「一つだけ、約束をしてほしい」

秘石を見てそれから膳を見て、呟く。膳は不思議そうな顔をしたが、頷く。

「元に戻りたいと少しでも思ったら、俺を呼んで、心の声は聞こえるから、聞こえるべく者には聞こえるから、直ぐに俺を呼んで、それだけ、約束をして」

「ああ、分かった、約束するよ」

やっぱり穏やかな口調と笑顔で、膳は返した。俺はその手を取り、神経を集中する。

次第に膳の身体は内から光り始める。秘石もそれと共鳴するかのように光り輝く。

汗が出てくる。初めてのその行為は、とても難しい事を知った。硬く目を閉じ、必死で行う。

手には必要以上の力が籠ってしまっていたらう。膳はきっと痛かったらう。でもそんな余裕はなかった。

「ガート、僕も一ついいかい？」

「何だ？」

「僕の武器、あれも封印してもらっていいかな、二度と使う日が来ないようにと」

「分かった、膳を封じてから、やっておく」

「ありがとう、助かるよ」

満面の笑みだ。これが普通の、日常で見る笑顔だったら、どれだけ良かった事だらう。

そう思うと苦しくて仕方がなかった。だが、気を持ち直してまた封じる方に集中した。

『ガート』

ふと、膳が俺の名を呼んだ。目を開くと、膳の姿は半分以上透けていた。

秘石の中へと移り始めていた。するりと手が外れる。

『ガート、ありがとう、愛しているよ・・・僕の大切な弟』

そう言つて軽く俺を抱きこみ、頭を撫でて、笑う。そして、消えた。

秘石へと完全に移ったのだ。秘石は暫く光っていた。そして部屋には俺しか居なくなつた。

それなのに、まだそこに膳が居るような不思議な空気が残つた。ずっと持っていた手も。

最後の抱擁も、頭に触れる手も。まだそこにあるかのような、そんな思いがあつた。

「膳、俺も愛してるよ、いつかきつと、また共に過ごせる日が来る事を、俺は願ってるから」

跪き、そこにある石を見て涙が止まらない。今、この中に最愛な者

を封じた。

俺がこの手で、封じたのだ。直ぐにでも引っ張り出してやりたい。

そんな衝動にすら駆られた。だが、それは出来なかった。膳はそれを望んではない。

封じる時も、また解く時も、お互いの思いが共鳴しなければどちらも出来ない。

無理やりに一方の思いだけでは、どちらも出来ないのだ。だからこそ、膳は俺を説得した。

俺が居なければ封印は無理だ、というのもあったが、意思がなくてはできない事も、良く知っていたのだ。

「膳、いつかまた、お前が目覚めた時、この世界はどう変わってるか分からないけど、もしかしたら今よりも酷い世界になってるかも知れないけれど、俺は待つよ、お前が俺を呼んでくれる日を、また共に笑い合える日が来る事を、願うよ」

片手にすっぽりと収まる小さい石。大切な人がそこに居るというだけで、それはとても大切な石へと変わる。

小箱を作り、それにすら能力で幕を張り、石を鎮座させる。すると、俺自身に身を裂かれるような痛みが走った。

どうやら能力を使いすぎてしまったらしい。膳の石を前に定位置に

座る。

流石に人を封じるのはかなりのエネルギーを使ってしまったらしい。ここまで能力を使い続けたのは初めてだから、相当身体に来てしまったようだ。

石を手に、二階に上がる。そして上がりきって止まる。直ぐは膳の部屋。

扉は閉まっていて、まるでそこに膳がいるかのような、ちょっとした圧迫感を感じ取った。

静かに扉を開く。昨晚、確かにここには膳がいて、俺が居た。二人でお互いの存在を確認するように眠ったベッドはもう冷たい。

でもそこには膳の匂いが残っていて、膳の残留思念があるようだった。

未練なんて何も残さずに、こうして石になったというのに。

ベッドを軋ませ、俺はそこに寝転がる。俺が使っている部屋とは違う天井。空気。

ここで寝たのは、二回。天井を見るような事は一度もなかった。

全てで膳の顔しか覚えて居なかった。あの穏やかな笑顔しか、残っていない。

それを思い出すと、少し涙が出てくる。情けない。16にもなつて、

男で、それなのにこれしきの事で泣くなんて。

そう思いながらも、止める事が出来なかった。暫く泣いて、泣いて、そしてその所為か、眠ってしまった。

膳の残り香がある布団は、まるで膳が俺を包んでくれているような、膳と共に寝ているような、そんな錯覚を抱かせた。

独りの世界：皆の気持ち

『ガート、何時まで寝てるの？起きなさい』

ふと、目を覚ました。膳の音が聞こえたような気がしていた。辺りを見回して、布団を叩いて、そして石を見て現実に引き戻される。

「夢？・・・残酷な夢だ」

眠い目を擦り、階段を降りる。暖かい光が差し込みる中、台所を見ると膳がいるような気がする。

そこで『遅いぞ』って笑っている。俺は定位置に座り、膳が食事を運んできてくれる。

正面に座り、他愛のない事を話しながら一日が始まる。

・・・今日からは、一人だ。

「ああ、そうだ、武器も封印をするんだっとな、昨日は無理だったから今日しないと」

何となくそう思い、また二階へと戻っていく。足取りは重い。何十キロもある枷でも嵌められているかのような、そんな感じた。

気が進まない。あれを見るとまた膳を思い出す。いや、ここにいるだけでその錯覚に捕らわれている。たった一年、されど一年、か。

確かに、たったの一瞬ですら共に居た焔ですら随分と救いになったのだ。

そこに来て一年も寝食を共にして惹かれないはずがない。

命の恩人を、愛しいと思わない筈がない。俺は、間違っていない。

でも、きつと膳も、間違っていないなかったんだろう。この結論は。

俺を傷つけることも分かって居ただろう。一人になる孤独も、分かっていた。

それでも生きるのが辛かった。そう言っただけで膳を見る

のは、俺だって辛い。でも、一人になるそれはもつと辛い。怖ろしかった。一人は無だ。

何にもない、時は過ぎていっても、それを確認しあう者も無く、勝手に過ぎていくそれを見ているだけなのだろう。

これから何年、そういった生活を送るのだろう。もしかしたら膳は俺が生きている内に呼ばないかも知れない。

ちょっとだけ細工をさせてもらったが、それでもきつと膳は呼ばない。

元に戻り、また悪夢を見るのが怖いと、泣くだろう。だから、俺も血を飲む思いだった。

死にたくなつた。だが死ねない。膳が呼ぶかも知れないと、呼んでもらえると、心のどこかで思っていたからだ。

そうした時、蘇らせる事が出来るのは、俺だけだ。だから、ただ願う。

早く膳が俺の名を呼んでくれる日が来る事を。またあの温もりを感じ取る事が出来る、その時を信じずにはられないのだ。

「膳一人の為に作られた二つの武器、どちらも膳には似つかわしくない気がするのは、膳が平和を望んでいたからだろうか？」

箱に入つたままのそれを見て、考える。一度でもこれを使ったことがあつたのだろうか。

それにしては、綺麗過ぎる刃だ。全てがまだ光り輝いている。肉どころか布一枚、切り裂いた事などないのだろうと思えた。

でもきつと膳の事だ、作ってもらえたことが、想ってもらえる事が嬉しくて、きつと仕舞っておきたかつたのだろう。

想いが込められているからこそ、血で汚しなくなつたのかも知れない。

たまに出して構える事はあっても、それで誰かを傷つけたいとは思

わなかった事だろう。

そう、あの三人を殺された、あの時以外は。

「癒しの能力を使える一族は、生存しているかも分からないくらい希少だ、俺の一族は、居なかった、もつとも母様は命の創造主、もつと母様の血が濃ければ、あるいは、使えたかもしれないな」

等と考えても、もう既に時は遅い。全てが流れて、取り返しはつかない。やり直す事は出来ないのだから。

「封印か、膳を封じるのに比べたら大した事ないが、二度と使えないようにするのはつまらないな、次にこれに相応しい相手を武器自身が選ぶように仕掛けておくか、膳では、使いこなす事はもはや無理だ」

マントを掴み、そこに入っている秘石を取り出す。膳に与えた物と大差ない、小さな石だ。

それを武器に合わせる。秘石は形を変え、その武器に馴染んでいく。まるで最初から武器の一部だったかのように、光る。その上から結界を張る。

秘石が入っている分、少し強力な封印になる。だが、これくらい解けないようでは、これらを使いこなす事は無理だ。

武器に触れる前から、試される。それは一体どんな者だろうか。一生来ないかも知れない。

だが、それはそれで良しだ。膳が望んだ結果になろう。

「お前との約束は果たす、今度はこれを置いておく場所を作らないといけない、ここがいつか『都市』に滅ぼされても困らないよう、少し離れた所に非難させよう」

武器をその場に残して、外に出る。辺りを見渡して場所を選ぶ。

近すぎず、遠すぎずが好ましい。誰にも見つけれなければ意味がない。

結果、この村から数キロ離れた所に目星を付けた。廃墟から少しずつ木材を集める。

骨組みだけでも作ればそれでいい。後は適当に土を掘り、粘土質の物を少量の水で溶き固めていく。

雨風を凌げればそれで良い。最後に結界で守れば、本当に小さな小屋が出来る。

物置き小屋みたいな感じで、他にも何か置いておけば、怪しまれる事はないだろう。

万が一、ここが『都市』によって破壊されたとしてもあの武器は損

傷はない。

なんの問題も心配もない。膳もここに移しておけば、少しは気が楽になる。

あの村はもうばれていいるから、生き残りが居る事も、知られている事だろう。

俺が居る限り、少なくとも一人は居る、と分かっている。村全体を消す事なんて、容易な事だろう。

武器と適当にその辺りの物を小屋に運ぶ。膳の入っている小箱は、それでもなるべく上の方に、安全な所において置く。

これも、箱が壊れる事はまずないが、気持ち的に嫌だ。小屋を開けたら膳が潰れている、と想像するのは怖ろしい。

いや、痛みはないが、俺が嫌だ。

「さて、これで膳との約束は終了だな、後はこの辺りの状況を良く調べておこつ」

一息ついて、また外に行く。膳が石になってから、まだ一週間も経っていない。

時が止まったかの様だった。だから俺は家の壁に一日一本線を引いた。

ちゃんと月日が過ぎていくのを、確認していたのだ。そして何時、膳が呼んだのか、それもこうして刻んでおけば、膳に言える、とも思っていた。

線が何本も並んでいく。それがどれ位増えるかなんて、俺には分らなかった。

「今日は、あの三人の住んでいた家に、行ってきた」

それぞれが違う家に住んでいるのは知っていた。だがどんな所でどんな生活を送っていたかなんて知らない。

膳の家以外には近付いた事もなかったのだ。帰る時もバラバラで、あえて見送る事もなかったし、死した後も膳の家に連れてきてしまっていたから、誰の家にも行っていない。

まだ三人の死も、また膳が石になってしまった事も、現実味がない事ではつきりしない感じではあったが、少しずつ頭が冷静になってきたので足を運んでみたのだ。

「俺は、あまり付き合いがなかったから、知らなかったけど、あいつ等本当に個性が分かれていたんだな、家の中を見て、良く分かった」

最初に入ったのは、こぎつぱりとした家だった。色々な物があつたけれど散らかっていない。

綺麗に整頓されている。棚やちょっとした隙間にも、細工がしてあり、そこに収納できるようになっていた。

どうやらこの住民は少しでも物が出ているのが嫌だった様だ。相
当な潔癖症、とでもいうのか。

ただ部屋の住人が帰って来ないから、部屋の中には埃が溜まり、
ても人が居たとは思えない状態になっていた。

次に入ったところは、さっきの所と対照的で怖ろしく物が散らばっ
ていた。落ち着きがない者の部屋だ。

そう思った時に頭に浮かんだのは、肘^{ちひじ}だ。性格的に考えても、こ
こは肘の家だろう。

隙間がない程に物が置いてある。散らかり放題だ。これがきつと肘
の落ち着く空間って物なんだろう。

ただ、ベッドと台所は、それなりに片付いていた。流石に、食い物
と寝床は違うのだろう。

この場合は全体的に物がありすぎて埃も何も分からない。全体に
埃が覆っている事だろう。

息苦しさを覚えたので家を後にした。

そして最後。最初の家の様にとっても綺麗に片付けられていた。しか

し違うのは、ただ片付いている訳ではないと言う事だ。

この部屋には、物が無いのだ。散らかす物も片付ける物も、ないのだ。本当の最低限の物が申し訳無さそうに置いてあるだけ。

そのもの静けさから、ちよつと変わった雰囲気を持った撓^{とつ}だ。

言葉数も少なく、肘が隣に居ないと存在感も薄くなった、独特な空気を持っている奴だ。

住んでいる所ですらそれを感じさせるとは相当な物だ。

と、なると、最初に入つたのは慄^{りつ}の家という事になる。そう思うと、納得できた。

慄はやたらと細かい性格だったし、まとめ役として、何時も何かを書き記していた。

それがあの部屋の中にどれだけ収納されていたのだろうか。どこも、主がないのに、何でだろうか。

生気を僅かだが感じる事が出来た。家はまだ、主が死んだ事を認めていないのだろうか。

まだ、帰って来ると、そういった感じに取れた。俺が過ごしているこの家が、まだ膳が居るかの様な空気が通る様に、きっとあの三軒もそうなのだろうか。

「不思議だよな、あんなにも個性的なのに、部屋の感じも置いてあ

る物の趣味も、見事に三者三様なのに、たった一つだけ同じ物があつたんだ」

膳の石を前に、手元の物をじつと見る。それは、俺がここに来てからあの三人と俺と膳で撮った写真だった。

当時の俺には、それが何なのか全く分からなかったが、今こうしてみると、分かる。

当時の事を写真と言う形でずっと残しておくものだ、知った。

「この頃、まだ俺は何も分かってなかった、あの三人にも、懐けなかった、写真からもそれは感じ取れるよ、それなのに膳、お前やこの三人は、どうしてこんなにも嬉しそうな顔をしているんだ？決して平和ではなく、幸せでもない生活だったというのに」

少しずつ離れた家々で、あの三人も膳も、同じ思いだったのだろうか。

これは、絆。と言うのだろうか？死しても尚、こうして手元に残り、懐かしさと、悲しさを誘う物を残す。

これが支えになる時と、また逆にそっちに行きたいという衝動に駆られる。膳の様に。

「あの三人の中では、俺も弟だったんだよな、これを見た時、凄く

不思議な気がした、何だろうな、まともにあの三人と接していなかったからなのか、でも、それなのにとても懐かしく、昔の事のように感じるんだ、おかしいよな、これって」

膳の石の隣に、写真を置く。これは膳が持っていた物だ。三人の家で見て、それからここに戻って、確認したのだ。

どこかで見た事があると思った。膳の枕元に置いてあったんだ。だから記憶に残っていたんだ。

初めて、皆が繋がっているんだと、実感できた。だが、それももう遅い。事は既に終わっているのだから。

待ち続ける日々

どこに行っても滅んでいた。町も村も、家々は跡形もなく崩れていた。

砂漠化が進み、温暖化は怖ろしい勢いで進み、もはや人の生きていけるような世界ではなかった。

植物も、水が足らずに枯れて行った。空気中の水分も少なく、自分がこうして生きている事すら、まるで奇跡のように思えた。

膳が残した畑だけは、俺の能力を使って瑞々しく保っていた。

この世界で長く生きてきた所為だろう。体が馴染んだのだ。それでも、膳を石に封じたあの地には、幾度か人々が訪れた。

それこそ、何年、何十年に一度かの事だった。その上、その場で朽ち果ててしまう者が殆どだった。

俺は、それを見ても救おうとは思わず、大変な事とは思えなかった。

もし、膳が居たら救っていただろう。だが俺にはそんな意志はない。

今救いたいのは他の誰でもない膳であり、この死よりも怖ろしい現状に居る自分だ。

もう、逃れなくて仕方がないのだ。この悪夢から。

「あれから、もう何年経ったか、身体も年を取らない、測り難くな
ったものだ」

膳を石に封じてから三年後、俺は母がなったのと同じ病にかかり、
不老長寿になった。

闘病中は怖ろしく苦しく、辛かった。その時を一人で向かえ、乗り
越えなければならなかったのが何よりも辛かった。

膳がそこに居るのが分かっているのに、膳は俺が苦しんでいるのを
知っているのに、何も言ってくれないのが悲しくて、深い恨みも抱
いた。

心臓を驚づかみにされているような苦しみ。息をするのすらきつい。

食事も出来ず、何も出来ない日々が続いた。日数にすると、一週間
から二週間。

その辺はとても曖昧だ。苦しんでいたので棒線すら書けず、洗濯も
掃除、料理も出来なかったのだから。

落ち着いてから外に出ると、庭の植物は自分勝手にすくすくと伸び、
葉を大きく茂らせていた。

勿論、暑さや気温のために枯れてしまったり萎れてしまっている物
も沢山あった。

その中で、膳が特に注意を払った芋虫は、とても丸々と太っていた。何しろ俺がダウンしていたのだから、葉を好きなだけ食み、その中の養分を多量に摂取し、自由気ままに生きていたのだ。

以前は膳が『殺して』と言っていたので小さいうちから気をつけて取り除き、殺していた。

が、ふと考えてしまった。こいつらはこの庭の野菜を食べて育っているんだと。

だったら食べても問題ないのでは。と思ってしまった。

ので、取りあえず食べてみた。それはとても肉厚で柔らかく、食べ応えのあるものだった。

丸ごとを炒めても、茹でてでも良かった。

野菜以外の食料が出来た。たんぱく質、だろうか？これからは根菜類の葉っぱにでもつけようか。

そうすれば葉物はちゃんと残して置けるし、土の中ならそんなに食われないだろう。

そして虫も成長させる事が出来る。一石二鳥ならず、一石三鳥だ。

「膳が目覚めたら、食わしてやろう、きっと驚くぞ」

食べた事が無かったからきつと膳は殺すように言っただけ味に違いない。味わってみればどれだけ良いものか分かるだろう。

見てくれは確かに悪いが、味はそう悪くはない。このご時世に食料が増えるのは良いことだ。

しかし、芋虫は一体どこから湧いたのだろうか？まあいい。

後は膳が俺を呼ぶ日を待つばかりだ。それまでこの周辺を見張り、更には生存者を探す。

それが俺の使命だ。そう、ずっとそう思って居た。暫くの間は、何十年、何百年かの間は。

そう思っていた。生き残りを見つけて、膳が蘇って、またあの頃のように平和ではなくても、暖かい空気が流れるように、と。そう思っていた。

だが、月日は人を変えるのだと、俺は知った。

待ち焦がれた言葉

「人の気配だ」

村を離れ、今にも崩れそうな廃屋の中で、俺は感じ取った。距離は随分離れていたが、俺には人並み外れた能力の所為で、どこにいてもそれを感じる事が出来た。

同時に、膳の声が聞こえるように、というのもあったが、必要以上には離れないように心がけていた。

気配は数人。だが、それは俺が戻るまでの間に消えた。元々弱まっていた所為もあるが、それだけでない事はそこに居た俺には分かった。

恐らく、また連中がうろついていたのだ。俺は勝つ自身がある。だが、普通の人間には無理だろう。

ましてや弱っているとすれば、連中で無くても息を止める事は出来るであろう。

それでも俺は慌てなかった。嘆く事は無かった。もう、心が乾いていた。

ただそこに横たわる屍に、土をかけてやるくらいしか、俺には出来なかった。

また、それ以上何をする気もなかった。抜け殻同然だった。早く呼んで欲しい。

ひたすらそればかりを願っていた。だが俺の想い人は、それを言うてはくれなかった。

長い事生きていると、たまにそうやって辿り着き行き絶える者があった。

同時に、生き延びる者も居た。俺は遠くからその様子を見ていた。何をすることはない。ただ、見ていた。

膳の石のある小屋から、少し離れた所にあるあの時のままの村。そこにたどり着いた者が、そこで生活をする。

死んでいた村が、家が生き返り、あの頃のような風景が俺の目の前に広がる。

それは、とても懐かしく、心から何か溢れそうになる。それに蓋をして、俺は背を向ける。

そして見つからないよう、手出しをしないよう、また離れたところへと移り行く。

『・・・ト』

その人間達が住み着いてから暫くして、俺の耳に怖ろしいほど懐かしい声が聞こえた。

それは紛れもない、膳の声だった。

『助けて、ガート・・・村が、人が・・・』

嘆きが聞こえた。俺は、村で何が起こっているのか分かっていて、それでも、そこに助けに行こうとはしなかった。

思わなかった。俺の待ち焦がれている言葉が、入っていないからだ。それまで俺の事を放っておいて、今、この場面で俺を呼ぶ膳が許せなかった。

『ガート、お願いだよガート、皆が殺されてしまっ……ガート』

血を吐く様な叫びに聞こえた。でも俺は、行かなかった。村は壊滅した。

村の上空より俺は全てを見ていた。今回たどり着いた連中はそれなりに強い能力を持っていた。

円陣を組める者も居た。それにより大人は子どもを助けた。たったの三人。

まだ幼さの残る三人。男が二人と女が一人だった。膳の叫びは、もう聞こえない。

諦めたのだろう。何しろ生き残りがこの三人では、話しにならない。

「直ぐにくたばるな、俺が近づく事もないだろう」

そう思った。それは正直な気持ちだった。どう見ても生きていけるような様ではなかったからだ。

だからその後、何年も連中が生き延びて居ようとは思わなかった。気配を感じてはいても、放っておけばいずれ死ぬ。そう思っていた。非常に客観的だったのだ。そして俺は、またあの声を聞いた。

『ジルヴァント、居るんだろう？聞こえるところに』

今までとはまた違う声のトーンに、俺は観念して膳の元へと向かった。

相変わらず埃まみれの小屋。その中に居る膳。

その石はとても綺麗に輝き、まるで哀願しているかのように見えた。息を飲み、気を落ち着けた。

「何の様だ？今更俺を呼ぶとは」

『ジルヴァント、もう時間がないんだ』

「だからなんだ」

『言わなくても分かっているだろう？僕の言いたい事くらい』

分かっていた。当然だった。俺がずっとずっと欲していた言葉だからだ。

だが、『分かっているだろう？』では俺は納得がいかなかった。

『分かった、言うよ、元に戻して欲しいんだ・僕を』

「今更戻ってどうする？ 今のお前に何が出来る」

『でも、放っておけない、まだ子どもなんだ、助けてあげたい』

「俺の事を放っておきながら、今更あんな幼子どもに何をしたいというのだ、償いとも言つか？」

『お前が怒るのは分かる、だが、今元に戻らなかったら僕は一生後悔する、だから』

「・・・分かった、だがこれだけは言っておくぞ、今元に戻ったところでお前の余命は幾らもない、それでもいいんだな？」

『分かってる、それでもいいんだ』

「そうか、これだけは約束してくれ、決して無茶をしないと」

『ああ、分かった、約束するよ』

息を、また飲む。どれだけ待ち焦がれた言葉だろう。『戻りたい』と。それだけを待ち続けた年月だった。

「心して掛かれ、気を抜いたら、死ぬからな」

『分かってる』

石の姿でありながらも、そこには膳が柔らかく微笑んでいるように見えた。

俺は、膳の石を手に取り、強く念じた。同時に膳も石の中で戻りた

いと強く念じ、望まなければいけない。

長い沈黙。それを破り、今俺の目の前に、人の姿になった膳が居る。

久しぶり

「ああ、凄い久しぶり・・・体が固まってる」

「膳」

「なんだい？ジルヴァント」

「大丈夫か？無理だけはするな」

「心配性だね、大丈夫だよ、ちょっと慣れるまで時間が掛かるけど」
そういつて優しく微笑み、腕を回したり手を閉じたり開いたりしている。

ずっと会いたかった人が、目の前に居る。俺の望みが、心の蟠りが、少し解消された。

「あ、ジルヴァント」

「なんだ？」

「いや、いつの間に僕の背を抜かしたの？」

キョトンとした顔で俺を見上げる。あの頃とは逆の立場に、少し面白く思える。

あの頃の膳は俺をこんな感じで見ていたのだ。

「そんな事か、お前が石になってからどれ位経ったと思ってるんだ、俺は二十三だ、お前確か二十歳で石になったから今も二十歳だって事は年だって俺の方が上だろうが」

呆れ口調で言ってみる。相変わらず何処かしら抜けてる奴だ。

納得はしているだろうが、ちょっと気になっているようで、幾度も自分の背から俺のところへと手をやり、背比べをしていた。

頭一個分は俺の方が育った。そりゃ驚くだろうな。

「・・・二十三？」

「そうだが？」

「僕が石になってから、六年しか経ってない？」

「馬鹿かお前、もっと経ってる、西暦すら変わる程にな」

「じゃあ何で、二十三歳なんだ？老けてない」

「病に掛かった、母様が掛かったのと同じ、不老長寿だ、お陰様でこの姿のまま随分と長く生きてる」

「そっか、辛い時に一人にさせたんだね、僕は」

「何言ってる、もう慣れた」

呆れてため息が出る。だが、膳はとても寂しそうな顔をしている。

本当に申し訳ないと思ってるんだろう。だが俺だってそれくらい突付いてやらないと、気がすまない。

「・・・僕は、あと何年生きられる？」

「さあな、長く見ても、一年ちよつとか」

「一年、リアルな数字だね」

そういつて寂しく笑う。だが俺も、この身体になつてしまった以上、いつ迎えが来るか分からないのだ。お互い様と言えるだろう。

「無茶をしなければ、一年は生きる事が出来る、だが、能力を使つてしまうと生命は縮むだろう、もしその助けたいと思ってる連中のために使つとなれば、もっと短くなる、いいか、くれぐれも無茶はするな」

「・・・分かつてるよ、さ、あの子達のところに行こう」

「待つてれば来るだろう、まだ残りが居るんだ、休んでろ」

生き残った子ども達。その惨劇から数年経っていた。それでも生きていた。

それが驚きではあつたし、その生命エネルギーの強さ。

諦めの悪さと言うか『生きてやる』という信念が怖ろしいとも取れた。

膳もそう思ったからこそ、諦めずに俺をまた呼んだのだろう。

当時幼かった子ども達は見事に成長していた。ここにたどり着くとは思っても見なかった。だから、俺も驚いた。

『脱走だー！一族の生き残りが脱走したぞ！』

村の方が珍しく賑やかになった。ああまで人の声が届いたのは、あの村が襲撃されて以来だった。

そこで俺は、あの三人がまだ生きていたのだと、強く思い知った。

そして、「都市」の連中から逃れ、諦めずに小屋までたどり着いたのだ。来たのは男。

年の頃は十五、六位だろうか、といった所だった。膳は知っていて、元に戻りたいと言ったのだろう。そして、来てしまったから・・・。

「薄暗い、何か、役に立つ物は・・・」

小屋を物色し、少年は膳を見つけた。そこで膳は少年に話しかけた。きつとずっとその機会を狙っていたのだろう。何しろ、石の姿では出歩く事は出来ない。

そして小屋には特別な結界を張ってあるわけだから、出る事は出来ない。ま、少年が入れたのも、驚きではあった。

それなりに強いものをかけてあったからな。だが、俺の驚きはそれだけではすまなかった。

少年は、俺が結界を重ねて掛けた武器を、容易く持っていたのだ。それを見て、結界が切れるのを感じて、俺も中で騒ぐ物があった。悪の手に渡るはずはない。

それはあった。だが、そう簡単には解けない程の強いものだった。それを、ただ手を翳し、それだけで解けた。武器も、少年を求めていた。俺がそうしたんだ。

最早俺も膳も使えないのだ。そこに来て、怖ろしくなる程の時間を経て、後継者が現れたのだ。こんな事が起こるとは。

長く生きてきて、ここまで驚いた事は無かった。だからこそ、膳は戻して欲しいと訴えたのだろう。そして望み通り元に戻った。

一通り身体を動かし、す、と腰を下ろす。恐らく疲れたのだろう。まあ、当然とも言える。

何しろ、何百年も石になっていたのだから。

「それにしても、あの子の手足を見た？あの流血、そして、枷」

顔を歪ませて膳が俺に問う。知っていた。中で何が行われていたのか、俺は知っていた。

少年も、他二人も、捕らわれてから壁に磔にされていたのだ。

あの少年は、己の力でそれを千切り、脱走したのだ。下手をすれば手首骨折、いや、手首ごと千切れる可能性もあるだろうに、あの少

年はそれより何より、そこから脱走し、助けなければいけない仲間が居るのだ。

己を犠牲にしても護りたい。そう思う相手。それが居るだけで全く違う事を、俺は身をもって知っていた。

「残りの二人も、決して五体満足とは、言えねえな」

とても強い血の匂い。中で何が行われて居ようと、俺は何もする気はなかった。

今なら話は別だ。膳がこうして俺の前に居る。俺の元に居る今が、その事件の起こる前ならば、俺はきっと助けていただろう。

だが、もう後の祭りだ。過ぎてしまった。片方は大怪我をしている。

下手をすれば、命に関わるほどの傷だ。それだけの出血を伴っているのだ。

もう片方は、そんなに酷くないが、軽傷を負っているのも確かだ。

「ジルヴァント、僕はこの姿に戻ってから、凄く嫌な感じがするんだ、石でいた頃よりもずっと強くそれを感じる、なあ、これは一体何なんだろう？この村で今何が起きているんだ？」

「それは、あいつらから聞けば良い、その方が良い」

俺の口からは言えない。とてもではない。分かっているながら何もしなかったそれを、後悔しても仕方が無いというのに。

これだけではどうしても許しを請う事は出来ない。古傷を抉る思いを、与えるだけなのだ。

ふと人が近付いて来る気配がした。子ども達だ。

「来たぞ、俺は一度戻る」

「呼んだら来てくれよ、僕一人ではちよつとね」

「わかった」

小屋の天井は損傷をしていた。そこから俺は降りた訳だし、登る時もそこから出た。

そして、こちらへと歩いてくる三人を上から確認した。とはいえ一人は歩いていない。

気を失っているようだ。それに、一人の女。あれは、もしかして・・・。

自己紹介・1

「おい、石、連れてきたぞ」

「いらつしゃい、待ってましたよ」

膳^{ぜん}は、腰をかけたままで、子ども達を出迎えた。

少年の顔は強張り、咄嗟に手を差し出し、後ろに居る女を護る体制になる。

強い警戒を持ったのだ。

「貴様何者だ！どうやってここに入った！」

とはいえ、ここは古ぼけた小屋。極普通に入る事は出来る。相当少年は切羽詰っているのだろう。

膳の困った顔が笑える。頭を掻き棚にある写真を手にする。三人と共に撮った最後の写真だ。

「僕がさつき君と話をした石だよ」

「ふざけるな！石は石だ！その辺に転がってるのとは違うが、確かにあれは石だ」

「だから、解いて貰ったんだよ、僕に掛けられていた術、と言っかなんと言っか、ほらここに証拠」

そういつて膳は写真を見せる。少年はまだ凄い目をしている。

その写真を見て、そこに写っているのと目の前に居るのが同一人物だと分かったところで、彼にとっては何の証拠にもならないだろう。

「じゃあ石になってみる！」

「もう戻れないよ、これがその石、君が見たのはこれでしょう？」

小箱に入っている石を見せて問う膳。俺が遠い昔に作った小箱。風化する程の長い時間、良くその形を保ったのもだと思ふ。

少年はその石をまじまじと見つめる。その目には驚きが見える。そしてまだ疑いがある。

後ろの女は不思議そうな顔をしている。

「信じてもらえた？」

「確かに石はこれだ、だが、確信はない」

「いいじゃない、確信はなくても、そこに人が居るのは本当だし、面白そうだし？」

後方に居た女が口を挟んだ。少年に抑えられていたから分からなかったが、どうやら少しは大人のようなだ。

その腕には傷ついた少年を抱えていた。少年の弟、だろうか。顔から頭から布を巻きつけられていた。包帯の代わりだろうか。悲惨な姿だ。

「で、貴方を元の姿に戻したのは？自分で戻ったの？」

「いや、違うよ、おーいジルヴァント、降りてきて」

屋根に居る俺を膳が呼ぶ。それはまるで降臨する為の呪文のようなものだ。

俺はすんなりと下へと降りる。少年はまた警戒をする。

「彼が僕を元に戻したジルヴァントだよ」

「ガート・ジルヴァントだ」

「僕は加悦膳^{かやぜん}、よろしくね」

少年は、じりじりと後退して行く様な感じだ。女は、自然とそれを受け止めている様に見えた。

その時、女の鎖骨のくぼみを見て、俺は確信した。あの時感じた事は、間違いなかったのだと。

「お前ら、戦闘民族だな、それに癒^いしの者」

少年は目を見開き、女は胸の前で手を組んだ。やはりそうだったのだ。

こんなご時世までそれが生きて、まさかこんな形で会う事になるとは、思っても見なかった。

「お前、一体何者だ？」

「俺は余所者だ、それだけだ」

「本当に戦闘民族なのかい？それに癒しって言うのは・・・」

全く訳が分からないといった顔をしている膳。

「俺達は、シグマの一族の生き残りだ」

「シグマ・・・か」

「知ってるのかい？」

「ああ、一応、長く生きてるからな、本当にシグマの民と癒しの者は共に行動をしているんだな」

お互いがお互いを護り、生きている民族。その典型的な形がこの二つ。

シグマは怖ろしく強い能力を持っている。争い事を好むタイプも多く居るのがこの民族で、昔は戦争が絶えなかった。

その所為で命を落とす者も、半端でなく居た事だろう。そこにくっ付いているのが癒しの能力を持つ民族。

これはとても弱く、戦闘能力はゼロに等しい。が、癒しと言うだけあり、傷を癒し、命を救うだけの能力を持ちあわせてるのだ。

故にシグマは回復を、癒しは援護をしてもらう事で、互いの欲求を

満たす事が出来ているのだ。

「んで、君達を襲ったのは、一体誰？」

「それは、中心にあるだろう、建物が、あそこに住んでいる連中だ、名前はそのまま『都市』^{とし}」

「『都市』？」

その言葉に膳の体が強張った。やばい、と俺は本能的にそう悟った。俺は知っていた。連中がまだ生きていて悪さをしていると。

だが、膳が石であつた以上、俺には何も出来なかった。それが、膳が自分の命を絶つてでも殺したいほど憎んでいる連中だと知って居ても、俺には何も出来なかった。

それが今、こうして膳をまた苦しめている。あんなにも遠い昔の記憶が、苦しめるのだ。

「あいつら、まだ生きて・・・」

「『都市』を、知ってるの？あなた達」

「こいつも、村を滅ぼされたんだ、過去二回、その中で大切な者も失ってる」

目が何処を見ているのか分からず、ただ何かを呟いているような膳を指し、言う。

子ども達は膳を見る。その目は、何を物語っているのだろう。どん

な意味で向けられている眼差しなのだろうか。

生き残った三人

「う・ん」

「あ、幼^{おさな}、気が付いた？」

床に横たえていた一番小さい少年が、目を覚ました。顔に巻かれていた布を、無意識に取り外す。そこには、大きな傷跡が現れる。

その右目はとても痛々しい。まだ癒しの能力が全開でないこの娘の能力では、これが精一杯だったのだろう。

だが口を開いたままだと したら、きっと死んでいた。それだけ大きな傷だ。

「ここは？兄さんは？」

「ここに居るだろう、目は・・・潰れたか」

「ご免ね幼、私がもう少し強い能力^{ちから}を使えたら、貴方の目を治すことが出来たのに」

「砂希羅^{サキロ}、良いんだよ、それより、その人達は？」

兄さんと呼ぶ少年の後ろに居る俺達に気が付いて、少年、いや幼と叫びかけた。

問いかけてくる。兄と違い警戒をしない。それも不思議だ。

「元・石とその仲間」

「元・石って、確かにそうだけど、じゃあそろそろ本題に入るかね」
膳はそういつと俺に目配せをする。三人は、不思議そうな顔をしている。

特に幼に関してはまだ寝ぼけている感じだ。俺は一つ咳払いをして、三人の見る。

まだ疑う様な鋭い目つきは消えない。その強さを、一心に浴びた感じだ。

「俺達がお前らを鍛えてやる、『都市』に勝てるようにな」

ピン、と空気の張る感じがした。強張った表情が、目つきが、少し変わる。だが、緩くなる訳ではない。

「それは僕の敵でもある、でも僕には何も出来ない、だから君達に頑張つて欲しい」

「お前らが？そんなに強いようには思えないが」

まだ胡散臭そうな顔をしている。まだ『兄さん』としか呼ばれていない少年は、とにかく強い目をしている。

流石戦闘民族、といったところか。ましてや、余所者が現れて鍛えてやる、と言われても、それを喜んで受けるタイプではないな。

「僕はともかく、ジルヴァントはとても強い能力を秘めているよ、

僕も昔助けられたし、石に封じてもらう時も、戻してもらう時も彼に頼んだんだ、それはとても強い能力が必要なんだよ」

「そうね、いいんじゃない？ 私達だけでは到底『都市』^{とし}に立ち向かえないし、それに私には何も出来ないわ、そこに来て少なくとも私達より強い人たちが助けてくれるなら、その手を取るのとは別に悪い選択ではないんじゃない？」

娘、砂希羅と呼ばれていたか、女は考え方がさっぱりとしていて話が早い。

それに加えて、兄と幼は考えているように見える。ま、幼はまだ頭の回転が付いて来れて居ないようにも思える。急すぎる話だから、混乱するのは仕方がない。

「・・・分かった、ならば、手を借りる」

長考し、唸る様にそう言う。その目の強さだけは変わらずに。苦渋の選択、と言った感じが？

まあ見ようによれば、俺達も敵に見えておかしくない状況だからな。

それでも守りたい者があるのだから、仕方ない。という風でもある。

「はい決定ね、言うておくけど、凄じいからね、彼、あとそうそう、幼って言ったっけ？ あれ持って行って」

思い出したかのように膳が言う。その指の先にはまだ結界に入ったままの槍がある。

幼は、それを見て一瞬凍りつく。だが、槍からは明らかに共鳴の響きがある。

持ち主を見つけて喜んでいようにも思える。幼は、重そうな足取りでそこへと向かう。

息を飲み、それに手を翳すと、いとも簡単にそれは幼の手に落ちる。

兄の時といい、この弟といい、本当に俺の想像を遥かに超えて、怖ろしい能力だ。

こんな弱そうな外見で。流石戦闘民族だとつくづく思う。

「幼？」

砂希羅が声を掛けた。幼の顔からは、今まで以上に血の気が引いていて、身体はガクガクと震えだしていた。

ひんやりとした槍。そこから幼に伝わるものは、一体なんだっただろう。

「・・・だ」と、幼が何か呟いた。

「嫌だ！こんなの嫌だ！僕は戦いなんてしたくない！」

突然幼が発狂する。力を失った腕から、槍が地へと落ちる。重たく、しかし甲高い金属音が小屋に響く。

「幼！何を言ってる、それが俺達の役目だろうが！」

「嫌だ！僕は嫌だこんなの！」

掴みかかった兄の腕を振り解き、幼はそのまま小屋を飛び出している。しまった。

膳は困惑した顔をしていて、残りの二人は、顔を見合わせていた。そして、ため息を付いた。

「何であいつは、ああなんだ」

「仕方ないわ成^{なり}、幼は貴方とは違うもの、急すぎたのよ」

拳を震わせ、怒りを表す成。やっと名前が出てきたな、などと冷静に思っている場合ではない。砂希羅はそれを宥めていた。

「そんなに時間はないけれど、むりやりさせるのは好きではない、また来い」

二人にそう告げる。重そうな足取りで家に帰っていく。そして小屋には俺と膳。

床の上では槍が寂しそうに光り輝いている。

三人の視察

「どうだ、あの三人」

「強いと思うけど？君は？ジルヴァント」

「・・・呼び方を戻せ、ガートで良い」

「本当に？僕の事を怒っていたでしょう？だって僕は幾度か君を呼んだ、でも君は来なかった」

「そりゃ、そうだろ、もつと早くにお前が俺を呼ぶと思っていたら、だがお前は俺を呼ばなかった、それなのに、生きている連中が居ると分かって、必死で俺を呼んだ、それは虫が良すぎるだろう？」

自分の為でも、俺の為でもなく、全く関係ないもの達を護る為に、膳は俺を呼んだ。それが許せなかった。幼い感情だ。

「だけど、君だって思っただろう？それに君は、僕に嫌な事したしね」

「何の事だ」

「とぼけたね、僕の心眼を開いたままにしたくせに、あんな物開かれたら否が応でも外の世界が見えてしまうじゃないか」

「そんな、半径十数キロもないだろ、大した事ない」

「それに悪夢も沢山見たよ、彼らの事も、忘れずに見る事が出来

た、でも何回も見ている内に彼らの本当の声が聞こえてきて救われたから、それは良しとするよ」

「そうかよ」

何の苦しみにもなつてねえじゃねえか。それじゃあ。大体、あの三人は元より膳を恨んでは居なかった。

最期まで膳を、俺を想って死んで行つたんだ。

疑心暗鬼になつて悪夢に魘されてしまう膳の気持ちを分からなくも無かったが、でもこんな年月を経て、やっと分かつてもらえる時が来たんだなと、思うと、彼らこそ救われているのではないだろうか。

「それより、幼^{おさな}つていったけ、あの子どうなつたかな」

「さあな」

「見てきてよ、一つ飛びでしょう？君なら」

「忍者扱いかよ」

「勝てると思うけど？気配を消す事も、その身のこなしもね」

「分かったよ、ちょっと見てくる、っても、二十キロくらいあるんだけど」

等と呟き外に出る。膳には勝てない。それはやはり出会った頃を忘れていないからだろうか。

どうしても膳には弱いのだ。仕方なく、三人の住んでいる村へと飛ぶ。物の数分。

そこは以前俺達の住んでいた村。懐かしさが蘇る。

「成、なり おさな幼は？」

「さあな、帰っていないところを見ると、また泉に行っただろう」

「そう、大丈夫かしら、幼」

椅子に腰を掛けて砂希羅なせいらが問う。成は渋い顔をしているだろう。

口調でそれが分かった。どうやら三人は共に暮らしているわけでは無い様だ。

俺達が住んでいた頃と少し変わっていた。この辺は、来ると思い出すからあまり寄らなかつた。

その所為だろう。家が何軒か動いていた。俺と膳の家や、あの三人の家。

解体されて新しい家になった、と考えるべきか。

「成、帰って来てもあまりきつく当たっては駄目よ、幼は、優しくするわ、シグマの血を引いているとは思えない程」

「今のこのご時世で、優しさがなんの役に立つ？強さが一番だ、力も心も、優しさなんぞいらん」

「そうだけど、でもあの子はまだ覚醒もしていないんだし、これから変わるわ」

「遅すぎる、あいつはもう十を過ぎている、それなのにまだ兆しすらない、おかしい話だ」

だろうな、あれで覚醒しているとは思えない。ところが潜在能力の強さは成以上だ。

それだけは俺にも分かる。何処まで育つのか、それを楽しみにしたい。

それくらい、面白い存在なんだ。だが、泉とは、何処にあるんだろう。

神経だけを飛ばして、幼の様子も見ておかないと膳に怒られる。家から暫く進むと、光が見える。

水の光だ。ここは、俺達の頃にはなかった。移り住んでいた連中が少しずつ作り上げたのだろう。

雨もあまり降らない。地下水を噴出させたのかも知れない。綺麗な水だ。確かにそこに幼はいた。

手が、仄かに光っている。その手を泉に入れる。少しずつ水温が上がっていく。大気に揺らぐ熱が見える。

「凄いな、あの能力は」

「幼は、この世界をこれ以上壊したくないのよ、あれだけの能力を持ち合わせているのに、勿体無いんだけど、でも・・・」

「幅広いな、俺の持っている能力より、よっぽどあいつの持っている能力の方が広く、凄い物なんだ」

「優しいから、使えないのね、必要以上には使っているところを見たことが無いわ、そうなった時、きつと覚醒するのよ」

「いつになる・・・それは」

「分からないけど、でもきつと直ぐに起こるわ、だからもう少し長い目で見てあげて、ただでさえあの時から貴方が急に厳しくなつて幼は混乱しているのだから」

「どうやら、傍から見ても相当仲の良い兄弟だったのだろう。あの時は『都市』に襲われた時から、といった感じが。」

「俺達シグマの民には役割がある、それを護らずして何を言える？ お前だってたった一人の生き残りなんだ、もしお前に何かあったら俺達はお前の両親や死した俺達の両親に顔向けが出来ない」

「全く、お堅い考え方ね、私はあなた達より年上なのよ？私が貴方達を護るのが当たり前なのに、貴方はずっと、昔から語り継がれて居る事ばかりを気にしている、それが良いところでもあるけれど、そんなにも重荷を背負わなくても良いのよ？」

優しい笑みで言う砂希羅。最年長、か。しっかりした女だと思う。

俺達の中に女は居なかったし、これと言って考えた事も無かった。

が、人間は確かに男と女とあつたんだ、と再確認をした。まあ実際、砂希羅もそんなに女、という風ではない。

こんな世の中だから女とて女らしくなんてしてられないのだろう。それは、辛い事ではないのだろうか。

三人の視察・続

「槍・・あれが僕の武器？」

ふと、泉から呟きが聞こえた。幼がすっかり温まった泉に浸かり、呆けた頭を回転させている。

あれだけの惨事を経験した訳だからまさか自分が、その手に武器を持ち、戦いに赴くとは思えなかっただろう。

それだけは、俺だって分からないわけではない。

「僕らは、どうしてこんな思いをしなければいけないのでしょうか、兄さん」

小さな声で呟きながら、幼の手の中には先ほどとは違う光が生じている。火だ。

炎があるのだ。水の中ですら揺らぐ炎。相当な能力で持つてでもないとあり得ない。

火は水で消える物だ。それが、あんなにもはつきりと、燃えている。幻想的な感じた。

「成る程、大地の力、って事は風やら水やらもある訳か、じゃあこの泉は、まさか幼が作ったのか？」

地下水が減るたびに幼が水を足しているのだろうか。だとしたら相当な能力になる。

覚醒をしていないのに、あれだけの炎を持ち、大地の能力を操るとなると、かなり凄い事になる。

だが、本当に幼は優しい。シグマの者とは思えない程だ。覚醒をしたら、もっと戦闘能力が高まって、目つきも変わるのだろうか。

成は、元から悪いようなイメージがあるが、あいつだって優しくかった事があるって

事は、もう少し穏やかな顔をしていたのかも知れないな。

「とにかく、帰って来てもそんなに怒っては駄目よ？ 幼にとって貴方はまだ優しい兄っていうのがあるんだし、あの事件を、あの子なりに考えてると思うわ、でも、あの子にとってはそれまでの楽しかった記憶の方が強いだよ」

「だが、起こってしまった物はどうしようもない、あいつにもそれを理解させ、自分の立場を確信させないと」

「ふふ、成は損をする性格ね、私や幼しかもう仲間は居ないのよ？ 私達の前で位は、気を抜いたら良いのに、あまりカリカリするといつか倒れるわよ？ じゃあまた明日ね」

家の方では砂希羅が二人の家を後にした。そして直ぐ隣にある家に入っていく。

そこが砂希羅の家なのだろう。何故一緒に住まないのだろうか、なんて思うが、それも何か理由があるんだろうな。

砂希羅去った後、成はまた渋い顔をしていた。分かっているのだろ

う。

だが、どうしようもない今の現状を考えれば、優しさなど、何の役にも立たないと、成は分かっているのだ。

そしてそれは幼の為にもならない。だから、その敵しさに繋がっているのだらうと解釈をした。

「村を滅ぼした連中と、同じ事をしようとしているのではないのかな、僕はそんなの嫌だ」

水中の炎を手のひらで包むと、それは消える。泉に静けさが蘇る。

この三人からしたら、それ以外は敵になる。それでも幼は刃を向ける事を嫌がる。

優しさからだけでは無いのだろう。ただ無意味に繰り返されるそれを終わりにしたい。

自分達がそれを起こさなければ、何も無いと思っているのかも知れない。

崩壊を迎えたその時だって、何もしなくても起こってしまった争いだと、分かって居ないのか？

弱肉強食な世の中で、これだけ有力な能力を持って居る者が苦しめられて居ようとは、意外だった。

全ての能力を解き放てば、この辺りを一掃出切る程の能力を持っているのに、それに気が付いていないのが、果たして良いのか悪いの

か。

報告

「って感じだった」

「そう、お疲れ様」

小屋に戻り、膳ぜんに全てを報告する。膳は棚に腰を掛けて「難しいね」と呟いた。

確かに非常に難しい事態だと思う。成なりの言う事ことと幼おきなの思う所と、分
からなくは無いのだ。

「取りあえず、明日また三人に会ってみよう、落ち着いた状態で話をしてみない事にはなんとも言えないしね」

「そうだな『都市とし』もいつまで大人しくしているか分からねえから、急ぎたい所だな」

知っている限りの『都市』を思い出せば、そんなにのんびりは出来ない。だがしかし、捕らえた者が逃げ出し、それをまた捕らえに出来ないとは限らない。

いや、きっとまた来る。その場合狙われるのは、娘・砂希羅シグマだろう。癒しの能力がなくなれば、シグマの一族は生きていけない。

砂希羅だけでも非難させたいところだが、それすらも恐らく言う事は聞かない。

ずっと一緒にいた訳だし、護るのがシグマの役割。きっと折れないだろう。

「で、僕らは今日ここで寝るのかな？」

「昔膳の居た家は解体されて、あの三人の家の一部になってる、つまり帰る家は無い、膳はずっと此处に居た訳だから此处が言わばお前の家だな」

「こんな狭くて汚いところが？」

「仕方ないだろう、迂闊に余所者が入り込んで来て、お前を壊される訳にはいかなかったから、俺だって頭を使っただ、廃材しか無ければ、こんな所に入ってくる奴は早々居ないからな」

「結界も張ってあったしね、まあ一晩で済むだろうからここでいいか、そんなに寒い時期でなくて良かった」

「なんだ、人に戻ったら寒さも暑さも感じ取ってるか？」

「嫌味だねえ、肉体が戻ったんだから当然だろう？」

「いや、そうじゃなくて、ちゃんと体が活動している様で安心した」
何しろ五百年も眠っていた身体だ。下手したら何一つ感じ取れない、人形のようになってしまってもおかしくないのだ。

それがちゃんと分かるって事は、人として生きている訳だから、それだけは安心できた。

「確かに汚いし狭いが、以前住んでいたところに比べたら損傷は少ないだろう?」

「そりゃあそうだろうね、あれは戦すらも乗り越えた家だったんだ、その後に作られたこの小屋の方が綺麗だろう」

「お前の居場所だからな、必死で作ったんだ」

「へ?ガートが?」

「そうだ、とはいえ、枠組みと屋根だけだな」

しかも一部は崩れている。一緒に住んでいた様な家を作る事は出来なかった。

これが精一杯だった。単純に見えてもやはり難しい物だと思い知った。

長く生きてきて、やった事が無い事は自分の思っている以上に多かった。

「それじゃあ仕方が無いね、贅沢言わずに此処で寝ますかね」

そう言うとな膳は床の廃材やガラクタを脇に寄せ、寝床の確保を始めた。

下は板が継ぎ接ぎであるだけで、何も敷いていない。そこまでの頭は無かったし、膳が戻る確率もとても少なかったから、諦めもあった為手抜きだ。

だが、今は少しでもそういった布切れでも用意して置くべきだったと後悔している。

「これを下に敷け、少しは違う」

マントを取り、膳に差し出す。それくらいしかないのだ。膳は少し驚いた顔をしている。

床は寝転がれるだけのスペースが確保され、そこに横になろうとしていたようだ。

「有難うガート、使わせてもらっよう」

館を出る時に羽織ってきたマントは最初大きかった。だから出る前に裾を括り、サイズを調節していた。

それを成長するにつれて、少しずつ解し、長くして今では丁度良いサイズになっていた。

だから膳が寝転がるには大きいくらいで丁度良いだろう。

「じゃ寝ますかね、ガートもほら、隣に寝れば？」

「俺は良い、外の様子を見ておく」

「心配性だね、二人でこうして共に過ごすのも久しぶりだと言うのに」

そっぴいながら膳は欠伸をする。そして暫くすると寢息を立てている。

こういう所を見ると、やっぱり生きているんだなと実感する。

変な言い方だが、また明日になったら、膳は石で、今日のこの空間が夢だったなんて事になるのではないかと、不安だった。

忍び寄る影

暫く寝顔を見た後、あの三人の所に飛んだ。外は真つ暗で、何処までも続きそうな闇に、少しの恐怖すら感じ取った。

空にはまだ星や月が輝いていて、それが救いだった。そして地上には何とか保っている、という感じの二件の家から見える光。

それも俺を此処へと戻らせる物だった。両方に明かりが灯っている所を見ると、それぞれの家に帰っているようだ。

「こんなに冷たくなるまで外を歩き回って、この馬鹿が」

そういう成なりの前には、既に床に着おこないている幼おとなが居る。

その寝顔はとても穏やかな物で、そしてそれを見る成の表情も落ち着いている。

分かっているのだ。成だって幼の気持ちを誰より分かっている。だからこそ齒がゆいのだろう。

きちんと幼に布団を掛け、ため息を付いているのが、肩の動きで分かる。

こんなご時世に生きているのがやっとな状況で、何かを護る為に生きている。

こんなにも幼い連中がそれを背負わされているのだ。そう思えば、俺だってそれを見ているのは辛い。

「両親は、お前の方が力が強いと言っていた、俺だってそれは分かる、だからこそ早く覚醒をして欲しいんだ、砂希羅さきろを護る為に三人で生きていく為に、必要な力なんだ」

寝て居る幼に話しかけるかのように独り言を呟く成。その言葉に、とても大きな物を感じ取れたし、どれだけその日を待ちわびているか、それも良く分かった。

しかし困った物だ。覚醒なんて本当に人それぞれで、絶対この年つて言うのではないのだ。

だからこそ成も煮え立っているのだろう。強制で出て来る物でもない。こればかりは、どうしようもないのだ。

「本当に参った、これでは膳ぜんの寿命では足りないかも知れないな、三人とも確実に覚醒を終えさせ、更には能力の応用を極め、武器とも馴染ませなければならぬ、と」

単純に考えても、年単位で必要になる。だが膳は長く見ても一年。

それだけ生きる事が出来れば十分なんだ。このままいくとなると間違いなく足りない。

こちらが攻め入る前に、また『都市とし』に襲われて、滅んでしまう。

だが、これだけの能力ちからを持っているものを易々と殺されるわけにはいかない。

奴らは癒しの者を、そして俺は膳とあの三人を護る。それが役割。

「どうすればいい、これから一体」

頭を抱えてしまいたくなる。問題が大きすぎて、重すぎる。空にてそんな事を考えている内に兄弟の家の明かりは消える。

砂希羅の家はまだ明るい。何をしているのだろう。砂希羅も覚醒済みとはいえ、まだ肝心なものが目覚めていない。

癒しの者として、一番肝心なものが、まだ眠ったままだ。ふと、三人以外の気を感じ取る。

とはいえ生者の物ではない。油のような、オイルのようなこの鼻に突く匂いは忘れるはずが無い。

『都市』の者が近付いてきている。真っ黒な衣類で闇に紛れて近づく。早速捕らえに来たのか。

俺は意識を集中する。どうやら奴らは砂希羅の家の後方から来ている様だ。

「やっぱり癒^いしの者か、狙うとしては正しいな」

静寂の中、家の窓を割り連中は侵入する。物が落ちる音。

「なにをする！」と叫ぶ砂希羅の声。俺が助けに行こうとしたこの時、連中と砂希羅が玄関から出てくる。

連中は三人。砂希羅を捕らえている者達と闇に潜んでもう一人。外に出て砂希羅の声は闇に響く。

「離しなさい！こんな事をして何になると言うの！」

その声に対して『都市』の者達は何も反応をしない。やはり、俺が昔倒した奴と同じなのだ。

俺は連中に手を翳す。と。その時、兄弟の家から物音がした。目をそちらにやると、幼が家から出てきた。

「砂希羅、どうかしましたか？」

ゆつくりと砂希羅の方に歩む。どうやら寝ぼけているようだ。

『都市』の者達が幼に反応する。捕らえるつもりなのだろうか。

「幼逃げて！成を起こすのよ！早く！」

砂希羅の悲痛の叫びを前に、幼は歩みを止める。そして少し立ち止まり、回れ右をして家へと向かう。

だがその時、闇に紛れていたもう一人の『都市』の者が幼の後頭部を強打する。幼はその場に倒れこみ、意識を失った。

「幼！何て事を・・・！あなた達、子どもにまで手を挙げるなんて」

『我等の務めはお前を捕らえる事・・・』

そう言う三人で砂希羅を捕らえ、布を口へと当てる。どうやら睡眠作用の薬が染み込ませてあったらしく、砂希羅の身体から力が抜

けた。幼をそのままに、去っていく。

『都市（とし）』動く

「助けた方が良いんだろうが、こっちも負傷者が居るな」

そう思い幼に近付く。おさなその身体は確かに意識が無い。それなのに溢れているこの気。

潜在能力の目覚めが、起こり始めている。

「スイッチが、入ったのか？今の後頭部強打で？」

何てお手軽な覚醒だろう。だが、まだ目覚めに過ぎない。次第に空気が変わっていく。

幼独特の穏やかさから、張り詰めたような、そんな空気が立ち込めている。

「う・・・」

色々考えながら立ち尽くしていると、幼が唸る。どうやら気がついたようだ。

が、俺の存在には気がついていないのか、起き上がると真っ直ぐ自分達の家へと向かう。

俺はそれを目で追う。ゆっくりと玄関に入り、床で寝入っている成なりの肩を揺らす。

「兄さん、兄さん起きて下さい」

成は反応が無い。寝るのが遅かったのか、熟睡している。幼は幾度か繰り返して呼びかけるが、ぴたりとその手を止める。

そして成に手を翳す。

「水神」

というや否や凄まじい勢いで幼の手から水が放出される。一瞬にしてベッドは上から下まで水浸し。

成はベッドから転がり落ちてその場で咽ている。

「お前幼！何て事をするんだ！」

やっとで息を整えた成が幼に怒鳴る。目には涙か、それとも水か、溜まっている。

「起こしたけど起きなかった兄さんが悪いんです」

「お前な、少しは手加減というものが出来ないのか？普段は使わねえくせに何もねえ時に使うな！」

「何かあったから使ったんですよ、兄さん」

「は？何だ」

「砂希羅^{シロ}が浚われました」

文句を言いながら上着を脱いでいた成の動きが止まる。幼は淡々と

それを口にした。

少なくとも今までの幼とは違う。以前ならば、慌てていた事だろう。きつと頭の回転も狂ってしまつて、きちんと伝える事もできなかった事だろう。

だが、今の幼は違う。そして成の顔つきも陰しくなる。

「何だと？お前は唯見ていたのか？！何故助けない！」

「砂希羅が、逃げると言いました、そして僕は『都市』^{とし}の人に後頭部を叩かれてしまつて、目が覚めたらもう居ませんでした」

「居ませんでした？お前それで何故そんな平然としていられるんだ！砂希羅が居なくては我等は生きていけないんだぞ！」

「そんな事くらい、僕だつて分かつてます、だから兄さんを起こしたではないですか？」

やはり幼は様子がおかしい。成も、それに気がついているのか？それとも砂希羅が浚われたという方に気持ちが行き過ぎていて、落ちて着いて考える事は出来ないだろうか。

まあ、それも仕方が無い。一番大切な人を連れて行かれたんだ。そして幼。

今、『水神』と言つたが、あれでも控えめな出水だったのだろう。

神を呼び出すなど、そう出来る事ではない。目の奥が、とても深く、

光ったような気がした。

だが、今はそうでもない。冷静を保っているように見える。と、それより娘を心配しないとな。

耳を澄まし『都市』の様子を伺う。そこは先程までとはまた違う騒がしさで、声も足音も増えて煩い位になっていた。

何しろ、癒しの娘を手にしたのだ。

砂希羅は・・・ああ、大丈夫。怪我もしていない様だ。元気もあるが、また手の自由は奪われている様だ。

『都市』の主

「貴方達、こんな事して唯で済むと思わないでよ！二度もこんな馬鹿な事を」

『全く煩くて敵わない、稜威様、早急にこの娘仕留めてしまいいましよう』

『まあ待て、娘が居れば忌まわしい能力を持つあの兄弟も来る、人質は必要だろう』

「稜威？貴方・・・誰？」

『この、貴様の様な者が軽がるしく稜威様に話しかけるな！』

「何を言っているの？だって、居なかったじゃない、貴方達誰一人、居なかったでしょう？」

砂希羅さきろの声は、とても動揺している。今、目の前に居るのは、全く知らない連中なのだ。

少なくとも、砂希羅達が接してきた『都市』の連中ではないのだ。

それが、砂希羅にとっては何故なのか分からない。顔は見えないが、能力の強さだけは分かる。

『娘、貴様には関係のない事だ』

『そうきつく言っな、どうせ直ぐに死す運命にあるのだ、良いだろ

う、教えてやる』

稜威は、何やら少し楽しそうな口調で言う。砂希羅は、息を呑んでいる。

周りの連中は、その稜威の言葉に驚いている様だ。そんなざわめきが耳に入ってくる。

『此処に居た連中はもう居ない、此処に、否この世に、もう居ない』

「居ない？つて、まさか」

『分かるだろう？全てを言わずとも』

『稜威様、その位にして残りの二人を捕らえる算段を』

『分かった、今度は逃げられぬよう、しっかりと見張っておけ』

身を翻し、稜威は部屋を後にする。その場には二人の兵が残り、砂希羅は絶望に打ちひしがれていた。

それはそうだろうな。確信はしていなかった物の、まさかと思っていた事が現実になった訳だからな。

言葉も無いだろう。それにしても、何故稜威は二度も子ども達を捕らえておきながら直ぐに仕留めず、生かしておくのだろうか。

邪魔な存在なのだから、直ぐに消してしまうのが普通の考えだと思っただが、あいつはそれ以上に何を考えているんだ？

「早く砂希羅を助けに行かないと」

「兄さん、そんな事を言っても『都市』に忍び込むのは至難の業です」

「馬鹿かお前は！そんな事を言つて、砂希羅が殺されでもしたらどうするつもりだ！自分の役割を忘れたか！」

「覚えてますよ、でも」

ああ、ヤバイな。兄弟が言い合いを始めた。仕方ない、俺が動くか。

幸い、砂希羅を見ているのは二人だけだ。何て事無いだろう。

『都市』から奪還

喧嘩をしている二人を放っておいて、俺は『都市』へと飛んだ。

子ども達も言っていたが、まるで牢獄だ。冷たい気配しかない。生きた人間は、この中には居ないのだろうか。

見事に窓は無く、一階の出入り口以外、外から中を見る事の出来る場所が無い。

ただ、監視カメラの様な物が多々ある。地上には、数人の兵がウロウロしている。

砂希羅の場所は分かるが、中に入る方法が分からない。俺は暫くその場で考え込む。そして、答えはすんなり出る。

「あれだよな、俺が考えるってというのが合わないんだ」

砂希羅の気配を感じる辺りの壁に近付く。恐らく、奥行きはあるのだろう。

直ぐそこに砂希羅が居る訳ではない。だが、一番手っ取り早い方法「リング・フォース」。壁に手を翳しそれを破壊する。

『稜威様！場外からの爆発音が！！』

『何奴だ！？まさかもう奴等が来たのか？』

あ、またヤバイ。連中に気付かれた。って、当たり前か。まあいい。

さて、砂希羅は何処にいる。人が二人並んで入れる位の穴から中に入る。

中は更に重い空気が広がる。そしてやたらと扉が続いている。どうやら一つ部屋を吹き飛ばして、廊下に居るようだ。

「此処に砂希羅が居なくて良かった、最近使っていないから手加減が出来ねえや」

再び砂希羅の気を探るべく集中する。と、直ぐ手前にある扉から、空気に混じり砂希羅の気配が流れてくる。その扉を蹴り飛ばし破壊し中へと入る。

『何者だ！貴様』

「ガートさん?!」

『一族の者か？捕らえる』

砂希羅が驚いて声を上げる。兵は二人揃って腰に括っている刀を抜き、切りかかってくる。

俺は背に背負っている刀を抜き、一刀両断でその兵をたたつ切る。

「どうして貴方が？」

「話は後だな」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている砂希羅。その手は、あの

時成がしていたような手枷を嵌められ、磔になっていた。

俺はその鎖を切り、手首を戒めている枷を簡単に外す。廊下から大勢がこちらに向かっているのが分かった。

俺は軽く砂希羅を担ぎ上げ、入って来た穴から外へ出る。

「うわっ！此処何階？！ひゃーっ！！」

砂希羅の雄叫びと共に飛び降りる。高さは知らないが、落ちる訳ではないし、慌てる事も無い。

と、俺は思うが、砂希羅はそうでは無かった様で、直ぐに気を失っていた。

『待て、貴様何者だ！！』

後方より声がした。『都市』の兵が集まり始めていたのだ。幾ら弱いとはいえ、大量に集まると不利だ。

俺は取り合えずそこから離れる事が一番だと思った。故に直ぐに向きを変え、村へと急いだ。

稜威^{りんい}に見つかる前に、飛ばなければならぬ。

「急げ幼^{おな}！」

「ですから、何の情報もないのに行き成り突っ込んで無事では済まないでしょうって」

「寝言は寝て言えー！ちゅちゅる」

結界を張ろう

「喧嘩してんじゃねえよ」

扉を蹴り飛ばし、兄弟の家に入る。成なりはその勢いにビクッと身体が跳ねた。

幼おさなは、何て事無く落ち着いてこちらを見据えている。

「砂希羅すろい」

「何？」

「ああ、助けておいた、俺これからちょっと仕事するから、出てくるなよ」

幼の一言で寄って来た成と、その後ろから顔を出す幼に、砂希羅を預ける。

そして俺はまた外に行き、少し広めに円を描く。それは円陣だ。

砂希羅と兄弟の家を括り、結界を張る。少し強めに。今までとは違うタイプの結界を張った。

「終わったぞ、取りあえず、これで安全だと思うが、心配だったら言え」

「あの・・・有難うございました、砂希羅を助けて頂いて」

兄弟の部屋のベッドに砂希羅は寝かされていた。まだ意識は戻っていない様だ。

深々と頭を下げ、礼を言う幼。成は、何も言わないが目がそれを物語っていた。

だから良しとした。それより、少し眠くなった。この後、もし万が一『都市』の連中が来たとしても、此処は安全だ。一端小屋に戻って少し休むとしよう。

「じゃ、また日が明けたら膳ぜんを連れてくるからな、それまでお前等も休んでおけ」

外に出て、『都市』の方を見つめる。気配は沢山している。俺の存在を知らせてしまったのは不味かったかも知れない。

だが、あの二人が行ってしまったては、元も子もないからな。

この後、もし連中が来たとしても、間違いなくばれない。後は小屋の辺りにも結界を張っておこう。

俺の気を探って来るかも知れない。そうした時、何より膳が心配だ。念には念を入れておこう。

「膳？」

小屋をそつと覗いて声を掛けてみる。膳は返事をしない。まだ良く寝ている様だ。

それに安心してまた外に出る。『都市』がこちらに向かって来てい

る。急がないといけない。

刀を地に突き立てて円陣をまた描く。この小屋と子ども達の家は離れている為、一緒に円陣を書く事は出来なかった。

だから此処は此処で結界を張らないと、此処が狙われてしまう。俺は気配を幾らでも消せるが、膳は違う。

嘗てはあの武器を二つとも使いこなし、立ち振る舞った。体力は人並み以上にあつたということになる。

少なくとも、あの兄弟より、どれだけ弱ってもまだ膳の方が強い。まして秘石に入っていて能力まで得てしまった。

それを『都市』の連中に嗅ぎ付かれては困る。あと一年だ。隠し通してやる。

「さてと、もう一眠りするか」

小屋に入る俺の耳に、『都市』の連中のざわめきが聞こえる。

その声は、慌てふためいている様に聞こえる。それはそうだろう。そうなるよう、俺が仕組んだのだから。

『稜威様！大変です！』

『どうした、騒々しい』

『村が、村が無くなっておりました！』

『・・・何？』

連中の騒ぎ方は、俺の想像を超えていた。まあそりゃあそうだろう。起きたら、子ども達にも説明をしておこう。そうしないと、全く意味を成さない事になってしまうから。

今日は能力を使い過ぎた。膳の事は言えないな。そんな事を思いつつ、瞼が下がる。

予定変更

「ガート、ガート、朝だよ、そろそろ起きたら？」

「あ？」

ぼんやり目を開けると小汚い天井が目に入った。そして膳ぜんが笑って見ている。

俺はふと頬を伝う涎を手で拭い、ごろりと寝返りを打ち起き上がる。下を見るとそこには俺のマントがあった。どうやら膳が寝ていた所に転がったらしい。

「明け方にいきなり僕の上に倒れこんで来て、びっくりしたよ、死ぬかと思った」

「悪い、ちよつと疲れた」

情けない。寝床までちゃんとたどり着けずに膳の上に乗るとは。隣に寝ようとしたのだが、そこまで意識がもたなかった様だ。

必要以上に能力ちからを使い過ぎたのが原因だ。膳は何事も無かったかの様に何時も通りに笑っている。

「びっくりして起きたんだけどさ、ガートの寝顔があ頃と同じだったから、何か安心して、僕もさっきまで寝てたんだよ」

「人の寝顔を見るな、趣味が悪いぞ」

「起こしたのはガートでしょうが、いいじゃない、可愛いつて言ってるんだから」

「・・・二十三の男に言う言葉じゃねえよ」

頭を掻きながら愚痴る。何とも言えず恥ずかしい。涎までたらして、本当に。

膳が戻った事で変に安堵感を覚えてしまつて、神経まで緩んでしまつた様だ。

この数百年はかなりピリピリして生活をしていただけに、この差は激しい。俺自身が怖ろしい程驚いて居る。

「じゃ、連中の所に行くか」

「え？今起きたばかりなのに？」

「行くつて言つてあるだらう？」

「うっん、また来いつて言つてたよ？」

不思議そうな顔をして膳は首を傾げる。俺はふと記憶を反芻する。

確かに最初は『来い』と言っている。だが昨晚、砂希羅なれいを取り戻し、送り返した時には『また来る』と言っている。勝手に予定を変えてしまつたのだ。

「幼おとの槍は此処にある訳だし、取りに来てもらつて、話をすればいい

いじゃない」

「いや、昨晚あった際、行くと言ってしまった」

「へ？あの後会ったの？」

「ああ、色々あってな、状況が変わったんだ」

「そう？じゃあ行かないとだね」

まだ、何となく不思議そうな顔をしては居るものの、槍を拾い上げ扉に向かう。

俺の知らない膳。あの槍と、成の持って行った剣を使いこなした膳。どれだけの雄姿だったのだろう。そしてそれをあの三人は、義兄達はどうな思いで見つめていたのだろう。

この恨みがましい世の中を悔やんだのか？それとも膳の成長を愛しむ思いで見つめていたのだろうか。

今は、もう何も分からない。それを聞ける相手は、存在しないのだから。

あの三人の事を口にして、膳の表情が曇ってしまうのは嫌だ。だから何も言わない。

「ガート、何をしているの？早く行くよ」

既に外に出ている膳が、まだ立ち上がりもしない俺を呼ぶ。その姿

は、余命一年とは思えない程元気だ。

もっと早くに戻っていたら、もう少し長く生きる事は出来たのだろうか。

否、例え話はやめよう。空しくなるだけだ。俺はマントを拾い上げ、軽く埃を叩き、また

身に纏う。

もう何年も洗っても居ない薄汚れたマントだが、捨てようとは思わない。館の紋章が入っている、秘石とこれだけが俺の出身地を、館やかたを思わせるからだ。

迫り来る恐怖

「じゃあ行くぞ」

「うわっ、何をするんだガート」

ヒョイと膳ぜんを担ぎ上げる俺に、何とも間抜けな声を出す膳。そしてじたばたと暴れる。

「何って、あいつ等の所に行くんだろっ？」

「そうだけど、何でこんな形だ？歩けるよ」

「・・・距離どれ位あると思う？二丁三キロじゃねえぞ？その十倍はある、それをお前は歩けるのか？」

「う、歩けない事はない、だろ」

「日が暮れる、お前は飛ぶ訳にも行かないんだから、大人しくしてろ」

「でも、って！」

グンっと上空へと飛ぶ。

「人の話は最後まで聞けー！」

と、膳が俺の背中に向かって文句を言う。そんな物聞いている時間が勿体無い。

唯でさえ時間がないんだ。少しでも短縮しないとイケない。暫くすると三人の住んでいる地域へ入った。

「ねえガート、お前何かしたかい？」

「何かって、何だ？」

「うん、僕の居た小屋、見えないんだよね、僕は目は良かった、この位離れただけで見えなくなる筈がない・・・結界を張ったね？」

先程とは違い、落ち着いた口調で聞いてくる。流石分かってる。

短い時間とはいえ俺と共に暮らし、そして何百年も石として生活？していたのだ。俺の能力には反^{ちから}応が良い。

「かなり特殊な物をな、こっちにも掛かってる」

「そう、お守りだね、昔僕の家にかけてくれたのと同じ様に」

「あれより、もっと特殊だ、起き上がって見て見る」

空中で止まり、膳が上体を起こし、正面を見える様に手を貸す。その表情はとても面白い。鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。

「どういう事？何であの子達の家も見えないの？」

「時空を歪めた、『都市』^{とし}の連中に見えない様に、お前の居た小屋も同等の結界を張った、これで連中にはばれない」

「凄いね、こんな事も出来るんだ？」

ほう、とため息を吐く膳。「だが」と付けたしをする。

「小屋と三人の地域との間には、無の空間がある、結構離れてるから別々にしたんだ、だから少しの空間は『都市』の連中にモロバレなんだ」

「・・・それって、どの辺り」

「この辺り」

「っ！じゃあ止まるなよ！」

「ああ、ちよつと脅かしておこうかと思ってな」

凄い形相で怒る膳を後目にまた飛行を続ける。ただ、先程よりスピードは速めにした。

何故なら『都市』の稜威^{りんい}は俺達の存在に気が付いて、周りの何にも言わずにこちらに向かって飛んで来ているからだ。怖ろしい速さだ。下手したら追いつかれる。

「膳、喋るなよ、舌嚙むからな」

地上よりかなり高めの所を飛行して、そこから直下行し、三人のエリアまで飛び込む。

そこに入れば連中からは見えないのだ。結界に入り、くると回れ右をする。

そしてそこで止まる。結界の向こう。まるで蜃気楼の様に、外は揺らいで見える。

俺の目の先に、影が降りてくる。でかい。強い能力を発している。息を呑む。

絶対に向こうから見えない自信がある。だが、この向こうに居る者のあまりの能力の強さに、喉が渇く。

結界ぎりぎりまで近付いているその者。稜威。はっきりとは見えな
いが、その目はとても強い。

顔も少し分かる。頬に大きな傷がある。綺麗な銀髪に、長身。体つきもがっしりとしている。

これが、『都市』の長。最も強い者。その実力。中に秘める能力の強さが、結界を挟んでも良く分かる。

こいつに勝てる様にあいつ等を仕上げないとならない。怖ろしいプレッシャーだ。

暫く、稜威はそこでじっとこちらを見ていたが、いや正確には見ていた様に見える、だな。

見えていない訳だから。諦めたのか、す、と『都市』へと戻って行った。嫌な汗を掻いた。俺ですら勝てるかどうか分からない様な能力だ。

「どうかした？」

ぐったりとして、やっとで喋っている様な膳が問いかけてくる。今までは意識がなかったから、恐らく稜威の存在にも気が付かなかった事だろう。

それは、知らぬが仏という物だ。じんわりと手や額に浮かぶ汗を手で拭い、三人の下へと急ぐ。

『都市』について

「お待ちしておりました、あれ、どうかしましたか？ 顔色が優れませんが」

玄関を開けて出迎えてくれた幼^{おきな}が、不思議そうに首を傾げて問いかけて来た。

その対象は、俺と膳^{ぜん}両方だ。膳は乗り物酔い、とでも言っべきだろうか。

やはり急降下は効いたか？ 胃が持ち上がる感じがして、気持ち悪くなるんだよな。

やってる当人の立場だとそんなに感じないんだが、受ける立場だときついんだよ。

「いや、気にしないで」

「取りあえず座ってもらったら？」

「あれ、砂希羅^{ひろ}、もう来てるんだね・・・」

家の奥からヒョイと顔を出して来た砂希羅に、膳が不思議そうに問い掛ける。

「言っても息も絶え絶えに、と言った感じだ。」

「ええ、今朝ガートさんに送ってもらってから、そのまま居るわ」

「え？ガートに？」

「朝っぱらから騒動があつたからな」

足元覚束無い膳の背を支えながら家の中へと入る。部屋を中心にあるテーブルと、その周りにある椅子。そこに取りあえず膳を座らせる。

「僕は何も知らなかったよ」

「俺が疲れたから、説明をしていなかったただけだ、無事だったしな」

「そうだけど、大変だったね」

「貴方もね」と笑顔で返してくる砂希羅に、膳は苦笑いをしていた。確かに今大変なのは膳の方だ。

「僕等がそわそわしている間に、ガートさんが助けてくださったんです」

「俺達が行っても良かったんだ」

ベッドに腰をかけて成が偉なりそうに言う。まるで邪魔をされたとも言つ感じの言葉だ。

「何を強がつてる、お前等が行った所で中に入る事も出来ないぞ？本当に窓の一つもねえ、殺風景な嫌な所だった」

「そうね、本当にあれは昔の私達の知っている『都市』ではないわ、

本当に牢獄その物よ」

膳の正面に腰掛け、遠くを見る様な目で語る砂希羅。その脳裏にはどんな平和な過去が浮かんでいるんだろう。俺も立ち寄らなかつた頃の

この村。そして『都市』^{とし}に居た連中の性格が、想像できない。少なくとも、今のあの建物からは。

「何を言ってるんだ、『都市』は『都市』、今も昔もない」

「本当にそう思ってるの？ 私達に親切にしてくれた、とても優しい人達だったわ」

「だが村は襲われた、何処が優しいんだ、俺達を手懐け、侵入をし易くし、滅ぼしたんだ！」

凄まじい剣幕で成は叫ぶ。それを聞いていた幼も砂希羅も、その時の事を思い出しているのか、口を紡ぐ。目が泳ぐ。

「それでも」と砂希羅が重々しく口を開いた。

「違うのよ、成」

「何が？」

「・・・あの人達、全く知らない人達だったわ」

テーブルの上で手を合わせ、祈る様に落とす様に言葉が出る。

怒髪天になり、そっぽを向いていた成と、あの時の事を思い出して沈んでいた幼は、同時に顔を上げ、砂希羅を見る。

その動きは何となく面白く、そして砂希羅の言っている事が本当だと、俺は悟った。

二人は『信じられない』といった顔をしている。だが、心なしか幼のその目には嬉しそうな光も見えた。

恐らく、良い人達だったと思っていた人達とは違う連中が自分達を狙い、滅ぼそうとしたのだと。

自分達に良くしてくれた人達は、やっぱり優しい人達なんだと思ったのだろ。う。だが、喜ぶのは明らかに早い。

「どういう事だ？じゃあ当時の『都市』の連中はどこに行った？」

動揺しながら成は砂希羅に問い掛ける。当然出る疑問だ。『違う』ならば、そいつ等は一体どうなった？まあ、聞くまでもないだろう。

連中がどれだけ冷酷かを知っている。ならば、それは愚問と言う物だ。

「誰一人、居なかったのか？」

「多分・・・稜威様りんいって呼ばれてる奴が居た、あれがきつと長おとなによ、とても嫌な目をしていたわ」

稜威。つい先程まで正面に居た。歪みを挟んで、それでも強く感じた能力。

村に居た連中を仕留める事など朝飯前だろう。そしてあの兵隊。最初に殺した奴もそうだったが、人間ではない。

いや、元は人だったのだろうが、それは見てくれだけだ。良く見れば、元とは言え人扱いはしたくない。

身体は何処もかしこも隠れていて、指先すら出ていなかった。マスクにより声すらまともに聞けない。

何とも不気味な空気を持ち、気配を感じ取れない程の奴だった。だが、今なら間違いないと言い切る事が出来る。マリオネットだったと。

『『都市』とはある村の中心核の中へと入り込み、そこに居た連中全てを洗脳し、村全てを乗っ取ったんだ』

ふと、昔^{ほのつ}焔に言われた言葉が頭を過ぎる。本当の事だったのだ。

とはいえ、その当時の村と、今現在居るシグマの一族とはまた別物。繰り返し繰り返し同じ事をしているんだ。なんて低脳で、最悪な行為なのだろうか。

「探せば、居るかもしれないが、もし万が一居たとしても、中身は全く別人になってる、ならば会わない方がいい、死んだと思って居た方が救いになる」

「そんな」

「正直、あんな奴が敵かと思うと俺だつて引きたくなくなるくらいだ、それだけ強い、間違いなく強い、そして今のお前等では、あいつの足元にも及ばず、触れる事も出来ずに殺される」

俺の言葉に啞然とした表情をする幼。祈るような姿勢で俯く砂希羅。目を見開き、顔を強張らせる成。膳は、やはり絶望的な目で俺を見ていた。

その意味するのは、『何故そんな事を言うのか？』というのと『やっぱり駄目なのか？』だろうな。

確かに、酷な話だ。伝えるのももう少し言葉を選ぶべきだと言うのは分かる。

だが、稜威と出会い、痛感した。たった一年で、この三人をあれに對抗出来る程までに鍛え上げなければならないのだと。

もしかしたら、や、シグマの戦闘力を持ってすれば太刀打ちできる。なんていう甘い考えはこの際根っこから引っこ抜いて無かった事にしなければならぬ。

心を鬼にして、鍛えなければならない。この際、膳に恨まれても、この三人に嫌われても、俺が鬼として接しなければならない。苦渋の選択だが仕方ない。

修行を始める前に

「・・・どれ位だ」

息が詰まる程の沈黙を破ったのは、成なりの一言だった。

「どれ位強くなればいいんだ？」

「さあな、死に物狂いで毎日修行をする、一年間一日も絶やさずだ、血を吐く思いで続ければ、一％は勝機があるかも知れない」

「一％つて、そんなにも低いんですか？」

「しかも一年つて？」

幼おさなと砂希羅さきろが口々に質問をしてくる。俺と膳ぜんは顔を見合わせる。

膳は、一度頷く。まだ詳しい説明を一つもしていないのだ。

「つまり、あれ？石になっていたから寿命が縮んで一年しか生きられないって事？」

「西暦2019年に石になったって事は、五百年も石だったって事ですよね？よく元に戻れましたね、ガートさんが死んでしまうとか考えなかったのですか？」

一通り話し終えると、二人は機関銃のようにまた質問をしてくる。

相当驚いたようだ。

しかし、五百年も経っていたって言うのは正直俺だって驚いた。

途中から日を数えるのを止めてしまっていたからだ。そうになると益々俺自身の寿命も分からなくなってきた。

「ガートは僕の心眼しんがんを開いたままにして、離れた所に居てくれたんだ、正直それは悪夢だったけど、お陰で君達を見つける事も出来てこうして『都市とし』に立ち向かう事が出来るわけだからね、結果としては良し、かな」

「今、こうしている状態ではそんなに高い能力ちからを持っている様には思えないが、俺の武器と幼の武器を所持していた、と言うのなら嘗ては強かったって事になるな」

「過去にするな、今の膳だってお前らに勝てる」

経緯を語り終えた膳と、それを聞いて生意気な意見を言う成に少し切れる。

何も分かっていない。秘めたる物がどれだけの物なのかを。

少々嫌味を込めた俺の言葉に、成はむっとする。その表情は、子どもそのものだ。

「膳、幼にあれを」

「あ、そうだった、外に置いて来てしまった」

テーブルに手を着き、立ち上がると外まで取りに戻る。その歩き方を見ると、もう調子は心配無さそうだ。

そして戻ってくるその手には、昨日幼が忘れていった槍が光る。砂希羅と成は、それを見て身体を固まらせる。

そして当の幼は「はい」と差し出す膳の手から普通に「有難うございます」と受け取る。

二人は顔を見合わせる。昨日『嫌だ』と泣き叫んだ幼と同一人物とは思えない程落ち着いている。

覚醒が、起こったからか、恐らく戦闘民族の血が以前より強く出ている為だろう。

膳にも話はしたが、これが一番の証拠になるな。

「槍が強く光ってるな、喜んでいる」

やっと持ち主の手に触れ、能力を槍事態が受け取り、共鳴をしているのだろう。

その時の槍を見ている幼の表情は、本当に別人だった。

なんと表現したらいいのか、目が笑っていない。口元だけが笑い、ぞっとする。

本当にあの幼かと、自分の目を疑いたくなる程に、今目の前に居る幼は別人の様な気を発している。

だが、俺よりも成と砂希羅の方が強く感じ取っているだろう。その動揺が空気からひしひしと流れてくる。

「兄さんの剣も、この槍に反応してますね」

「あ？」

不意に声を掛けられ、固まっていた成は低い変な声を出す。そしてはっと我に返る。

ベッドの脇に立て掛けてあった剣が、静かに光っているのだ。それは、幼の言う通り共鳴をしているのだ。仲間が来て嬉しい。そういつた所だろうか。

「その二つは、一緒に造られた物だからね、言わば兄弟の様な存在だから、君達のような兄弟の元に来て、とても嬉しいんだと思うよ」

重苦しい空気の中、膳は嬉しそうに、懐かしそうに言う。恐らく、いや間違はなく、あれを造った慄の事を思い出しているのだろう。

となれば、残りの二人も洩れなくついてくる。目を閉じ、幸せそうに笑うその顔。

俺には与える事の出来ない表情。こんなにも時間を経ても、それだけは変える事が出来ない。

記憶という物は、幸せにもなるし、時にとても残酷になる。

「これで武器は手に落ちた、今後はそれを使い、お前等を鍛える、さつきも言ったが、時間はたったの一年だ、それを肝に銘じておけ」

「先程、毎日つて言いましたよね、今日から修行は始まるのですか？」

「そうしたい所だが、とりあえず今日は話し合いをとつ、お互いの事を知らな過ぎる、あと、お前等兄弟は俺、砂希羅は膳が付いて修行となる」

心配そうに問い掛けてきた幼。その手には槍はもうない。成の剣と一緒に並んで立ててある。

その所為だろうか、幼の顔はまた以前のおっとりした表情になっている。

不安そうな目をしている。先程までの人物と同一人物とは到底思えない。

「俺達の武器を持っていた膳さんが、何故俺達の相手ではない？使っていたからこそ指導するべきなんじゃねえのか？」

「そうしたいのは山々だけれど・・・」

「それもさつき言っただろう、こいつはもう寿命がねえ、此処で下手に能力を使い命を削ると、更に寿命が短くなってしまう、それに能力で言うならば俺の方が確実に上だ」

成のいう事は最もな意見だと思う。だが、こいつは、膳は放っておいたら間違いなく能力を使ってしまう。

ましてや今あの兄弟の手にあるのは以前、膳が使っていた物とは大

きく違う。

秘石が入っている。唯それだけで大きい。俺が作り変えたんだ。簡単に手に入らない様に、強い能力を持つ者にしか渡らない様にしたんだ。

それを膳が使用したら、間違いなく潰れる。一時間持てばいい方だ。それは阻止しなければならない。

それに、癒しの能力を持つ砂希羅。唯一人の女だ。性質的に俺より膳の方が話が出来るだろうし、これから起こる砂希羅の変調も、俺よりは膳の方が促したり、宥めたり出来るだろう。

母性も父性も、俺よりは備わっている。

「と、いう事だから、砂希羅」

「私はどっちでもいいわ、二人と違って身体を鍛える訳ではないんだし」

けろりとした表情で、他人事の様に言う。さばさばした性格だ。女というのは皆こうなのだろうか？

母様は、こんな風だったな。国をまとめる役割を果たしていたのだから、女らしさなどいらなかったのだろう。

そして砂希羅。この娘もまた、この戦場を生きているのだから、そんな物無用の長物だろう。

「少しは鍛えるよ、二人は君を護るのが仕事だって思ってるけど、

稜威と戦つてゐる時に君をガードするつていうのはかなり厳しい、故に君は自分の身を守る位の戦闘力をつけて貰うよ」

「ああ、それ位なら」

「心配しなくても、砂希羅は十分怖ろしい女だよ、下手すりゃ俺等より強い」

「・・・いらない事は口にしなくてもいいのよ？成」

につこりと笑つて忠告するが、その笑みすら確かに怖ろしい物を感じ取れる。

ま、最年長だし、砂希羅には手が掛からないだろうから、膳に任せても俺も心配しなくて済むだろう。

あの能力は膳にはない。時が来れば自然とそれは動き出す訳だ。

ただ、砂希羅の事で問題になるとしたら、完全なる覚醒が何時になるのか分からないって事だ。

兄弟と違つ一族の砂希羅は、とても難しい。取りあえず、あれが始まり、完璧に終わり、痛みが治まるまでは油断が出来ない。その間、影響が兄弟に行かないとも限らないのだ。

「自己流で強くなるのも、大切な事だけれど、知っている人間から聞いて、鍛えて強くなるつていうのも必要だよ、僕は能力を使えないような物だから、護身術でも教えるよ」

「よろしくお願いします、ガートさんも、この二人をよろしく願

います」

テーブルに手をつけたまま、顔を上げて俺に言う。兄弟は、俺を見てはいるが、何というのか疑っている様な、そんな目をしている。

あまり強いと思われていないようだ。と、砂希羅が椅子から立ち上がり、二人の間に行く。

成は相変わらずベッドに座っている。幼は砂希羅の隣の椅子に座っていた。二人とも不思議そうに背後に来た砂希羅に顔を向ける。

「お願いします！」

言うと同時に二人の後頭部を掌で思い切り押し、無理やり頭を下げさせる。

「ぐっ」と二人は小さく唸る。あまりの事で驚いたが、

膳は本当に目を丸くしていた。何回かパチパチと瞬きをしていた。

「痛えな砂希羅、離せよ！」

不自然な姿勢から砂希羅の腕を振り払うと、首を回す。幼はそれに便乗して手を緩ませ、逃れる。

そして呼吸を整える。砂希羅はというと手を合わせて手首のマッサージをしている。

成を抑えていた方は少し強めだったからか？それとも振り払われた時にでも痛めたか。

「貴方達が挨拶の一つも出来ないからでしょう、これからお世話になるんだから、それくらいしなさい」

手を腰に当てて言う砂希羅。流石最年長。とても言つべきだろうか。二人は砂希羅に頭が上がらないように見える。

年齢・身長・個人差・・・

「そういえば、三人は年は幾つだい？」

「年？ええと、私が二十一、成^{なり}が十八、幼^{おさな}が十五よ、三年ずつ年が違うの」

「十八？十五？」

眩暈がした。どう見ても成は十五、六にしか見えないし、幼は十位に見える。それが、実年齢はそんなに上なんだ。

ショックだ。これは食糧不足の栄養不足がかなり大きな問題になっている。畑で作る物を増やさなければならぬ。

「どうかしましたか？」

年を眩き、ぼうつとしている俺に幼が問い掛けてきた。これで十五俺が膳^{ぜん}達と出会った時と、同じ。俺はもっと成長していたなあ、等と想像していた。

「チビだな」

「はあ?!」

つつい本音が口について出てしまった。それを聞いた幼は見るからに目つきが鋭くなった。

そして成もじろりとこちらを睨む。

「十五かあ、ガートが僕らの所に来た時、その年だったねえ」

懐かしそうに膳が言う。思う事は同じだった訳だ。そうすると、成と当時の膳が同じ。

この二人を比べるならば、成の方がガタイがいい。膳は小柄な方だし、線も細い。

幼ほどではないが、二人を足して二で割った様な感じだろうか。

「あのねえ、貴方達の頃がどんなだったか知りませんが、今の世の中でどれだけの物を得る事が出来ますか？食料だって高が知れてる、口にすることが出来るだけで幸せなんです、栄養なんて考えられる訳がないでしょう？！」

凄まじい早さで捲くし立てる幼。顔を真っ赤にして怒っている。元々色が白いから、なんともまるで夕コのような。

成はこれと言って変化がない。あまり気にしていないのだろう。成自体は問題ないからな。

砂希羅は『あらあら』って感じが。要するに、俺が禁句を言ったから、幼が燃えた、って事だな。

「まあまあ、ガートだって幼君とあまり変わらない感じだったよ？髭が凄くて、親父みたいだったけど、髭剃ったら凄い若かった」

「止めるよ大昔の話をするの」

「いいじゃないか、本当の事なんだし、あの当時は可愛かったのねえ、背だつて僕より低かったし、今なんてどうしてこんなに成長しちゃったのかなあつて思うくらい伸びちゃつて」

「お前が悠長に五百年も寝てるからだろうが、その間に俺の時間は過ぎてる、成長だつてするだろう普通」

「でもさあ、伸びすぎだと思わない？ガートは僕とであつた時まだ僕より頭の半分は小さかつたのに」

膳は三人に同意を求めるように身振り手振りで語る。目の先に開いた手を合わせ「この位」と説明をする。

三人は、呆氣に取られている。幼の熱氣も何処へやら。昔話に花を咲かせた膳には、誰も意見を述べない。

やれやれだ。昔っからこんなにも喋る奴だったか？石になっていたから、喋れなかつた分、今取り返そうとでもしているのだろうか。

その話の相手をさせられる方に言わせてみれば、いい迷惑だ。

「確かにあれからグンと伸びたよ、三十センチくらいは伸びたろうさ、だがな、それがどうした、どうつて事ないだろうが、成長は個人差と言う物があるんだよ、いくら歳が上でも、成長までは違うだろ、お前の兄達だつて、年の差と身長の違いがあつたろうが」

あまりにも止まらないマシンガントークに業を煮やし、投げやりに膳に言い、はつとする。

そして「あ、地雷か？」等と思ったが口から出てしまった以上はも

うどうする事も出来ない。

ただ、膳を見る。目の前には、先程までの表情と違う。いや、正確には表情を見ることも出来ない。

俯いてしまっていた。三人は顔を見合わせる。つい先程膳の口から過去を聞いたばかりで、恐らくあの三人の事を言ったから、と思っていることだろう。

子どもでも、それ位の気を使う事は出来ると言うのに、俺はその辺が足りない。相手を思いやる、と言うか、空気をよむと言うか、難しい事だ。

「あー、いや、なんだ」

言葉を濁す。どう言ったらいいのか分からない。頭をガシガシと掻いて言葉を選ぶ。

幼い三人も冷や冷やとしている。何しろ水を打った様に静かになっ
てしまっているのだ。

「ふふ」

何をどうすべきかと考えていると、押し殺した様な笑いが聞こえた。それは、俺の目の前に居る者。

膳から聞こえた。ふと、また膳を見ると、肩が震えていた。

『泣いてるのか?!』等と動揺したが、「ふふふ」とまた聞こえる。ふふ?って、まさかこいつ、笑ってる?

「膳？」

「・・・っ！あーもう駄目、我慢できない！！」

そういうと膳は腹を抱えて大笑いをし始めた。俺は勿論、幼い三人もきょとんとしている。

そりゃそうだろう。泣く、怒るは分かる。

だが笑うなんて選択肢が、今の状況で出てくるなんて誰も思わない。顔を真っ赤にして笑う膳に、俺もつられて笑ってしまう。

「お前な、心配せんな」

「だって・・・ガートが僕の顔色を伺うのが面白くて・・・っつい」

「人で遊ぶな」

そう言いつつ、ため息を吐く。良かった。本当に落ち込んでいる訳では無いようだ。

とはいえ、これだって芝居かも知れない。昔も、そういう時があった。今回は、本当に芝居であって欲しい。

修行をするにあたって

「取りあえず、本題に戻るぞ」

一つ咳払いをしてから三人に向き直す。膳^{ぜん}はまだ笑っている。

声は殺している物の、肩は震えている。やれやれだ。だがその所為か子ども達も落ち着いている。場が和んだ、という感じが。

「身体の多少の差は置いておくとしてだ、問題となるのは体格より能力、既に覚醒を遂げている成^{なり}と、まだ欠片しかしていない幼^{おさな}、だ
が俺から言わせて見れば似たり寄ったりだ、これからその武器を使い、体力をつけ、より実用的に無駄なく能力を使いこなせるかどうか問題になってくる、まず第一に身体を鍛える」

「俺は十分今までも鍛えてきたが？」

「そうだな、それは体を見れば分かるし、滲み出てる能力で分かる^{ちから}だが、足りない、その刀を持った時どう思った？」

「？しつくり来る、だが少し重い」

「だろ？それが無くなって貰わないと困る、むしろ軽いと思えるくらいにならないと立ち回る時に不便だ」

戦いにおいて一番重要な体力と技術。幾ら武器が優れていても、それを使いこなせなければ何の意味ももたない。

振り回されて隙を突かれてやられてしまう。それでは困る。

「暫く、そうだな、二ヶ月位はそれを使いこなせるよう、本当に根本的な修行をしていくつもりだ、無論俺のペースで行く、お前等の命や体力に合わせるつもりは無い、それは心しておけ」

真顔でそう言い切ると、先程和んでいた空気が、また凍りついた。

膳もいつの間にか笑うのを止め、不安そうな顔をして俺を見る。

勿論、殺すつもりは無い。が、何分時間がない。仕方が無いのだ。俺が鬼にならない限りは。

「貴方達に協力してもらおうと決めた以上、従うつもりです」

「幼はともかく、俺はそんなに柔ではない、したいようにすればいい」

意気込む幼と、可愛げの無い返答をする成。想定外の事をされるなんて、それこそ夢のまた夢だろうな。

砂希羅^{さきろ}は、少し心配そうな顔をしているように見える。

そしてその砂希羅とて、決して何もなくていいわけではないのも、また事実。

「じゃ、話は早いな、今日の昼過ぎから修行を始める」

「もう始めるのかい？もう少し時間を・・・」

「時間が無いと言ってるだろう、躊躇する時間なんて無いんだ」

膳が言うのを遮り強めに言う。三人は驚き、膳も少し揺らぐ。だが、どうしようもない。

時間を延ばす事だけは出来ない。今の現状で膳の命を延ばす事も出来ないんだ。急ぎ過ぎかも知れないがこれ位しないと恐らく間に合わない。

「そうだね、分かった、じゃあ昼は一緒に食べて、それから修行に移ろう」

ぽん、と俺の肩を叩いて言う。その言葉と笑顔に、三人も安堵の表情で頷く。

甘やかす時間なんて無い。コミュニケーションを取る事すら、まとも出来ないかも知れない。

乱暴な言い方にすれば、修行を通して身体で伝い合うしかない。何より口惜しいのは、時間が無いという事。

それ故に苛立ち、当たってしまうかも知れない。もう少し落ち着きをもたないと駄目だと分かっている。

だが、今の俺にはそんな余裕すら、ない。考え込んでいる俺を他所に、砂希羅は自分の家の様に兄弟の家の台所に行く。

昼飯の準備を始めている様だ。幼は急ぎ足で外に行き、畑から野菜を採る。

育ちが良いとはお世辞にも言えないようなやせ細った野菜。それでも無いよりましだ。

成は、動かない。いつもそうなのだろう。ただ刀を見ている。幾ら自分の力や能力に自信があっても、それだけでは敵は倒せない。

思うところに、今のこの二人では外を見張っている、もしくは館内を彷徨っている兵すら、倒せないのではないだろうか。

仮に倒せたところで、稜威^{りんい}の所まで体力と能力が持つとは思えない。

辿り着いて敢え無くダウン、では困るわけだ。最短距離で、最善の方法で、鍛え上げなければならぬ。

今までこんなに考えた事は、膳の時以来ない。人が絡むとどうしてこう、難しくなるのだろうか。

料理を作ろう

「砂希羅^{カネロ}、何か手伝う事はあるかい？」

台所に居る砂希羅に声を掛ける膳^{ぜん}。ふらりと歩いて見てみる。台所はテーブルの直ぐ奥。薄い壁一枚で仕切られ、出入り口のみ取っ払われている。

布の一つもなく玄関正面から見ると流しが丸見えだ。その右に行くと突き当たりに鍋が並んでいて、火を使う所もある。

「二人揃って、此処は狭いから一人で一杯よ」

「あれ、ガート、君も？」

「あ？ああ、どんなモンかなと思ってな」

意外そうな顔をしている膳。そりやそうだろうな。膳が健在の頃俺はまともに台所に立った事なんてあまりなかった。

あの三人の義兄が死んで生氣が抜け切った膳に元気になって欲しくて、頑張って作った事もあった。

でも、ほんの一時だけだった。今でも、料理らしい料理なんて俺には出来ない。だが、一つだけどうしても作りたかった物、いや使いたいと思っていた食材はあった。

「膳、座ってるよ、俺ちよつとしたい事あるから」

「え？砂希羅の邪魔はしないでよ？」

「・・・俺はガキじゃねえぞ、いいから」

慌てふためいている膳の背を押し、さつき座っていた椅子に座るよう促す。成は目だけこちらを見るが、身体は動かない。

野菜を採って戻って来た幼は、俺が台所に居るのを見て少し驚く。野菜を流しで洗い、俺を気にしながら砂希羅にそれを渡す。そしてまた椅子に戻る。

恐らく、俺が居た事によって居場所が無く、仕方なく戻った、という感じだ。その証拠に後ろからちらちらとこちらの様子を伺っている。

「あの、何か作るの？貴方が？」

「あ？まあ取りあえずな」

「それじゃ、邪魔になるんで出るわ、貴方大きいし、狭いから」

そう言うのと砂希羅も出て行く。本当にさばさばして、男らしい女だ。幼よりよっぽど男を感じるな。

「あれ、砂希羅、君も出てきたの？」

「ええ、台所は見ての通り狭いから、ガートさんみたいに大きい人と二人で立つのはちよつと無理があるかな」

椅子を引く音がある。どうやら腰をかけたらしい。膳も、砂希羅を

はじめ三人も、俺が一体何をしようとしているのかを気にしている様だった。

俺は、大した事をしたいわけではない。ただ、一つだけしたかったから此処に来たのだ。この日の為だけに用意した。

「鮮度の良いのを選ばないと、何しろ思った以上に時間が掛かったからな、大丈夫だろうがなるべく新しい方が身が張っていて旨いからなあ、さてどれにするか」

懷から小瓶を取り出し、中身を板の上にはらける。そこには短い枝の様な形状の物が転がっている。数にして数十個。

その中から良い物を幾つか取り出す。そしてそれを器に入れ、水を注ぐ。水は瓶の中に入っていて、それを柄杓の様な物で掬う。

水源は、幼の入っていた泉ともう一箇所。そちらから汲んで来たのだろう。とても綺麗な、透き通った水だ。その水に浸された物体は徐々に大きくなる。

そして元あった姿に戻る。それを小さめに切り刻み、鍋に移し、火元に火を放ち、炒める。

最高の嫌がらせ（食べ物は大切に）

「あれ、何か良い匂いがしてきたね、ガートは火のつけ方を知ってたのかな？ 教えてあげたの？ 砂希羅^{なまひろ}」

「いいえ、私は何も」

「自分で点けたんじゃないのか？ 能力者だろう？」

「確かに能力者ではあるけれど、あいつの能力は半端じゃないよ？ 台所が吹っ飛んでなければ良いけど」

「爆発音はしてませんから、恐らく大丈夫かと」

テーブルを囲み、口々に失礼な事を言っている。だがそんな事は正直どうでも良い。今は目の前にある食材を如何に旨く料理として仕上げるか。それが問題だ。

これが何か知らず口にして、そしてこれが何だったのかを知った時のあの四人の顔を思い浮かべるだけで面白い。特に膳。あいつに誰より多く食わせたい。皿を探し、それを大雑把に盛る。鍋は流しに放り、適当に洗う。

「出来たぞ」

テーブルの上に皿を置く。成^{なり}は相変わらずベッドに腰を掛けていた。ちらりとこちらを見るが、それ以外動きは無い。可愛げの無い奴だ。

幼^{おさな}と砂希羅は、不思議そうに皿を覗く。

「これは何ですか？」

「見た事ないわね、昔の食材？」

じつと見たり、匂いを嗅いだり、落ち着きがない。恐らく、料理の担当はこの二人なのだろう。まあ最も成が進んで料理をするようには見えない。思えない。

二人がそわそわしながら質問してくる中、膳も首を傾げていた。分からないんだ。そう思うと笑ってしまう。

「食べてみれば良い、美味いぞ」

そう言うと、砂希羅はヒョイと一つ摘み、口の中に。良く噛み砕き、味わっているところを見て、幼も続く。

「何だろう？何だと思う？幼」

「うーん、分からないです、食べた事無い食感です」

食べてもまだ分からない。首を二人して傾げる。成はそんな二人を見てやっと立ち上がり、皿の中のそれを見る。観察している。膳ぜんはそんな成を見つつ、手は出ない。

「膳さん、貴方なら分かるかも知れませんか？昔食べた事があるかも」

口の中の物を嚥下し、膳に食べるよう進める。『よし、ナイスだ』等と心の中で思いつつ、平常心を保つ。迂闊に笑ったりしたら、恐

らく膳は気がつく。

何を考えているか、そこまではばれない自信があるが、突っ込まれると困る。膳は一度俺を見て、そしてまた皿に目を落とす。そして恐る恐る手を伸ばし、一つ摘むと少し躊躇しつつ口へと運ぶ。この時俺は心の中でガッツポーズを取っている。

『やった！食った！』

「どうだ？」

「ん……分からないよ」

そう言いながら口が動く。顎が動いている。良く味わっている証拠だ。三人が食べ、「分からない」という。成は一番最後にそれに出す。

砂希羅と同様、ずっと掴むとポイッと口へと運ぶ。何とも面白い。警戒心という物がないのか。成の場合は全員が食べた後だから心配ないという点もある。が、砂希羅は一番手だ。

普通もう少し躊躇するのでは、と思いたいところだが、まあ毒ではないから、何も言わずとも良いだろう。全員が食べた所で俺も食べる。久しぶりの食感と味わい。

多少鮮度は落ちしてしまうし、味も落ちるが、まあこんなもんだろう。噛み応えもあるし、塩を振るう程度で十分な味わいになる。

「で？結局これはなんなの？ガート」

一人納得しながら指を舐めていると、膳が不思議そうな顔をして聞
いてくる。

「僕は食べた事無かったんだけど、何時こんな食材を手にしたの？」

「何言ってるんだ、お前も知ってるぞ」

「え？知ってる？でも食べた事なんて無いよね？」

はて、とまた首を傾げる。三人も、さっぱり分からず、また料理を
見て、そして考え込んでいる膳を見る。どれだけ見ても、三人は分
からない。膳は、ふとまた皿を見て、俺を見る。そして、はつとし
たかと思うと「まさか」と呟く。

「何だ？分かったのか？」

意地悪くそう問い掛けると、膳は言葉を濁す。

「ガート、お前まさか・・・あの生き物、か？」

顔面蒼白で、恐る恐る聞いてくる。それを聞いて三人は「あの生き
物？」と顔を見合わせる。俺は何より膳のその顔と反応が楽しい。

ああ、これだよこれ。この顔が見たかったんだ。

料理の材料は？

「正解」

「・・・っ!」

凄い形相で席を立ち、流しに向かう膳ぜんを寸前で止める。

「おいおい、どこに行くんだよ」

「離せ！気持ち悪い」

「ちゃんと食ったろう？今更何を言う、美味かっただろっ？」

「お前、嫌がらせにも程があるだろう?!」

そう言う膳の目は涙が滲なりんでいる。ちよつと遊びが過ぎたようだ。
成なり以外は、膳の様子を見て動揺している。成は、まだ皿を見ている。

「生き物・・・芋虫？」

問い掛ける様に呟く成。ずっと考えていた様だ。そしてそれは…正解。

「良く分かったな、大正解だ」

「芋虫？それって、あの畑に居る、野菜を食べてしまう虫の事？」

「それを、食べたのですか？僕等は」

成と俺の言葉に、二人はマジマジと皿を眺める。相当驚いた様だ。そして膳は、本気で気分が悪くなった様だ。暴れる事も無くなり、ぐったりとしている。あれ、やりすぎたか。と、少し反省。

「ガート、お前ねえ」

成の座っていたベッドに膳を寝かす。膳は唸る様に声を出し、俺を睨む。そしてため息を吐く。成を外し二人は、心配そうに見ている。

「脅かすにしても、やり方があるだろう？よりにもよって、芋虫って…」

元気が無いが、その割には良く喋る。相当ショックだったんだろう。口元を押さえる。しかめっ面をする。きっと、元の姿を想像して更に気分が悪くなったんだろう。

でも、元のあれも、中々美味そうな姿をしていると俺は思う。コロコロ太らせて、そのままでもいけるし、火を通して美味いし。いう事ない食材だと思う。

「あれだって貴重な栄養素だろう？たんぱく質っていうのか？一応肉じゃねえか」

「肉？あれを肉だって言うの？無茶言っなよ」

怖ろしく驚いた顔をして膳が叫ぶ。そして布団を被る。だが、今の世の中で、こんな虫だって食える。それを俺は知ったし、知って欲しかった。それに膳に食わせたかったのには、別に理由があった。

「膳、お前、唯単に芋虫嫌いだろ」

びっくり。と布団の中で膳が動揺しているのが分かった。凶星だ。

「おかしいと思ったんだよ、芋虫に関してはお前必要以上に敏感だったし、野菜を採りに行くのはいつも俺だったし」

「どうなんだよ？」と布団を突く。膳は、微動だにしないが、ゆっくりと布団から顔を出す。

「だってさ、怖いだろ？」

「は？」

「気味悪いだろう？あの模様とか、動きとか、関節も骨も無くて、あり得ない動き方じゃないか！触った時の感触も、もう耐えられない位気持ち悪い！」

凄いい勢いで言う。これには流石に成も驚いたようだ。幼も砂希羅も、目を丸くして、瞬きをやたらとしていた。

元に戻ってから、膳がこんなに喋るのは初めてで、大きな声を出すのも初めてだ。元々おっとりした性格だから余計に驚いたらしい。かく言う俺も驚いている。

「だから殺したんだ」

「そりゃ殺すでしょ？あんなに変な生き物」

「だが、俺達の野菜を食べて育ったんだ、変な物を食べてる訳ではないだろ？」

「まさか…試しに食べたのか？」

「お前が、石になってからな、暫く畑を放っておいたら芋虫がすげえ育ってて、美味そうに見えたから」

「何だよそれ」

がつくりと肩を落とす。確かに、きつかけなんて他愛も無い事だ。だが、色んな意味で勉強になったのではないかと思う。俺にとっても膳にとっても、今此処で育っている三人にとっても。

「何事も挑戦だろ？試してみなければ分からないだろう」

「そうだけどね、本当にガートには驚かされるよ、昔から」

苦笑いして言う膳。それを見て三人も安心したようだ。

芋虫の飼育（案）

「でも、まさか芋虫とは思いませんでしたよ」

「ねえ、でも意外と食べられるわね、膳さんが言うように見てくれはあれだけど、こうしてしまえば気にならないかもね」

そういうと二人はまた芋虫を食べる。珍しい物に引かない。膳^{ぜん}はその姿を見て強さも感じ取っただろうが、それ以上に気持ち悪い、という思いの方が勝っている様だ。まだ暫くは寝かせておこう。

「そのまま食べたって言うてたけど、丸ごとそのまま火を通さずに食べたの？」

「ああ、意外と口の中でプチッて弾けて、独特の甘みつつうのか、あるんだ」

「へえ」

「へえって・・・そこは突っ込むところだよ？」

膳が死に掛けた声で言う。だが、誰もそれに対して反応はしない。なるべく聞かないように心がけている様だが、気になっているのも確かのように、怖い物見たさともいうのか。

ちらちらとこちらの反応を気にしている。それを見てしまうと、思わず余計にそういった話をしたくなるのも、人の性という物だろう。

「今度試してみると良い、ただ体液が服に付いたりすると落とすの

は大変だぞ、なるべく一口でいける位の小さめの奴を捕らえて、食らった方がいいな」

「これみたいに炒めたりする時は、切った方が良いの？それともガートさんみたいに乾燥させてから切った方が良いの？」

「まあ、切らなくても炒めれば多少は縮むし、大丈夫だろう」

「切ったとしたら、その分旨味が逃げてしまいますよね」

「大丈夫だろ、一緒に野菜を炒めたり、穀物を炒めても良いし、旨味をそれが吸い込むからな」

最初は、膳を驚かすためだけに用意した芋虫だったが、意外にも幼おさなと砂希羅ジノは食いついて来た。流石、料理担当者だ。

成なりは何も言う事無く幾つか摘んでは食っていた。何とも無愛想な奴だ。それでも、何かを考えてはいるのだろうか、全く読めない。

「それにしても、芋虫が食べられるなんて、知りませんでした」

「お前等も殺してたのか？」

「殺しては居ないわ、気にしなかっただけよ、でも、放っておいた芋虫はどうなるのかしら」

「どうなる？」

「だって、死骸を見た訳ではないし、かと言って他の虫になったって所も見たこと無いし、どうなるのかしらって」

とても不思議そうに砂希羅は問い掛ける。確かに、俺もそんな事は気にしたことは無い。どうなるのだろうか。

「気になるなら、試してみれば良い」

後方から低い声が届く。久方ぶりに口を開いた成だ。ああ、喋る事が出来たんだっとな、などと思ってしまう。

「要は放っておけば虫がどうなるか、分かるだろう、捕らえて箱にでも入れて見るのもいいがな」

「飼育ですか？楽しそうですね」

ぱん、と手を合わせて嬉しそうに言う幼。だが、自分で提案をしておきながら成はムツとする。

「馬鹿を言え、そんな時間があると思っているのか？今日にでも修行が始まると言うのに、そんな余裕が何処にある！」

大声を出し、幼を罵倒する。その声に幼は怯み、俯いてしまう。それを見て砂希羅は「まあまあ」と二人の間に入る。

「そんな大きな声を出さないで、貴方が言っただんじやない、だから幼だって喜んで、それをそんな風に返しては可愛そうよ」

「あり得ない話で喜ぶな、自分の立場を弁えていない証拠だ」

「成が珍しくそういう事を言うからでしょう、良いじゃないちよつと位」

「お前がそうやって甘やかすから、幼は十五にもなって覚醒もしないんだ！」

怖ろしい剣幕で今度は砂希羅にまで悪態を吐く。相当いらついて居る様だ。

膳・ブラックモード

止めるタイミングを計っていると、ベッドの上で布団が動いている。ヤバイ。本能がそう知らせる。

「その位に、しておきなさい」

のそり、と起き上がった膳ぜんが、正座の姿勢で成なりに言う。その時、膳に向けられた成の目は、かなりの怒りを表していたが、膳と目を合わせた瞬間、身体が固まるのが分かった。ああ、飲まれたんだ。と、俺は察知した。

「八つ当たりで、そう幼おとなや砂希羅さきろを怒鳴るのはどうかと思うよ？確かに今は大切な時期だ、だからこそ三人の絆がとても大切だ、ここであんな喧嘩をしたところで何も良いことは無い、修行だって身が入らない、今君に必要なのは忍耐力と精神力だね」

そういう膳の目は、座っている。とても冷たい。何時もの膳とは全く違う目。雰囲気だ。これは三人に効くぞ。

俺だってこうなった膳を相手にするのはご免だ。正直辛い。深層心理で、怖い。実際言われて居る成もだが、他の二人も固まっている。

「お前もそれ位にしておけ、十分だろう」

ベッドまで歩み寄り、声を掛ける俺に対して、膳はやはり冷たい視線を向ける。この目は苦手だ。だが、此处で俺が引く訳には行かない。

「気分が悪いんだろう、それ以上言うと我に返った時に後悔するのはお前だ、そこで止めておけ」

俺の言葉にも、膳の目は変わらない。仕方なくその場に膝を付き、顔を同じ高さにし、素早く手刀で膳の後頭部を撃つ。

「あ」と、三人が口に出した時、膳は気を失い、俺の方に倒れこむ。それをまたベッドに横たえる。

「ふう、本当にこうなった時の膳は厄介だ」

ため息を付き、冷や汗を拭う。魂取られるんじゃないかと思うくらい、恐ろしい。立ち上がり、振り返ると、呆然とした三人が俺を見ていた。相当驚いたのだろう。俺を見る目も珍獣を見るような目になっている。

「大丈夫か？お前等」

「は・・・はい」

「凄い迫力、あれがああ膳さんなの？」

身体も声も、固まった状態で言う。何時ものぼんやりした膳と、あなつた時の膳は別人だ。多重人格とか、そういうわけではないが、たまに、本当に極まれにああなってしまう。俺も共に過ごした中では片手に余るほどの経験だ。

「まあ滅多に無い事だからな、もうこの先は無いだろう、怒らせる俺より怖ろしい相手だから気をつけてくれ、俺も疲れる」

「でも、ガートさんの方が強いんでしょう？」

「能力は上だ、生きてきた歴史も俺の方が上ではあるが、そんな事関係ない、俺の方が年上になろうと、膳は膳であり、俺達の関係は変わらない、沢山大切な事を教えて、与えてくれたのは膳だから、勝てない」

「へえ」と意外そうな顔をする幼と砂希羅。だが、本当にそうなのだ。本気になってしまったら、俺もある程度能力を出さないと逆にやられてしまうかも知れない。

心を、捕まれている様な感覚だ。最も、風前の灯となってしまうている膳の命では、俺と太刀打ちできる程の能力は使えない。故に俺が勝つだろうが、今は少しでも長く生かせるために、下手に能力を使わせたり、興奮をさせるのは控えないといけない。無意識のうちに能力を使われてしまったのはたまらない。

「あとな、成」

横になっっている膳を無言で見ていた成は、無表情のまま顔をこちらに向ける。他の二人に比べ、落ち着きが早い。驚きは誰より強かった事だろうが。何しろ、あの膳を至近距離で直視したのだからな。

「お前が言った事は一理あるが、それだけじゃない、覚醒は個人差がある、それは強制的に出来る事じゃねえし、しようとして出来る物でもない、お前だって良く分かってる筈だ」

「分かってる、当然だ、だが今そんな事を言ってる場合ではないのも確かだろう？」

焦っている。目は、とても強い。だが、言葉の端々から不安と恐怖すら感じ取る事が出来る。自分とあまりにも違いすぎる弟。

能力すら見てくれと同じならば、まだ救われよう。だが、違う。それだけは弟、幼の方が高いのだ。それも分かってるからこそ、苛立ち、恐れ、葛藤しているのだろう。

幼さえ覚醒していれば、こんな事にはならなかったかもしれない。そう思えば思うほど、苛立つのだろう。

そしてそれを促せなかった自分を、恨みさえするのだろう。

武器について

「鍛え上げていく中で完璧に覚醒をするかも知れない、あくまでそれは可能性であり、というだけで絶対ではない、賭けの様なものだ、それでも、このまま時間をかけて覚醒を待つだけでなく、身体だけでも鍛えあげ、覚醒を終えた時、それに似合うだけの体力をつけておくんだ、少なくとも武器は成長をする、そういった仕組みになってるからな」

「武器の成長？」

不思議そうな声で幼が問い掛けてくる。そう、武器は二人の武器。
成だけのことではないのだ。

「そうだ、元々は膳の兄的存在が造った物だ、それに俺が手を加えた、最初に結界を強めに張っておいたのはその武器自体がとても強い力を持ってしまっていたからだ、秘石という、秘めたる能力を持った石を加工したのだ、それ故に、持つ者に合わせて武器も成長を遂げていくのだ」

「要は、新しい武器は一生要らない、という事か？」

「そうなるな」

秘石は、誰でも持てるものではない。その上、とても珍しく、俺は館以外でそれを見た事はない。実際、膳の兄弟分は怖ろしい勢いで食いついて来た事もあった程だ。まあ誰が見ても綺麗な石だと思っうが、それだけではないのが何よりの特徴だろう。

「武器よりも持ち主であるお前等が弱くなれば、武器に食われる、侵食される、そうなたら最後だ、武器に身体を乗っ取られ、自分の意志では動く事も出来なくなる、そうなりたくなければ常に強くある事だ」

「食われる・・・」

武器を眺め、呟くように言う幼。勿論、嘘だ。そんな物ではない。だがその位脅かしておかないと成長できない。それに、そんなあり得ない事を信じてしまふあたり、やばい証拠だ。

「形も変わっていくのか？綺麗な形をしてはいるが、形で言い現すならば、鉄板の様だ」

「根本的に形はそんなに大きく変化は無い筈だ、だがお前達が俺の想像を越える様な成長をすれば、武器もまたそれに見合った成長をするだろう、そんな事が起これば、俺も面白い」

まだ見ぬ武器を思い描き、笑みが零れてしまいそうになる。何よりこいつ等の成長が楽しみなんだ。時間に限りが無ければ、それこそ根本から仕込みたい。そういう思いで鍛えて行く。複雑だ。何回考えてもこれだけは残念でならない。

「ガートさんも膳さんも、ゲーム感覚で考えてます？」

不審そうな目をして幼が問い掛けてくる。中を読まれているのか？心眼を持ち合わせるものなんて早々居ない。実際、そうではないとは言えないが、遊びではない。膳に関しては命を懸けているのだ。

「俺に関してはどう思ってもらっても結構だ、膳の事は俺に言うな、

俺には分からない、だが…」

「はい？」

「悪く言うならば手加減無しでお前等を潰すからな」

「…はい」

先程の膳の時同様、固まる。膳は俺の命と同等。その命を捨ててまで庇う命。想いが通じなければそれは報われない。

それではあんまり酷すぎる。命の重さは、こいつ等も分かっている。だから、最後には理解するだろう。俺の思いも、膳の願いも。ふと、ベッドに横たわる膳に目を移す。寝ている。

朝から強烈なショックを受けて精神的に参ったのだろう。最も、それを与えたのは、俺だが。今度は唸る事もなく、静かに呼吸を繰り返す。

後僅かしか生きられないなんて、誰も思わないだろうその寝顔が、胸を切り裂かれるような思いだ。

『お前の思い通りになんてならないだろう、でもお前はきっと貫くのだろう、今度こそ後悔をしないように』

叶えてやりたい。俺が手を貸すことで、力を貸すことでそれが可能ならば、あの惨劇を二度と繰り返さないために。じ、と眺めて居ると少し寝返りを打つかのように身体を動かす。小さく声もする。「うう」位の、何の意識が無くても出るような、そんな感じの声だ。

「ああ、ガート」

ふ、と目を開くと、俺と目を合わせ笑う。寝起きの笑顔は、何時もの笑顔と違い、ほっとする。目覚めてくれた喜びと、何と言ったら良いのだろう。

子どもの様な、幼さが見える感じた。膳は目を擦り、ゆっくりと上体を起こす。そして暫くじっとして、それから辺りを見回し、「あ、そうだった」と呟いた。

「ガートの料理で落ちたんだね、僕」

都合の悪い事を思い出したようだ。勿論、俺にとつての、だ。成は、膳が目覚めた事で先程の事を思い出したのか、空気が固まるのが分かる。顔を見なくても、今成の表情も硬くなっているのが分かる。素直な反応だ。

「お前だけだよ、気を失うほどショックを受けたのは、ガキ共は食ったぞ」

「嫌だなあ、凄い勇氣だよね、あれを食べるなんて、幾らそれすら大切な食料だって分かっていても、躊躇っちゃうなあ」

ため息交じりで頭を掻きながら言う。こういう所を見ると、本当に変わっていない。それに心が和む。そう感じ取るのは俺だけじゃないだろう。

先程の鬼気迫った膳とは違い、ほんわかとした膳を見て、三人も安心している。特に、成が。見るからに安心はしていないが張り詰めた空気が解けた。

膳は決して怖ろしいくらい能力が強い訳ではないが、こうしてそこに居る者達を安堵させる力がある。そういう暖かい空気を作り出せるんだ。それも、また特殊な能力だと俺には思える。何しろ、俺にはないからな。

「どれ位寝てた？僕」

「さて、十分か、二十分か、そんなモンだろう」

目を擦り、瞬きを繰り返す。そして俺に & a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まり、ベッドから降りる。気を失う前に座っていた椅子に向かいまた腰を下ろす。

俺の役割は手すりだった様だ。膳は、まだテーブルの上にある皿を見る。元からそんなに沢山作ってあった訳ではないが、もう無い。

俺は一つも食ってないから、三人がそれだけ食べた事になる。膳は、一つ息を吐く。それが安心なのか、残念なのか分からない。

身を乗り出してまで見ていた所を見ると、まだ興味があつたのかも知れない。まあ、人とはそういうものだ。怖いもの見たさがあるんだろうな。

修業開始

「それじゃあ、お昼も済んだ事だし、修行に入るかい？」

椅子にゆったりと座り、背もたれに背を預け、笑顔で問い掛ける。確かに、時間が勿体無いから直ぐにでも始めたいのは山々だ。

「修行をするとしたらどこでするんだい？」

「予定では、庭先、もっと荒地でもいいんだがな、結界から出てしまつと連中に気付かれてしまつ、そうなると修行どころではなくなつてしまつからな」

半径五キロ程度の結界。あまり家の近くで暴れて、家を壊してはまた困る。地形に問題があるなら崩してでも作れば問題は無い。

その位で結界は解けないだろうし、多少歪んでも問題は無い。ただ、問題なのは結界が五キロしかない、という事だ。

もう少し広めに描いておきたかったのは確かなのだが、何しろ時間が無かった。即席の仕上がりなのだから、多少仕方が無いと言えよう。

「取りあえず、基礎体力をつけないと話しにならないからな、庭で十分足りるだろう」

「そう、僕は砂希羅ひろとまず話をしないとね、これからの事もあるから」

「じゃあ、取りあえずあれだ」

ガチャ。と剣と槍を持つ。そしてそれぞれを幼と成おさななりに向ける。それを不思議そうな顔をして見つめる。

「各自武器を持て、修行だ」

何も言わずそれを受け取った二人に、単刀直入に告げる。そして理解し切れていない顔をしている二人を連れて家を出る。砂希羅はそれを見送り、部屋に残って居る膳と話をする。

「じゃ、手っ取り早く、素振り百回」

「は？」

家の前。並んで立っている二人にそう発すると、二人揃って目を丸くする。その手には武器を持っているが、まだ少し重いように見える。

「ああ、間違えた、千本だ」

「せ、千本?!」

啞然としている幼の口から言葉が落ちる。成は、何も言わずただ自分の腕と武器を見る。さあ、何回までいける? 百位いけないとこの先の成長がたかが知れていてつまらねえ。

「構え、それくらい分かるだろう?」

「分かるだろうって、槍と剣じゃ構えも素振りも違うだろう」

「違う、だが、素振りは素振りだ、突きでも良いぞ、槍はな」

「突き・・・」

「さあ構えろ、血反吐を吐く位の覚悟はして臨め」

「始め！」

「ああ、素振りが始まったねえ、あの子達何処まで耐える事が出来るかな？」

「大丈夫です、何だかんだ言っても、あの二人はシグマの血を引いているんだから、耐えられるわ」

家中、二人が何とも仄々と会話をしている。砂希羅は、今のところ誰より強い。それは精神的な部分だ。流石に、幼が顔面右をばっさり切られ、癒えていない時は自分の能力の足りなさを嘆いていた。だが、それをバネとして強くなる。そして日に日に広がっていく、あの鎖骨の染み。もう直ぐ時は満ちるのだ。目の前で早くも汗を流しながら素振りと突きを繰り返す二人を他所に、俺は家の中の音を聞く。

「砂希羅、君は自分の一族の事をどれだけ知ってる？」

「私達癒しの者は、シグマの一族を護るため、そして護ってもらう

事で生きてきた弱小の一族よ、女性は皆、鎖骨の中心に模様がありそれが一族を見分ける術、逆に言えば『癒しの者』と看板をつけているような物ね」

「そうだね、確かにそれは目立つし、分かりやすい、それ以外は？その模様は他に何を意味しているか分かるかい？」

「それ以外？」

砂希羅の語尾が上がっている。分からないのだ。膳はその模様を見て、砂希羅は考えを巡らす。

「君のお母さんは、どんな風だった？」

「・・・強い人だったわ、私によく言っていた『私達はシグマを護り、護られる事で生きている、辛いけれど、でも自分が生まれたこの世界を、恨まないで、女でも強く生きるのよ』って」

胸に手を当てて語る。幼い頃からずっと見続けてきた母というのは、どれだけ強かった事だろう。だが、ならば見ている筈だ。遅かれ早かれ自分にも訪れる、それを。

「砂希羅、君は癒しの者、だからこそあの二人とも、他の種族とも全く違う能力を持つ、だからこそ・・・起こることがある、君の身体から石が出てくる、もう時間の問題だ」

「石？」

膳の言葉に、砂希羅はふ、と意識を遠のかせる。記憶を辿っているのだろう。そうすれば、絶対に辿り着く筈だ。母親の鎖骨の辺りに

何が起こっていたのかを。癒しの者は、子を産み落とし、それが女兒であった場合、それに能力を全てと言って良い程与えている。

それ故に、そんなに長命ではない。だが、シグマの民もそんなに長命ではない。結局はお互いが居ないと生きる事が出来ない。そう歴史の中で繰り返され、バランスよく保たれてきたのだろう。

だが、例え子に与えてしまったとしても、一つだけ無くならない物がある。それが石。死んでも取れず、死した後は能力を失う。それは第二の心臓。癒しの者は、その石に祈りを込め、命を削り、シグマの民を護る為に生きるのだ。

「綺麗な石があつたわ、薄紅色の」

「そう・・・僕の言いたい事が分かるよね？」

「ええ、分かるわ…だって私は癒しの一族だもの」

そういうと砂希羅は両の手を胸の前で合わせる。まるで祈るかのように、静かに目を閉じる。穏やかな空気だ。外の、この二人とは全く違い、何かを見据えている。目の前で素振り続ける二人。もう息が上がり、汗が滝の様に流れ落ちている。

「声出せ！気合が足りねえぞ！」

腕の血管が筋となり、浮かび上がっている。筋肉がビキビキと音を立てているのが分かる。色の白い幼は、血色がかなり良くなり、真っ赤な顔をしている。

勿論、成も凄い顔をしている。重量十キロは下らないそれを、振り

下ろす。そして上げる。その繰り返しを延々と行っている。

「197・・・198!」

呼吸を正す事も出来ず、必死で数を数える。まもなく二百回を超える。まあそれ位は出来てもらわないと困る。だが、初日にしてはマシだろう。

修行初日

「石は、もう直ぐ出てくるわ、分かるの、最近、とても違和感を感じし、痛みもあるわ」

そう言うとき砂希羅は鎖骨の辺りを手で触る。そこから小さな鼓動が聞こえてくるようだ。その場に居なくても、俺にも分かる。

そして膳も、それを見て穏やかな顔をしている。恐らく膳もその音を聞いて、安堵しているのだ。外に居て、ましてや素振りに必死の二人には届いていないようだ。

腕の動き、脚の動きが徐々に鈍くなっていく。一度振り下ろす毎に、また上げるのに時間が掛かる。最初の二倍は優に掛かっている。幼は、立っているのもやっとな様子で、成は意地と忍耐力で必死に続ける。そうは言っても、三百には満たない。

「石が出たら、私は一人前になれる、そうしたら成や幼の力になる事が出来るわ」

「君は、今までだって力になってるじゃないか」

「いいえ、私は足手まといよ、実際『都市』にも浚われて、私が人質となっていたから幼は右目を失った、私がきちんとしていたら起こらなかった事、いつも私は護ってもらってばかり」

そう言って石があるであろう所で拳を作る。悔しい、とか悲しいとか。そういうのとは違うのだろう。申し訳ない。そうった空気が伝わってくる。だが、この二人だって、砂希羅にいつも護られている。

何をしてもらったから、という訳ではない。傍にいてくれる、唯それだけで、大きく違うのだ。もし兄弟しか居なければ、滅びていたのだろうから。此処まで強くなる事も無く、また強くなるうと思う事もなかった。護りたいと思う者が居るから、人は強くなれるのだ。

「に・・ひやく・・はちじゅ・・」

ズシ。と重い音を立て、成は前のめりに倒れ込む。幼は、立つては居るが槍に縋りつき、もう足がいう事を聞かなくなっていた。

「回数として、成二百八十七回、幼、二百十六回・・こんなもんか」

他人事のように呟くと、やっとで立っていた幼が崩れた。しかし、凄い格好だ。全身汗だく。動いていた範囲も地面は見事に汗が溜まり土が軟らかくなっている。そこに倒れているのだ。泥だらけになっている。

「終わったみたいだね」

「え？成！幼！」

家の中から外の様子を伺っていた膳が呟くと、砂希羅が血相を変えて椅子から立ち上がり、玄関を壊すのではないかと思う位の勢いで突きはね開け、飛び出して来る。二人に歩み寄り、その顔を見て安心するのが分かった。

二人は、疲れ果て、力を使いきり、眠ってしまったのだ。並んで素振りを始めたが、最後には多少の幅が出来ていた。砂希羅は、

二人の手を取ると、自分の胸の前で、自分の手とあわせ、祈る。

「どう？あの二人」

「ああ？まずまずだな、だが…良い光だ」

「そうだねえ、あれが癒しの能力だよ」

窓から声を掛けてきた膳と、祈りを捧げている砂希羅を見る。その身体からは柔らかな光が発され、ボロボロになっていた二人を包む。怪我は倒れこんだ時にしたくらいだが、その傷が見る見る内に消えてゆく。

「聖母マリア、ってか？」

「ふふ、そうだね、もう直ぐ覚醒が始まるよ、あの子は」

「一番早くに仕上がるか、まあそうでないといけないな、修行はこれから幾らでも激しくなる、半死の状態になったら砂希羅が能力を使えないとあの二人は死ぬからな」

「その辺は上手くやってよ」

「は、冗談言うな、俺は今の状態で十分軽めにしてやってるんだ」

「でも、頑張ったんじゃない？まだ慣れていないあれを使って、二人とも二百回以上出来るなんて、ねえ？」

嬉しそうに俺に問い掛けてくる膳。確かに、百回も続けば良いほう

だと思っていた。その倍以上できた。それは俺の想像を大きく上回り更なる成長を楽しみにさせてくれた。これから、本当の勝負だ。

「二人とも、頑張ってた？」

幼と成の手を持ったまま、砂希羅が問い掛けてきた。その目は、とても強い者の目だ。「ああ」と、頷くと、「そう」と笑う。そしてまた二人を見る。その寝顔が、とても幼く、まるで子どもの様だ。

実際子どもという括りにある幼。決して大人とは言えない成。まだ成長途上の、子どもなんだ。そして、俺や膳も、この年頃にはもう、争いを知っていたのだ。

そう考えると、なんと嫌な世の中だろうと思えてならない。此処まで追い詰めている『都市』を思うと、絶対に潰して置かなければならない。より強く、そう思う。

「今日は此処までだな、復活はしないだろう」

「そうだね、うつすらと暗くなってきたし、ね」

日は随分と陰り、太陽というよりは夕日に近くなっていた。そんなに時間が掛かったようには思えなかった。だが考えてみれば、始めた時間がそう早くなかったのだ。日が暮れるのも早く感じるだろうな。

成と幼の脇に一緒に倒れている武器を拾い上げる。俺が持ってみても少しは重みを感じるそれは、封印した頃とは違う光を発している。恐らく、やっと表れた主人に使って貰えて喜んでいるのだ。ほんの

少し触れるだけで分かる。それだけ喜んでいるのだ。

「泥と汚れた衣類剥ぎ取って、寝かせるか」

「そうだね、とても汚れてしまっているから」

そういうと膳も外に出てきて、剥ぐのを手伝っている。俺は武器を家の中へと運び、その後成を抱える。流石に砂希羅や膳では運べない。

下の段に成を放り投げ、砂希羅と膳が抱えてきた幼を上転がす。これから毎日こうか、と思うと、この二段ベッドというのは何とも使いにくい。決して小さくは無い成と、小さいとは言え幼児とは違う幼を放り込むのはちとキツイかも知れない。

「有難う、じゃあ私は帰るわ、また明日」

笑顔でそう言う足早に去って行く。部屋が一気に静かになる。耳に入ってくるのは、二人の寝息だけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0156h/>

南の館の物語

2010年10月19日22時16分発行